

巫女騎士

聖の聖なる “ばらす・あふれいあ・いりやぬ” に虞々^{おそれおそれかしこ} 畏み^{かしこ} 歸命^{きみよう}し奉り候らふ。弥栄^{いやさか}
あれ、龍のごとき大いなる肯んじをし給ふ真実義よ、すべてを網羅し給ひ、遺漏なき真究
竟の真実義よ、若く^しこそしあれ。

※ 若と書いて「しく」と読むのは、そもそも是れ巫女の象形^{みこ}で、髪を振り乱し、トランス状態にあることを表
し、神の言葉を預かるとき(預言)のさまである。すなわち、神の言葉はそれとおりに実現するところから「しく(あり)」「^いと^し」と読むのである。

第○章 零以前 啊素羅神族の天の皇帝 彝啊四厨御神の臣 亜沙羅偉の分御霊

真究竟神なる啊素羅神群。この最古神群を統べる、天の皇帝神たる神彝啊四厨御の臣に、亜沙羅偉という姓の族がある。族長の分御霊である彝配璃啊濡女神が唐突に、濃緋の非文字の彫られた、直径一メートルの、聖の聖なる石の上に、光の降臨とともに顕現した。

唐突とは、経緯もいわれもないことである。理由も要らず、即物的な露骨、ぶっくら棒な非情である。ただ、ただ、現実であるということである。

由来も理由も意味も原因も意義もない。かつて、宇宙の生誕がそうであったように。いや、それを「かつて」と言えるか。

すべての現象と、その運動は宇宙の生誕と同時に生じた。時間も空間も。物理的な法則は、それ以降、存在するようになった。よって、それ以前には、因果律もなかった。

原因も結果もなく、原因と結果とを結ぶ時間性もなかった。ビッグバンは未来ですらある。

いりやぬ神は自在、自らるる、自らるることに因って在る、自らあらわれることに因ってあらわれ、それは自らへの荘嚴である。自らを肯定し、称讃し、いりやぬ神の真言を咒す。

『唵、ぱらず・あふれいあ・いりやあぬ、吽』

言葉は黄金の霧を孕んだ帯となって、リボンのように身体を廻った。

いりやぬ神なれば、奇しき美しさは人間の領域を遙かに超えている。あまりに眩く燦めきて、認知不能なほど、甚深繊細緻密精妙。

美は麗々しきや完璧さと言うより、切ないまであはれ、たをやかに紗々やか、初々しさ、生命の鼓動であった。

生に涵され、生命に漲り充ちあふれた、生れ初めの軟らかで滑らかな皮膚、伸びやかな四肢。

纖く哀れ儂くも、萌えいずる芽のよう。又熟さぬリンゴのように青くかたくも、しなやか柔らかな、くるぶしの腱は思春期の少年のようでもある。

かがやく
焼 それ、燦々たるかな。凜々と睿らかに、玲々と晰らかに、爛々と彪らかに、光氾濫し、赫奕たる女神であった。

魂たるべき神髄は双眸にある。

太陽のごとき光芒を放つ、双つの円い炎は眸、ムリオン（ゴシック建築の大聖堂の薔薇窓などを放射状に分割する棒状の石素材）とトレーサリー（ムリオンなどで幾何学的に構成された透かしのような構造。コンパスなどでトレースし、構図する）で装飾された薔薇窓のように、海よりも遙かに豊かな青の群れをなし、それぞれがすべて異なる青の調べを湛え、その織やか微妙なる精緻のハルモニア、紛れもなく神なる旋律であった。

しかも、眸の虹彩は単純な放射状ではなく、ムリオンとトレーサリーで仕切られた青碧蒼葱藍紺青紫空色水色海色のステンドグラスのごとき、そのモザイク状の模様は平面ではない。海のごとくに幾重にも重層し、奥深い燠火のごとき炫きをなし、青く透き通った奥行きの、立体のモザイクであった。

瞳の孔の水晶体は無際限に透り、（我々は透明な空間と言うと、どうしても銀色の背景を思い描いてしまうが）背景を持たず、永遠に逝きて尽きず、涯がない。いずれへも結びを遂げずに、いずれにも収まらぬ未遂不収。

その透明さはあまりに純粹無欠で、生が滅却し、滅尽してしまうほどの無菌。肅たる純潔、畏れ怖れ懼れて慄くべき、真の真なる真空であった。

神聖なる明眸を飾る睫毛は曼珠沙華やシャクナゲの花のおしべのように細く長い。動く時にはアゲハチョウの羽が舞うかのようにあでやかであった。

真つすぐなる髪は、瞭らかなるプラチナ・ブロンドや、濃い山吹・鬱金・辛子色や、金箔のような雲英びやかさ、金泥のように濃くも角度によってキラリとする底光りや、黄昏の茜を帯びた黄金にも似たる色、晰らかな濃い蜂蜜の色や、光射たる太陽の爛々たる眩さなどなど、それらさまざまな光の質やら、燦めきの強度やら、色彩の濃淡の金色から織りなされる豪華莊嚴にして、捉え難き繚乱、過剰なる、繁文縟礼にも似た光燦燦の横溢である。

その華奢でありながらも奢侈な髪は、か細く瘠せた熾い身を、未だ小枝にも似たそれを蔽うかのように垂直に墜ち、地へ触れたるも、前髪のみは眉の下、はっきりした瞼の線の上で、水平に切り揃えられ、翳りがあたかもベールのようにであった。

いりやぬ神がかくのごとも、猛吹雪のさなか、山の高きところ、急傾斜に蔽たる聖なる石の上に降臨したのである。

誰にも知られることなき、聖なる少女神の顕現であるはずであった。

だが、誰にも知られぬにも関わらず、その聖なる石を目指し、駈け上がり来たる者があ
る。

耳を劈く、幻想にも似た、荒れ狂う雪のホワイトアウトのさなか、近づいて来る者であ
った。あろうことか、このような真夜中に、冷厳な、嶮しき山岳地の奥へである。

第一章 イノグ村の巫女騎士イシユタルーナ（彝咒太壟喃）と傭兵ラフボワ

雪を蹴散らし、大山脈の急斜面をかける一人の少女、二の腕や太腿や胸元には刺青があ
った。聖句が装飾的に彫られ、金箔のように輝く。聖紋の長剣を、真咒が浮き彫られ、鉦
を打たれ、聖句を金で象眼をした拵えの鞆に収め、太い革ベルトに留めた鎖に吊るして佩
いていた。二の腕に革のベルトで、小さな楯を留めている。

楯には精緻に彫られた蜥蜴の紋があった。蜥蜴の背に移ろう青い霓の艶は、移ろい易い
現象世界の遷移の象徴であり、現象を解析する神官の紋であった。

イノグ家の紋章である。古き天文占星の家柄で、かつイカルガーノ王国の旧臣、イノ
グ村に古く住む氏族であった。

「エミイシの氏族らとその主従、連射式の弩を持った兵隊ども、羚羊に乗った騎兵ども、
赦さん、絶対に赦さない、たとえ、死して肉は朽ち、骨は砕けようとも、鬼神となつて復
讐する」

イノグは古いしきたりと宗教と伝統を固持する旧家である。鬱蒼たる麓の森に社を隠
し匿っていた。神懸かりと審神者によって、啊素羅神群の言葉を預かる。

当主にして族長のヴォーンは古代の厳肅をもって身を莊嚴する豊饒たる古老であるが、
謹厳なる彼に逆らう者は古参の旧臣にも少なかった。

しかし、時代とともにその潮流も変化が見られ、ヴォーンは渡来人の末裔である氏族を
苦々しく思い始める。

ここ数年、新たな勢力として力を伸ばして来たエミイシ家を嫌悪し、怖れ、蔑視してい
た。逆にエミイシにとってすれば、イノグは眼の上の瘤のような存在である。両家は反
目し合い、一触即発の状態であった。

イカルガーノ国の王都フジワラの、素朴な木造の王宮にて、エミイシの当主シエミの長

男、長髯を尊大に伸ばすソシン・エミイシは王に直訴し、激しく眼を剥く。

「進んだ文化を持った国、大陸の神聖シルヴィエ帝国を範とすべきです。人間中心主義、理性主義、ロゴス主義、実証主義的科学精神、それこそがシルヴィエ聖教の神髄です。彼の国の宗教を取り入れましょう。聖者イキの教えに従わなければ、先進国とは言えない。通商にも支障を来す。」

我が国も、大国の文化や技術を受け入れるために、人を招き、改宗し、進んだ国家制度を真似るべきだ。理性と科学に基づく価値観に切り替えねば。そうしなければ、生き残れない」

古老ヴォーン・イノーグは憤激した。

「愚かな、古来の神を捨てると申すか。若造が何も知らずに狂気を言う。」

国家が今日あるは神の力ぞ。真実義のお陰ぞ」

ソシンは嘲り、

「古臭いことを。これからは、科学の時代ぞ。」

神に祈って雨が降ったか。神に祈って死者が甦ったか。病すら平癒しない。

天文占星奇門遁甲は詐欺師の集団だ」

ヴォーンは絶句した。神への冒瀆。さような言葉が言えるはずがない、許されるはずがない。犯してはならない領域を犯した。そして、自らの家が侮辱されたことに気がつくまでは、二秒ほどかかった。

「ううぬ、何を言うか、貴様、恐れ多いことを、我が一族を侮辱するだけならまだしも、天罰が在らん。いや、神の名において成敗してくれるわ」

そして、憤然と帰ると、イノーグ村までの二十キロメートルほどの距離を古くからの友である大鷲の背に乗り、数分で帰り、伝統の剣を取って、祈祷し、一族郎党に武装を命じた。

「戦じゃ」

たちまち、恩顧兵が集い、酒が振舞われる。翌朝には、出陣の用意が万事整うはずであった。しかし、古来の習を護ることは不利へと繋がる。

実践主義の敵の動きの方が遙かに早かった。

ソシンはフジワラからイルカまでの十数キロメートルを翼ある龍で戻り、予め重装機甲兵を用意していた弟マハルコに命じ、イノーグを襲撃させる。

この様子を見ている者たちが多数いた。

一に、ソシンが依頼した應龍（翼ある龍）の一族が属する龍族。彼らはソシンに与した。ちなみに、龍族一般の睿智は龍智と呼ばれ、人間を遙かに凌ぐ神の叡知である。

二に、飛ぶ種族であるガルダ（迦楼羅天）の一族。彼らも龍族に近い叡智がある。

三に、翼ある亜人族、大鷲族である。進化の過程で鳥のごとく翼を得た人間で、知恵は人と同じ、イノーグ族とは古来親交があった。

又、一部の夜行性の半獣半人や半獣神や巨人族が見ていた。他にも、オークやドワーフやゴブリンやエルフやドワーフの類が見ていたが、彼らは人の愚行を嘲るのみである。

大鷲族の將軍ツルゲーノフは斥候の知らせを受けて、状況を把握、察知するや、直ちに旧友へ告げに翔び立つも、既に遅し、間に合わなかった。恐るべき業火、哀れ、ヴォーン・イノーグとともに、その妻、ユグドー村から嫁いできたユレイアーナも、一度は運命に翻弄され、失いかけて辛くも保った命儚く、このイノーグ村でようやくつかんだ幸せではあったが、二十年にも足らず、非業の死を遂げる。

夜の奇襲によって、イノーグ村は壊滅した。

雪を蹴散らして疾駆するヴォーンの娘イシユタルーナは息を切らせ、意識が遠のきそうになりながらも、まっすぐな黒髪を流旗のように靡かせている。

彼女は神に仕える少女騎士、巫女騎士であった。村が焼かれ、魂が裂かれ、猛吹雪の漆黒の中を、ここまで疾駆して来たのは、死を免れるためではなく、凌辱を逃れるためである。

家族を殺され、生きる望みを絶たれた彼女は死を覚悟していた。聖なる地の聖なる岩に、究竟の命を散らし、生の証とせんとする、悲愴で激烈な決意である。ただひたすらその執念で生き、鬼神のごとく、半ば魂魄と化していた。凄まじい執著で、どうにかここまで辿り着く。

だが、そんな彼女でさえ、眼前に突如現れた女神降臨の、驚天動地の奇蹟に遭って驚愕した。

「あ、あゝ」

天降りし光の柱は降臨が済んでもまだ天と繋がり続けている。そこに炎のごとく立つ、この世ならぬ少女。哀れな虫けらでも見るかのように、こちらを睥睨している。

いりやぬ神の降臨、これほどあからさまに、これほど明瞭に、顕かに神を見たことがなかった。彼女たちの世界において、神とは、暗い岩屋か、枝や草を葺いた竪穴式家屋の奥に微かに顕れるものである。

「これは、いりやぬ神、あゝ、間違いない、この神は」
すぐにわかった。

天文占星を学び、真理と聖なる系譜に通じた彼女には、それがアスラの一種族であるアサライ族の長の分け御霊であることを、論理の系譜を超え、直観のごとくに悟ったのである。

感情があふれた。爆発し、暴風雪もかき消し得ない、絶叫に近い叫びで訴える、滂沱の涙とともに、

「いりやぬ神よ、救い給え、正義の裁きを」

少女神は冷たく笑った。苦悩する者の悲痛な叫びなど聞かず、全身の太陽のごとき燦めきを鎮め、雪の闇に消えるかのごとく沈む。華奢な容姿に似合わぬ厳かな声、

「汝、朕に仕えよ」

「しかし、この命は敵に追われ、今や尽きようとしています」

「さような事情など知らぬ」

いりやぬ神が知らぬはずはない。扱うべき必要もないと言っているのである。

その冷厳たる言葉と同時に、近くに追手の喚く声が聞こえた。真夜中の猛吹雪の中であっても見える、微かな雪の光を反射し、キラキラ光る刃が十数。又、風にちぎれそうな松明の火が数本、弓や槍や大剣を明々と照らしていた。

イシュタルーナはきつとにらみ振り向き、眼の焰をかつと熾やして、キラリとねめつけ、金の刺青を滾らせ、憤りと憎しみの炎を噴き上げさせた。

「地獄の犬どもめ」

野蛮で粗野な革鎧の騎兵たち、傭兵である。雪の積った岩の上を、自在に走る大羚羊に乗っていた。

こちらを指さし、

「あれだ、あそこだ」

そう口々に雄叫びながら、エミイシに雇われた傭兵たち、殺戮をあふれ滾らせ、登り迫って来る。だが、その時であった。

いりやぬ神の眸だけがキラリと光る。

一瞬、強烈な日が昇ったかのようにであった。だが、それはすぐに、篝火ほどの明るさになった。それでも、傭兵たちの革鎧や衣に光の残滓が粒となって附着しているが。

「おい、何だ、これは」

「見たこともない、どうなってるんだ、おい」

「いや、それよりも、あれを見ろ」

「え、何だ？」

「何がある？ 何もない」

「いやいや、待て、あっちだ。ほら、見ろ」

「おお、女だ」

「あんな所にいやがった、巫女騎士め」

「手こずらせやがって」

「おい、待てよ」

「あ、あれは何だ、あの光は」

その男は斜面の百数十メートル上、いりやぬ神がいるあたりを指さす。その瞬間、鎮まっていたいりやぬ神の全身の光が再び激しく燃え上がる。

「うわ、わあああああ」

「眩しい、何も見えない」

「いや、あの光の中、微かに薄い影が。何かいる……」

傭兵の誰もが羚羊を止めた。

イシュタルーナは一人でも多く殺さんと、見事な聖紋の長剣を抜き、楯の蜥蜴をちらちらと揺れる炎のように光移ろわせ、悲愴の死を覚悟し、瞑目しつつ、聖咒を唱える。金の聖句の刺青が螺鈿のように複雑な燐光で、凜々と燃えた。

「龍のごとく肯んじ給う、真究竟の真実義よ、すべてを網羅し給う、真究竟の真実義よ、若くこそしあれ」

この時、突如、半跏趺坐に坐していた女神が動いた。降臨した時のように、再び石の上に立つ。

「おお、何と」

羚羊に乗る傭兵たちは初めて気がついた。激しく燦めきながら動く光の輪の中に、殊更に濃く^{かがや}く輪郭を以て立つ、いりやぬ神の存在に。

「おい、見よ、石の上の凄い光の中を、人の形をした何かが、あれは」

「太陽が落ちたみたいだあ」

「そうだとも、神だ、そうだ、違いない」

「何だと、何ゆえに神が、奴が召喚したのか」

「ええい、狼狽えるな」

「ならば、おまえ、往け」

「ふざけるな、何事も命あつての物種よ」

イシュタルーナは蜥蜴の紋の楯を構え、聖紋の長剣を抜いた。

いりやぬ神がちらつとまなざしを遣っただけで剣はパツと火が点いたかのように、光
燦々と輝く。

「見ろ、女の剣が燃えている」

「神だ、俺はごめんだぜ」

「バカ、逃げるな」

しかし、一人が行けば、次々逃げ崩れていくのは人の性だ。

「ううわあああ」

恐怖に駆られ、一目散に逃げ出した。

「卑怯者、逃げるか」

飛ぶように襲い掛かる。たちまち斬殺、十数名。

さらに追おうとすれば、

「待て、巫女騎士よ、朕に仕えよ」

「しかし、いりやぬ神よ」

「逆らうなかれ」

その言葉に巫女騎士は長い髪を垂れて項垂れ、

「言うまでもないこと」

イシュタルーナは跪いた。巫女騎士は知らなかったが、逃げた果せたと思われた兵二名
は、数百メートルも逝くことなく、力尽きて死し、吹雪に深く埋もれて、数年後にも見つ
かることがなかった。知らぬイシュタルーナは無念であつたが、気持ちを変え、私情に走
ったこと（人としては、已むに已まれぬ感情ではあるが）を大いに悔悟し、感謝を奮い起
こし（そうすることが正しいと彼女が信じたから）、

「申し訳ありません。あゝ、いりやぬ神よ、感謝いたします」

その時、ほんの一刹那、吹雪が止み、静かな光が彼女に降りた。崇高な感情が湧き上
り、清らかな解脱を観ずる。いりやぬ神の表情は相変わらず冷厳で、非情なままではあ
ったが。底知れぬ凍てつきの、深淵のごとき冷厳。

だが、彼女の受けた寂滅為楽の横溢は、いりやぬ神の氷のごときまなざしを受けても、

妨げられることもなく、イシュタルーナは萎縮することも畏怖することも憂慮することもせずに、頭かなる祝福を感じた。大いなる恩寵が漲る生命となって体を廻る。

「あゝ、何という、このような閑寂なる陶醉、清明にして清爽なる歓喜、想ってもみなかった。舌が縛れるとはこのことか、言葉では言えない」

いりりやぬ神に報いねば。

イシュタルーナは暴風雪ものともせず、捧げものを探した。自分のための食糧よりも、水よりも、それが先に心を衝き動かす。

すぐ傍の、針葉樹の香り高い濃い緑の葉を取り、又雪に埋もれた木の洞を探ってその奥に、幾種類もの木の実があることを発見し、諸手で掬い、捧げ祀った。靴を脱いで跪き、聖なる咒を唱えて、祈祷する。

いりりやぬ神は何の意も表さず、冷厳な無表情のままであったが、

「おまえの生命を維持せよ。そのため、その木の実は保存せよ。リスが集めし木の実を、いりりやぬ神がおまえに授けて賜るものなり。受けよ。いりりやぬ神がおまえに賜る最初の糧なり」

イシュタルーナはおのれ独りの無力を悟った。

「あゝ、いりりやぬ神を祀り、護るに、あたしの力だけでは足りない」

彼女は自らの生命維持をも忘れ、そう思う。寒さに凍える手で、再び祈った。

ふと近くに人間が蹲っていることに気がつく。頭を抱えて、雪に伏し、震えているのは、苛烈な吹雪のせいばかりではなかった。いりりやぬ神を前に畏怖している。慄いていた。

「おまえは誰だ」

むろん、敵の歩兵でしかあり得ない。しかし、見るからに幼い少年であった。イシュタルーナは十四歳であったが、彼女よりも幼そうであった。

「顔を上げろ、上げねば殺すぞ」

「ひええ」

少年は一度、縮こまってから、恐る恐る顔を上げる。

「傭兵だな。傭兵団がいくかの村を襲った時に攫われ、無理矢理に傭兵にされた少年兵だな。同情に値する。あたしは、おまえを救おう。名は」

「ら、らふ、ラフポ……ワ」

弱虫の傭兵、ラフポワである。声が風にちぎれる。

イシュタルーナは決然と言った。吹雪でも、その声は高らかな鐘のように、

「よし、おまえにいりやぬ神の守護を命ず。今からいりやぬ神を守護せよ、神将である」

鎧もない少年兵は驚いて、眼を丸くした。

「無理だよ、将なんて、しかも神将？ とんでもない。鎧もないのに。そもそも、僕は闘えないよ」

楯などなく、剣は錆びて、木製の鞘から抜くのも一苦労だ。だが、巫女騎士は意に介さなかった。

「いりやぬ神の加護がある」

「そんな……むちな」

ラフポワは最初の守護者となった。ここで天から聖なる光でも降りてくれば、さもそれらしいのだが、さようなものはなく、ただ、非情なイシュタルーナの言葉が在るだけであった。命ず。

「いりやぬ神を風雪に晒すな」

神を尊べ。祈りは神に捧げる聖なる行為だ。この無空の世の中で、神を崇めずば、すべては崩れ去ってしまう。

諸考概も愛も言葉も虚しい、どうしてそれを押し留められようか。

正義も真実も実体として實在しながらも、無空だ。つまり、実体があること、實在であることが無空と同義なのだ。

このような無際限な無空のさなかで、棹を差すのは、ただ祈りでしかない。神を尊べ。神を崇めずば、すべてが消え去ってしまう。

もう一度言う、いりやぬ神を風に晒すな」

「でも、あなた、えーと」

「イシュタルーナだ」

「イシュタルーナ？ じゃ、イシュタルーナ、言うけどさ、ここには何も無いよ。」

風を遮りたくても、そういう材料が見当たらないよ。そりゃーさあ、神様じゃなかったって、風を遮るものは欲しいよ。僕だって欲しい。けど、ないよ。雪しかないよ。何も無いよ」

「雪が在る。」

おまえは雪を見たこともないのか。どこの国の生まれだ、そんなにも、遠くから連れられた訳でもあるまい」

「モ、モンタの村だよ、ここからは遠いけど、雪を見たことがない訳でもなくもないけれども」

「ふむ、モンタか。なるほど、雪は少ない場所だが、降らぬ土地でもない。愚か者よ、ただ、愚かなだけか。

考えよ。答はとても簡単だ。

思いつかぬのは、よく気をつけていないからだ。はつきり言おう、よく気をつけよ、と。逝にしへの聖者も言う、気をつけよ、と。

日々の業に気をつけよ、言葉や所作に気をつけよ、こころの機らきに気をつけよ。よく気をつけて生きよ。

いつでも洞察し、解析し、吟味し、創意工夫せよ」

「はい……」

「つまり、答は雪だ、雪を積みばよからう」

「えー、道具がないよ、寒い風だよ、声もよく聞こえない」

「つべこべ言うな。手がある。厚い手袋もしてるようだが」

「手袋って、見掛けただけだよ、これじゃ、すぐにグシャグシャになって、凍って、指が凍傷になっちゃうよ」

「ふうむ。凍傷のことは知っているんだな」

「そりゃあ……知ってるさあ。知っているに決まっているさ。そんな眼で見ないでよ、ええー、そんなあ。

……あーあー、わかったよ。うん、仕方ないよね」

諦めに慣れた顔だった。諦めが張りついている。

だが、不思議なことに、作業中は手袋が凍ることはなかった。

最初の御社は雪の『祠』である。

と言っても、周囲に雪を積んで、環状に囲み、出入りのため、南向きの正面を七十センチの幅に開けただけのものである。正確に言えば、雪の壁、又は雪の塀である。それを敢えて『祠』と見做して、そう呼ぶに過ぎない。

直径四メートル弱、高さは一メートル超。ただし、屋根はない。いりやぬ神が石の上に立ったまましていると、腿のつけ根の十センチメートル下のところまでしか届いていなかった。

「仔細ない」

いりやぬ神は坐す。

神座する石の直径は一メートルくらい。高さは四〇センチくらい、雪の壁と石との間は一メートルのスペースが生じていた。イシユタルーナとラフポワはそこに跪くも、狭いし、何よりもとても雪が冷たい。

「ダメだよ、凍えちゃうよ、もう指も動かないし」
耐えられなかった。

イシユタルーナは眉を顰めて考え込んだ。いりやぬ神のためには私情、生命、身体は犠牲にすべきだが。ラフポワがなお訴える。

「黙ってないで、イシユタルーナ。これじゃ、外にいるのと変わらないよ」

とは言え、直接、体に当たる風が減っただけでも、暖かさを感じる。血の気が幽かに甦る気すらした。気のせいかというくらいに幽かではあったが。しかし、感じられるならば、それがリアリティだ。

「心臓まで凍てつきそうだよお」

ラフポワは哭いていたが、イシユタルーナは容赦ない。

「大袈裟な。」

さあ、さような私情に浸る余裕はない」

「私情、って、そんな……。なぜなの、何のために、そんなに仮借ないの」

「問うな。言葉は虚しい。」

いりやぬ神を供養せねばならない。贄を捧げ、威儀を糺し、聖咒を唱え、祈祷し、礼拝しなければならぬ。行動が言語だ」

「そんな状況じゃないよ。そもそも、神官の仕事じゃないの」

「民も祈るだろう、違うか」

「余裕のある人だよ。僕はない。凍えて死にそうだよ」

気がつき思い出す。いりやぬ神が生命を維持せよと言った意味を。言説を超えて実存的、実在的に実証されるその深き神慮を。

生命の意義を考え、事実を神の言葉として鑑み、深慮の末、彼女にとっては苦渋でもある決断をした。

「わかった。」

すぐそこに洞窟がある。そっちの方がここよりは、いくらかましであろう」

「最初からそこへ行こうよ、早く言ってよ」

「そんなものではない。そういうものではない。それでも、苦渋の決断だ。わからないか、愚衆め」

「わかったよ、だから、行こう、どっち？」

「縁なき衆生は度し難し、とは、このことか」

二人は洞窟に向かった。わずか二、三十メートル。それしか離れてなかった。それでも、吹雪は容赦なく、頬は感覚なくも、痛い。ラフポワは腰まで埋まる。イシュタルーナは膝まで。

昏い中に入った。

直観的にイシュタルーナは気がついた。

「とても、深い……」

どこまでも続いているように感じた。途轍もなく奥の奥まで、細長い、あたかも延び続く深淵、のように思えた。

眼が窟闇に慣れると、

「これは何」

素焼きの土の壺だった。元は乾いた暖かみのある風合いの、明るい茶系の色だったであろう。今は凍りついて冷たい。

「何か入っている」

イシュタルーナは手で探る。

「こ、これは」

「何」

パピルスだった。巻いてある。広げた。

「なぜ、こんなところに、こんなものが。パピルスが自生するのは、南大陸。遙か海の向こうだ」

イシュタルーナは思い出す。

かつて、南大陸の最古王国コプトエジヤで宗教改革が起こった時、迫害を逃れた人たちが龍角島に辿り着いたことがある、と。

だが、ここはイシュクンディナヴィア半島の中央、直線距離で言っても、数十キロメートル離れているし、急峻な山奥である。

ここまで来たという記録はなかった。

改めて、しみじみと眺める。

神聖文字。古代のもので、イシユタルーナも読めなかったが、大文字のものが聖なる天の皇帝神の御名であることが予測できた。古来、こういう類の形式には普遍的なものがある。人間の深奥に、先天的に備わっている本来的なものであるうと、イシユタルーナは常々思っていた。

そして、いくつかの神聖文字は聖句であろう、そう考える。
図もあった。

描かれているのは、原蛇の図。角を持った蛇が環を成し、自らの尾を咬んでいた。その円環の中心には、崇高の極み、きよらかにあきらかなる、尊き、至高至聖の、聖の聖なる上にも神聖なる御徴があった。それは、

畏敬と神聖なる恍惚の表情を泛べ、イシユタルーナは吐息のようにつぶやく。

「あゝ、これは。この原蛇の図の真中にある、この記号は」

「何なの」

「聖の聖なる真聖の『彝（イ）』の御徴だ。なぜ、こんなところに」

「聞いたことがあるよ。」

天の皇帝神たる神彝カムイアレズを啊厨御の真の真奥たる真髓、肯綮、すべてを網羅して遺漏のない真究竟真実義。龍のごとき肯定」

「意外に学があるな。その歳で傭兵とされては、学問の暇も、学校に行く機会もなかったと思われるが」

「でも、勉強は好きだったよ。傭兵じゃなかったら、勉強する時間があったのにな。あゝ、残念だったな」

そう言って、ラフポワは錆びた短剣をいじった。少女はじっと見る。不憫ではあった。しかし、この世は誤謬と矛盾だらけではないか。どうすることもできないことばかりだ。眼を伏せることしかできない。自分の魂を護るために、だ。そうしなければ、結局、すべてが滅ぶ。

「運命だな。」

さあ、ラフポワ、この素焼きの壺は聖なる壺と呼ぶべきものだ。大事に保管しよう。今はここに置くしかないが」

少年は訊く。

「ねえ、イシュタルーナ、蛇はどういう意味」

巫女騎士が厳かに言う、

「自らの尾を咬む原蛇の意味とは、『喰らう蛇は喰られるがゆえに喰らえず、喰られる蛇は喰らわれぬがゆえに喰らえる（又は喰らう）』だ。わかるか」

「わからないよ。ねえ、お腹が空いた」

「そのとおり。正解だ。」

さあ、行動しよう。いりやぬ神が供物を命じているのだ」

見つからない。逆に、いりやぬ神から拝領した最初の糧である木の実を齧って凌ぐしかない日々。

第二章 狩猟時代 狩人ロネ・ストリントベリイ

イシュタルーナもラフポワも、一日一粒で、七日間を過ごした。まるで、苦行時代の釈迦牟尼仏陀のように。

毎日三回、洞窟から出て、祠（雪の塀壁に過ぎないが）の前で跪いて雪の上に額突き、一日一粒、その日の最初の礼拝の際に、木の実を捧げた。三回という回数は、イノーグ家に古くから伝わるもので、それに疑念を挟むことはない。

かつては、あった。もっと頑是なき頃のある時期。

しかし、聖咒を唱え、印契を結び、観想を練る歲月のうちに、頭とする思惟など把握の手段の一部でしかないことに、体は気がつき始め、論理を用いた検証も、さらにその一部でしかないことに気がつく頃には、自然に、理や言語ではなく、直截の真理を、いや、何かわからぬ何かを観ずる方法を、五里霧中で模索し始めていた。

巫女の正統な、超越的な在り方である。

古来、人はその本能で生き延びた。イシュタルーナはその伝統・歴史をひしひしと感じ始めると、もはや、疑念は虚しく、実践で練られた本物である感覚、真実性を魂魄で嘶かに悟ることこそが真実であるとする。

三回という数字も、常に神の傍に侍り、供養する者がいなければならないという規定も、無為ではない。

それゆえ、現状のやり方は、イシュタルーナの体得した真の理法からは、遠くかけ離れており、大いに不満であった。

しかしながら、凍死してしまつては、務めをなせない。彼女としては苦渋の、究極的な選択として、祠に駐留せず、このように洞窟から通う礼拝をしていた。

もつとも、洞窟はわずか二、三十メートル離れているだけなので、問題はない。彼女の真を極めんとする性格が赦さなかったというのが実際に、ラフポワは犠牲者のようなものであった。

七日経つても、吹雪は止まず、イシュタルーナは遂に言う、

「供物が要る。狩人を探せ」

「お腹が空いて動けないよ、手も足も凍えて冷たくて、もう永遠に体温を失ってしまったみたいだよ。しかも、夕方だよ、たぶん」

吹雪が朝夕を分別させなかった。ラフポワはめそめそ涙零す。

泣き言は当然であった。生きているのが不思議なくらいだ。しかし、死なないだけであって、辛さは同じだった。つまり、死んだ方が楽だったのである。

イシュタルーナの強靱な意志すらも挫けそうであったが、魂に死力を呼び戻して袋からつかんで差し出す。

「これを食せ」

掌に、数個の木の実が載っていた。ラフポワの眼が輝く。

「うわあ、いいの」

「最後の最初の糧だ。今、唯一の糧だ。」

早く食べよ、希望を持て。狩人のいる方角を占おう。

心を清ませて。

本来、心はすべてを知っている。心が全宇宙だ、ありとしあらゆる一切だ。すべてを網羅した状態にて、常にある。

心がすべての現実である。

光が瞳孔の水晶体を透って網膜を刺激（受）し、感覚（想）が生じ、解釈学によって象が構築（行）されるならば、現実が直截そのままに映じて意識（知覚・識）が起こるものではない。

ア・プリオリ

先天的な、蜥蜴や魚類の脳幹にもあるような、先祖伝来の“企画”が投じられ、構築されたもので、言わば、捏造物だ。企画の由来や仕様は誰も知らない。根拠は知り得ない。

それゆえ、理解は理解ではなく、無理解は無理解ではない。又は理解は無理解だし、無理解は理解なのだ」

「いただきまーす！ あむ、んー、んもぐもぐ、んぐんぐ、ごくつ、う、うまーい！もぐもぐ。ごっくん。」

で、さあ、食べながらで、失礼なんだけど、イシユタルーナ。

僕には、まったくわからないんだけど。つまり、心を清ませば、その狩人のいる場所に行き当たるってこと？」

「いや。心は誤謬をも網羅する。おまえが歩いて確かめよ。それしかない。他に現実があるか？」

右に逝けば、逝くは右。左手に握れば、左手が握る」

「いや、ないと思うよ。もぐもぐ、んぐんぐ、ないね、ないよ、うーん、おいしい」

その美味しさを、彼は生涯忘れられなかった。

狩猟採取時代の始まりである。

ロネ・ストリントベリイという男がいた。狩人である。故郷のキヌグイ（木濡杣）山やアヌグイ（啊濡杣）の山を廻って、大きな弓矢でシカやキジやウサギを獲っていた。粗末な丸太小屋に住んでいる。七日間も猛吹雪で、狩りには行けなかった。弓の手入れをして、暗い日中を過ごす。蓄えの乾し肉を噛んで、今宵も早くに床に就いていた。

ところが、深夜。

扉を、どんどん、どんどん、と叩く音。

「ごめんください。どうか起きて出て来てください」

ロネは鉈と斧を握った。いや、弓にすべきか。部屋は暗い、外も暗いが、それよりも暗い。敵が扉を破っても、瞬時は何も見えない。こちらは暗い吹雪のわずかな雪明りに照らされた敵が微かに見えるであろう。距離を置いて、弓矢で射る方が安全確実だ。

「僕は扉を殴って壊したり、蹴り破ったりはしませんし、できません。でも、このまま開けないと、いりやぬ神の裁きが下りそうですよ。大丈夫ですか」

いりやぬ神の裁きが来て大丈夫はさすがない。だが、誰が「ハイ、そうですか」と、信じて扉を開けるだろうか。この弱肉強食の乱世で。

その時である。

強烈な閃光、同時に凄まじい雷鳴が轟き、扉が吹き飛んだ。

「うううわあああ」

ロネは吹き飛ばされた。暴風雪が吹き込む。

「やれやれ……。だから、言ったじゃないですか」

ラフポワが入って来た。左手に光る剣を持ち換えて、右手を差し出す。ロネが眼を丸くして剣を見ていることに気がつき、

「あゝ、これですか？ これ？ 僕には扱えないんです。何だか、勝手に働いてくれるんです。雷霆神剣の一つです。雷霆神剣の中でも、空 っていうランクのものらしいんです。雷霆神剣の中では、一番弱いらしいんです、威力が。

でも、よく使えば、成長するらしいんです。ちなみに、雷霆神剣の中で一番威力が強いのが金剛剣で、次が黄金剣で、銀剣、鉄剣、青銅剣、銅剣、石剣、木剣、土剣、水剣、粒剣、素剣、そして、最後がこの空剣（零剣） っていう、十二段階なんです。

え？ 十三じゃないかって？ あゝ、空剣はゼロという意味なので、数の内に入らないらしいんです。

えーと、それから、この雷霆神剣は実は元は、ただの棒ツ切れだったんです。いりやぬ神の二つの眼が光り輝いたら、棒が、パツと燃えるように光って、これになっちゃったんです。こんなにも途轍もない剣になっちゃったんです。

ほうら、重くないですよ。こんなにごついのに。重くない。何でかわかりません。軽いのに、もの凄い威力なんです。……まあ、さっき、見たと思いますけど。もう、怖くって。

他にも、龍の剣シリーズもあって、それも金剛から空までランクがあるんです。その他にも……。あ。

勝手に喋り過ぎてますか？」

ロネは呆然とするしかない、ラフポワを眺めながら。

意外にも、被害は小さく、怪我もなかった。櫓の丸太で作った扉が開いただけだ。木製の簡素な蝶番も壊れていなかった。

「不思議だ」

ようやく、ロネはつぶやいた。

ラフポワは悪戯っぽく微笑んで、

「でしょう？ 言うことを聞いておいた方が身のためのような気もしなくもないです。あ、

脅かしているみたいなんですけど、そうじゃないんですよ。いや、僕もよくわからないんですが」

ロネは是非もなく、鹿革の上着を羽織った。熊の毛皮をその上に着て、キツネの毛皮のフードをかぶった。よく見れば、ラフポワの軽装に呆れた。

「よくそれで寒くないな」

「寒いですよ。僕も人間ですよ。仕方ないんです。僕のような下っ端の傭兵には、ろくなもの支給されません。基本的に自給自足、自前なんです。

でも、大丈夫なんです。きつと、いりやぬ神の御加護なんでしょう」

少年兵だ……ロネは眉を顰めて、悲しそうな顔をした。

でも、今、考えても、どうにもならない。

「そうか。では、行こうか」

歩きながら、自分は何と愚かな行為をしていることかと思った。外は、凍てつく、猛々しい吹雪のさなかだ。

そう思いながらも、風に耐え、ザクザクと雪を踏んで登った。その間、口を利かなかつたが、ラフポワはそれに好感を持つ。この少年がふと掛ける言葉から、丁寧語がいつしか抜けていった。無邪気なのか、不幸の翳りがあるのか、わからない少年に、ロネも次第に親しみを覚えていく。

吹き荒れる中、灯りもない峻しい山登りの一キロメートルは、とても長く感じた。山が人を拒む。烈しく打った。だが、人はそういう場所にこそ聖なる領域を予想する。なぜだろう。人は捉え難きを欲し、禁じられたものを求むからか。

やつと、聖なる石の場所に来た。ロネは暗闇を通し、眺める。

雪が積んである。高さ一メートル十センチ、直径が四メートルほどの環状。これをもし祠と言うなら、壁があるだけで、天井のない祠だ。

入り口は狭く、身を斜めに傾けながら入らなければならないように見えた。中は暗く、沈んでいる。ただ、猛吹雪のびゅうびよう、ばうぼうという音だけであった。何もいないじゃないか……

何だか怖くなってきた。真っ暗な山、吹雪、奇妙な雪積み、いるはずのない場所に少年がいる、独りぼっちで。気味悪くならない方がおかしい。少年は本当にこの世の者か、生ある者か……

ふうむと唸り、ロネは現実に戻ろうとして言う、

「雪を、二人で、これほど積むのは、大変だったろうな」

やはり、この人は、基本いい人なんだと、ラフポワは感じた。

「いや、ほとんど、僕一人だよ」

「無理だ。この息もつけぬ吹雪の中では」

「それが不思議なんだけど、できちゃったんだよ」

「むむ、それもいりやぬ神の力という訳か」

「願わくは、何となく、恐らく、きつと、たぶん、そうだと思います」

そこへイシユタルーナが洞窟からやって来て、傲然と会話を奪い、

「祈りなさい。拝みなさい」

ロネは複雑な表情で、少し安堵しつつ、微妙に、かつ神妙に会釈した。

「わかりました。祈りましょう。何かしなくては、わからない。では、拝観してもよろしいですか」

「むろん。一切を網羅し、異他違逆のない、いりやぬ神だ。断る理由も、断らない意味もない」

「では、神の与え給うままに。儀礼ですから、禊ぎ清めた上で、厳粛に拝ませてください」

ロネはいりやぬ神がいるとは信じていなかったが、けじめとしてそうしようと思い、そうした。

針葉樹の葉で祓う。白雪で雪いだ。二礼し、入ろうとする。すると、いりやぬ神は突如、光り輝いた。

「ううわっ」

海老のように後ろに飛ぶ。

「いりやぬ神だ！ いりやぬ神！ あゝ、自然石の上に」

驚愕し、震えているロネを見て、ラフポワは眼をぱちくりさせ、

「そうだよ、そう言っただけだよ」

ロネは蒼白になっていた。

「半信半疑、いや、ほとんど、いや、まったく疑っていたし、もし、真実だったとしても、これほどとは思っていなかった。

そもそも、いりやぬ神を知らなかった。ラフポワから初めて聞いた。それでも、見てすぐにわかった。あゝ、そして、奇妙な感覚、清爽、歓喜か、崇高、陶醉か、脱力感、い

や、何だろうか。だが、畏怖もある、喪われることの怖さも混ざったような……」

イシュタルーナが鷹揚に言う、

「結論があればよい。結果が現実だ。で、どうだ。手伝う気になったか」

「は、はい。紛れもなく。」

他意はありません、もはや。されども、もう一度、拝観してもよろしいですか」

「見よ」

恐ろしいのに、なぜ、もう一度見ようと欲するか、ロネ自身にもわからなかった。

畏れ畏み見る。

「美しい、あゝ、何と言うべきか……」

言葉にもならぬ繊細さにて、かつ微妙、儚くも、初々しく、生命に富み、輝かしく。甚だ深い静寂の歓喜が身に染み渉る。

いりやぬ神は論理を超えた大義であると感じる、歓喜とともに。深く深く心静かに欲するがゆえに。真の真から。奥の奥から。

手を合わせて深く祈り終えると、戻ってロネはイシュタルーナの前に姿勢を糺し、眉も眸も口元も凜々しく、生命を甦らせた者のようにまったく表情を新たにし、

「命に代えても。神聖な使命です」

「最高の真理があるならば、余談は要らぬことを悟ったか。よろしい。おまえをいりやぬ神の臣とする」

「はっ」

ロネは崇高の稲妻に打たれた人のように一度、大きく震えてから、ガクつと跪いて叩頭ぬかづく。

「身命を惜しまず。一切を捨て、必ずや」

「ふむ。期待するぞ」

立ち上がると、さっきまでが演技だったかのように平静を取り戻し、ロネは、

「提案なんです、現状のいりやぬ神の祠は粗野です。あまりにも」

イシュタルーナは深く頷くも、

「知っている。だが、魂魄を込めればよい。今は、これでも已むを得ないものと考えている」

「むろんです。状況を鑑み、諸事情を慮れば、已むを得ないでしょう。」

現状が悪いとは言いません。或る種の、侘び寂とも言える良さもありましょう（ラフポ

ワは首を傾げたが、イシュタルーナはそもそも興味がなくて反応を示さなかった。粗いゆえに原初的で、非人工的で、土味を遺した陶器のようにリアルです。

しかし、存在としてリアルであつても、生存のためには、リアルではありません。所詮、これは雪を積んで小さな堀を作っただけです。

凍っていて、石壁くらいに頑丈ですが、所詮は雪です。木の堀が欲しいところです。丸太でもよいから、堅牢な何かを立てて。

為せることから、為しましょう。

とは言え、今、この吹雪の中で作業するのは危険です。たとえ、晴れても、人数が欲しいところです。

ですが、屋根くらいは葺いておきましょう。いりやぬ神のために屋根を。寒さや風雪が凌げます」

「素晴らしい考えだな。

自然もまた、いりやぬ神の御心のままゆえ、風雪など意にも介さぬが、介することも、どちらでもないこともできる。

あたしたちは深慮し、正しいと思うところを為すのみ」

ロネは吹雪ものともせず、鉋を打ち込んで、それを足場とし、器用に針葉樹に登ると、斧で枝を伐って、編むようにし、土手の上にかぶせた。その上に雪を固める。確かに、我ながら作業が速いと驚いた。いりやぬ神の力か、と独り言つ。

「洞窟へ戻ろう。ロネ、少し休め。小さき積み重ねも尊い。命を永らえよ。生の存続にも意義がある」

「ええ、しばし休みます。体力が回復すれば、気力も再生するでしょう。その方が道を間違えない」

だが、ロネは数分ほど休むと、すぐに洞窟を出た。小屋から生活道具を持って来て、洞窟にあった風の抜ける穴の下に、石で簡単な炉を作り、火打石で羊毛に火を点けた。乾いた草や枝に点火する。これは濡れないように大事に保管していたものであった。薪に火が移る。煙は穴からどこかへ消えて行った。

「ラフポワ、ほら、見たまえ。とても良いよ」

「そうだ、ラフポワ、おまえも来い、いりやぬ神に捧げる火の儀の端緒だ。おまえも見方が善いだろう。

未だ火を点せるほど、祠が整ってはいないが」

洞窟に赤々と燃える炎。燠の火は暖かく、平和で、おだやかで、何と優しいことか。

希望が点された。一族の虐殺を眼の当たりにして絶望していたイシュタルーナにも、未来の光のない苛烈で殺伐たる前線に傭兵として擲たれていたラフポワにも。

少年は恐る恐る手を翳し、

「あゝ、暖かい。指先がじんじんする」

ラフポワが喜悦の感嘆を洩らす。

ロネは背負ってきた大きな革の袋から、鍋や食材を取り出し、

「スープでも作りましょう」

乾し肉でダシを取っただけの汁だった。しかし、豊かな風味と旨味とがある。まともな食べ物だった。

匙で一口掬って、ふうふうしながら飲むと、旨味が五臓六腑を廻る。

「んー、堪んない、あー、血が通うのがわかるよ。甦る。生き返るようだね、イシュタルーナ、僕は本当に生き返ったよ！ 自由になった気がする」

ラフポワは随喜した。

「では、私は早速、自分の使命である狩りに出掛けます。数日かかることもあることを、予めご承知おきください」

颯爽と出る。その肩や背や、無骨な表情は、行動ということだけを露わに示していた。

その頃、いりやぬ神は粗野な祠で睫毛を伏せ、坐し、瞑想する。

イシュタルーナも洞窟の中にいながら遠くを見遣る。

いりやぬ神も時には、考えるのであった。すべてが意のままゆえに、考え煩い、模索する必要などなくとも、そうすべくしてそうするのである。

巫女騎士の心に髣髴する何某かの思慮の繚乱も、ただ、いりやぬ神の御心のまま。自由な、自主的な、自らの意志など、未だかつて存在したことはない。非存在ですらない。そもそも、自由意志とは、何か。我らは自由意志を持つ。唐突に、自由意志は実在している。

ロネは再び外へ出た。そして、血の滴る獲物をぶら下げて帰って来た。未だ夜明け前だった。黎明はなく、吹雪なので真っ暗だ。獲物は、巣穴で眠っていたところをキツネに襲われたウサギと、襲ったそのキツネだった。ラフポワはすやすや眠っている。

「新鮮な血だ。これは有り難い。生命は清らかだ。

早速、聖なる場所、祭場の浄化に使おう。場を清めようぞ」

イシュタルーナは獲物を奪うように取ると、外に出た。祠の前に来て、獲物を振って血を垂らし、撒く。

血は神聖なもので、場を浄化する。鹽が清めるように。

それを野蠻という宗派もある。だが、宗教はさまざまだ。文化を一概に批判するのは、植民地支配と同じで、その方がよほど野蠻である。答は一つではない。考えは一種類ではない。すべては複雑系的であるべきだ。それが現実的である。

むろん、巫女騎士の考え方はその真逆であるが。

イシュタルーナは雪に蹴られながらも、膝を突き、頭を垂れ、髪を雪に触れさせ、音も触感も掻き消えるほど深く祈った。

戻ると、無造作に骸をロネに渡す。

ロネは吊るして血抜きをし、捌き、その後、休憩した。

イシュタルーナは、

「早朝、贄として、いりやぬ神に捧げよう。夜は相応しくない」

夜明け前の、一日のうち、最も清らかな気が萌えいずるとき、処女神のごとき薄明があらわれ始めた。燦めきを強め、黎明となり、紺碧の空が銀嶺に再び微笑む。あゝ、黎明よ、新たな思想が生まれる瞬間であった。甦りの刹那とも言える。

崇高なる蒼穹へとなりつつあった。雪が閑止している。

朝、吹雪は止んでいた。イシュタルーナら三人は神の御前で贄を炙り終えると、額突いて礼拝し、その後に棲家である洞窟へと持ち運び、食す。

塩も胡椒もなかった。だが、久しぶりの暖かい食事、しかも、肉だ。

ラフポワは大満足であった。笑みの頬で、噛み締める。

「あゝ、幸せ。何年かぶりにまともなものを食べたよ」

傭兵時代には、まともな食事がもらえなかった。

「生れてから、何年も経っていないだろう、ラフポワ」

「十年以上は経ってるよ、イシュタルーナ」

「あたしより何年も少ない」

「ふ、私から見れば、半分以下だな」

外に出て、ならんで立った。日が射し、見上げれば、樹木のない大斜面、眩い純白の山

脈だ。

希望を呼吸するも、光に影がつきまとうように、いずれ、そう遠くない未来に、敵が来るであろう、巫女騎士はそう思った。

荒天が明ければ、再び殺戮の剣がイシユタルーナを探し、エミイシの紋章の楯を打ち鳴らしながら、山を登って来るに違いない。

「さてと、聖なる巫女騎士よ、エミイシの手の者たちが再び来るでしょう。もしここにいることを察知していれば、正規の兵たちが来る可能性もあります。百戦錬磨の戦闘の達人たちが」

ロネが言うと、イシユタルーナは、

「むろんだ」

非情の面をもって応えた。

「失礼いたしました。ふう。問うまでもなかったですね」

しかし、敵はすぐには来なかった。追撃してきた傭兵たちが全滅したので、イシユタルーナがどこへ行ったかわからなかったのである。山に行ったなどとは夢にも思っていなかった。

普通に残党狩りをしながら、街道に関所を設けたり、民家を調査したり、イノークに近い者たちの家を探ったり、湖畔や川や海の傍、特に港などを搜索したりしていたのである。

そんな様子を感じて、ロネは言った。

「ラフポワを狩りに連れて行ってもいいですか」

「むろんだ。それもいずれ必要になろう。行くがよい」

毅然たる少女は言った。

「風上にはいけない。風下に回るよう工夫するんだ」

「なぜ」

「世界がそういう仕様だからさ。この場合は、臭いだ。彼らは視覚よりも、臭いを情報源とする。彼らの嗅覚は人間の何十倍も凄い」

「不思議だね、彼らは見るだけじゃなくて、臭いでも世界を感じているんだね」

ロネはラフポワをじっと見た。

「賢い子だな、ラフポワ。神将だから、賢くなければ困るが」

「よしてよ」

その言い方がませていたんで、ロネは思わず笑った。

「そうか、そうだな、あはは」

「臭い以外でもあるの？」

「蝙蝠は音だ。夜は見えないから、音の反射でモノの存在を知覚する。我々は主に眼で見
て、音や匂いや感触などと総合して世界を構築するが、彼らは主に音で世界を創る。彼ら
の世界と我らの世界は同じ世界に住んでいても、別物なのだ」

「へー」

「蛇は温度だ。彼らの世界は温度の差で構築される。モグラも眼がほとんど利かず、臭い
の差異で世界を構築する」

「皆、僕らにはわからない違う世界があるんだ。僕は彼らって何も考えてないと思ってい
たけど、僕らにわからないだけで、全然、別の世界があるんだね。きっと彼らの言語や文
化や宗教や哲学や、彼ら独自の感情もあるのかもしれないね」

「私がおまえが本当の神将だと思えて来たよ。自分の感覚や価値観を超越することが生の
偉大さだ」

「生の」

「そうだ。」

人間に限らず、という意味さ。すべての生に於いて。

犬もカエルもトンボも樹木もカビもバクテリアも、一切だ。わかるか、ラフポワ。

いりりやぬ神が指差し示す、生の進化の経緯は、自己超越の歴史だ。飛ぶようになった
り、陸に上がったたり、水棲したり、擬態したり、巨大化・矮小化したりして、生命は過去
の自己を超越してきた。

また、諸感覚を発達させ、より多様な情報を収集し、より複雑精緻な、客観的な世界を
構築することで、客観性を獲得し、他者を理解し、すなわち、自己を超越し、俯瞰する。
そういう者たちは進化の道を行く者たちだ。

いりりやぬ神はおまえを選んだのだ」

ラフポワは嫌がる顔をしたが、想うところあって、

「だから、人はリアルなものを求めるのですね」

ロネはその意味を表面的に理解するしかないと考えつつ、わかるところだけを言う、

「リアリティ（現実）でなければ、意味がないように思えるのも、畢竟は、そうなのだろうな」

鹿の足跡を見つけた。

「近いな。シカは耳も鋭い。音を立てるな」

「無理だよ。雪はザクザクいうよ」

「奉行せよ。（奉行って、何？）心を込めて行え、という意味だ」

一時間後に見つける。

「いた。小鹿だ。ロネ、あの子はやめようよ」

「ラフポワ、それでは生きていけないぞ」

「構わないよ、意味ないもん、生きていても」

ロネはまた悲しい顔をした。

「なぜ。」

意味のない者はない。意味がないなどと言う者は世界を否定する者だ。たとえば、棒切れであろうと海であろうと土であろうと蛇であろうと砂であろうと雨であろうと無空であろうと、すべての存在者は世界を構成する構成員であって、それを否定するならば、世界を否定することになる。水も羊も文書も石も空気も風も月も鳥も草木も火も人も意味がある」

ロネの顔を見て、ラフポワは俯いた。ぼそつと言う、

「いぬりやぬ神は否定することも、きつと肯定するよ。結局、現実しかないんだ。そういうことさ」

「肯定されているから、現実にあると言いたいのか。そうだ。そして、その反対の見解も現実にある。それも肯定されているということだ。」

つまり、現実にあることが肯定されているのではないと考えることが事実であり、真実であり、正しいということも肯定されている、ってことだ。

だから、在る。すべては在る。

唐突だ。私が言う唐突という言葉の意味がわかるか。

根拠を超えているということだ。まとまった見解などないということだ。敢えてそう言い切る、私は。敢えて。

事実でもなく、真実でもなく、正しくなくともいいから、そうであって欲しいと希うから、そうであると思いたいから、そう想ってもよい、だから、今、そう思っている想いが

在る。

現実とは、そういうことだ」

「何もないのと同じだ。それ以上だね」

「そうだ。だから、生き延びよ。おまえの魂の声を聴け。心を研ぎ澄まし、ロゴスに聴従せよ」

ラフポワは黙った。ロネは小鹿に向き直る。

「弓は未だ教えてないから、無理だな。投げ斧はどうだ、やってみないか」

「いやだよ」

「そうか。では、私が弓でやる。見ている。今日は鹿鍋だ。心を研ぎ澄まし、集中する。世界の呼吸と一体になる。菜食主義者だって植物の命を奪っている。いいか、そらっ」

ラフポワは黙って考えていた。

早曉、ロネは火を入れる。炎は光を成した。赤々と燃える。

煮炊きや暖を取るため、薪を燃やす場所には、石が環状にならべてあった。暖炉とかまどを兼ねるもの。炉の上部には、風の流れのある穴があった。どこに空気が流れていくのかわからないが、洞窟に派生する自然の穴の一つである。湯気や、煙で、位置を察知されないために都合がよかった。遠目には、まずわからない。

一日の労働を終えると、炎を前にいろいろ語り合った。

「明日は出掛けようと思います。狩りではありません」

ロネが言うと、イシュタルーナは訊いた、「どこへ行く」

「私の住んでいた小屋から、五キロメートルほど山を降りると、ファルコ・アルハンドロという地主がいます。元は流れ者ですが、なかなかの漢です。

私は生活必需品などを買求める際、麓の村まではあまりに遠過ぎるので、ファルコのところで対価を支払って、と言うか、現金収入がないので、狩りで得た獲物などと交換していました。

もしかしたら、事情を話せば、我々に協力してくれるかもしれません。彼はエミイシの一族にも、王にも従わない。古代からの誇りある山の民と、ともに暮らす男です」

イシュタルーナは言った。

「山の民や、海の民はまつろわぬ者たちばかりだ。敢えてその仲間となったというか。ふ。

ファルコなら、知っている。彼はイノグ族のことも嫌っている。この一帯の領主であった我らイノグの命にも従ってはいなかった。元はどこか別の土地にいたとも聞くが」「そうですね。彼は自由です。それだけです。山賊ではありません。ありませんが、山賊らも彼を襲いません。山賊皇ユーグルも、海賊皇リュウさえも、彼には一目置きます。或る意味、男気で結ばれた、仲間のようなものです。ファルコは盗みも狼藉もしませんが。野に潜む士ですね、良く言えば。臥龍、又斧を振るう賢者とも言えます。名もなき英雄とも言えるでしょう。

春夏秋は羊を追ひ、木を伐ります。チーズやハムを作り、羊毛を売って、生業としています。生計はまっとうな人間です」

「短期間だが、ともに過ごし、あたしはおまえを信頼した。おまえの友をも信じよう。

彼とその眷属が遵うならば、彼らは最初のいりやぬ神の兵だ。黄金の兵としよう。ファルコは神兵軍団長だ」

神将の配下である。

そう宣言してから、後の判断はロネに任せると決めたふうで、イシュタルーナはもう敢えて訊ねずに、ただ、問い、

「おまえの武器は弓だな」

ロネは大きな弓を握った。

「はい、武器と言うよりは、生きる手段そのものです。狩りが生業ですから。これがすべてです。私のすべてです。

自分が何者か知らず、いずこへ赴くかも定められず、生きる理由は知らなくとも、辛うじて、実存的に生きてはいけます」

イシュタルーナは何かに大いに感じ入って、

「ふむ。さもありなん。

では、弓を聖化しよう。

聖化は人の思惟や思議を超える。魔訶不思議だ。

魂を清めることで、それは成る。神への祈りで、心を清めよ。

跪け、ロネ。聖咒を唱えよ、青き海の、白き塩のように、清めよ。聖なる、いりやぬ神の御力よ、ここへ来たれ」

イシュタルーナが手を触れると、弓は神々しい白銀に輝いた。自然と装飾も精妙で、眩いものへと変ずる。ロネは敬虔の念に打たれて跪いた。神聖な弓に触れるだけで、爽やか

な力が湧く。

「月の弓と呼ぶがよい。皓々たる白銀の三日月のようであるがゆえ。美しく絡む不規則な曲線文様は命の象徴で、逝にしへの聖なる御徴だ。その力は自然の猛威よりも恐ろしいものだ。」

位階は未だ空（零、シューニャ）だが。

おまえは位階を知るまい。

位階について、説明しておこう。

位階の最初は空である。その上が素。その後は粒、水、土、木、石、鉄、銅、青銅、銀、黄金、金剛、そういう順に上がっていく。十二の位階があると知れ。十三の要素があるが、空は○で、素が一だから位階は十二なのである。

位階は永い年月と経験を重ねることに困って上がっていくのが通常ではあるが、おまえの武具の成長は恐らく迅速に進むであろう。

ちなみに、金剛の上に超越的な位階、〃シン（神、又は真）〃があるが、これはまったく人間の領域ではなく、人間の知性で上位だの下位だのと言えようなものではなく、無記（記別せざるもの）と言うべきものである。

理解し難いものではあるが、さように理解せよ。

ともかくにも、大いに励め。それしかないと知れ。今この瞬間から、おまえには、大義がある」

巫女騎士はそう言った。

「聖なる使命を果たします、巫女騎士イシュタルーナ様」

清き心は明く、とてもかららかである。動けなかった。永くも感じたが、実際は、数秒のことであつたであろう。

立ち上がると、普段の態度に戻り、丁寧に辞儀をした。

「では。しばらくの間、お待ちください。出掛けます」

ロネが毛皮を被り、支度を始める。ラフボワは不安を訴えた。

「ここの守りは、僕とイシュタルーナだけで大丈夫かなあ」

ロネは思わず声を上げて笑ってしまう。

「恐らくは、世界最強と言っている。最も神聖なる巫女騎士と神将だ」

「女の子と、男のこどもだよ」

「だから、もしかしたら、最強なのかもしれない。」

たとえ、神聖シルヴィエ帝国の正規軍団が来ても、あなたたちには勝てない。勝てるものか、奴らは。

「私は何も心配しないけれども」

だが、イシュタルーナは自惚れも謙遜もなく、冷淡に、

「思い上がる者は必ず滅ぶ。」

あたしは十分だとは思わない。

だが、ラフポワよ、心配はいらない。間もなく守衛たちが来るであろう、このような時のために。

黄金の兵たちのことではない。銀の兵たちのことだ」

「え、どういう意味なの、イシュタルーナ」

「どういう意味でしょうか、イシュタルーナ様」

巫女騎士は何も応えなかった。だからといって、さように記別しないことに、意味がある訳でもなかった。

第三章 萌芽 曙光 農牧主と五聖者と銀の将と青銅の騎士と銅の兵

「イエイサー、イエイサー、イエイイエイサー。」

飲めよ、喰えよ、生きてまぐわえ、子孫を遺し、種を永らえよ、宇宙の素粒子どもよ、我らもまた然り。

良善をなせ。それ各々その在るままにある限りのものならば」

ファルコ・アルハンドロは、いつものように早朝に起き、吟遊詩人騎士となって流浪していた頃のように歌いながら、大きな桶を担ぎ、牛や馬や豚や山羊や羊に、水や餌を与えた。

歌は時に声を絞り出すカンテ・ホンドのように切々と歌う時もあったが、だいたいのは朗らかで楽しい田舎ふうの節回しだった。

水は雪を大鍋で溶かしたものだ。太い腕は軽々と持ち上げた。黒く渦巻く髪にたっぷり蓄えられた頬髯口髭顎鬚、精悍な大男だ。眉太く眼光は鋭かった。

使用人も彼を手伝う。

家畜は一階にある広い家畜部屋に、柵で種属ごとに仕切り分けて、飼育していた。家

畜部屋の周囲は使用人たちの部屋で、十数世帯が住んでいる。二階が主人であるファルコの居住スペースだった。

「さあ、飯にしよう」

調理場と食堂は別棟になっていた。屋根つきの外通路で母屋と結ばれている。家事の被害を最小限にするため、火を使う場所は母屋から離しているのであった。

家畜部屋で働いた連中は食堂で一斉に朝食にする。使用人の妻や母親たちは大忙しだ。こどもが騒ぐ。湯気と、食器の音と人々の喧騒。朝はチーズと温めたワイン、石窯から出たばかりのパンだ。

昨晚、猛吹雪の中、山の上の方で烈しい光を見たと言う羊飼いの若者の話を思い出し、
「おい、ハンセン、その話は本当だろうな」

「ええ、間違いございませんとも、ご主人様。ボッカの野郎も一緒に見たんですから、奴にも聞いてもらなせえ」

部屋住みの羊飼いは応えた。その青い眼は真実を語っていた。

「そうか、ロネが気になるな。猛吹雪も一週間以上続いたし。どれ、後で様子を見に行くか」

大きな斧を握る。

「おい、ジョン・スミス、仕事だ、後で一緒に出掛けないか」

「わかりやした」

火傷だらけ、煤だらけで黒く、精悍な顔と滾るまなざしの鍛冶屋は応えた。

ところが、そのロネが敷地の柵の外で呼ばわっている。

「おおい、ファルコ、私だ。凄い吹雪だったな、大丈夫か」

飛び出て来たファルコは、

「大丈夫かだと？ とぼけた野郎だぜ。はっはは、そりゃあ、こっちのセリフだぜ。おまえこそ大丈夫か、隠遁の猟師、真理の狩人」

「むろんだ。なぜ、問うのか」

「昨晚、強烈な光が何度も山で閃いたというが、おまえは見ていないのか、何だ、何事もなかったのか」

「あゝ、そのことか。それを話しようと思って来たのさ、買い出しついでに」
「じゃ、来い。おい、飲むか」

そう言いながら、ポケットからウイスキーのスキニーボトルを出した。錫製だ。大きな

手に小さい。

「あゝ、冷えたからな、戴くよ」

ぐいっと呷る。一時間後。

「俺にそんな与太話を信じるというのか」

話半分も聞かないうちに、粗末な書斎で暖炉を囲む安楽椅子に肘を突き、ファルコは不機嫌な顔で言った。

「人の反応というものは皆、同じようなものだな」

ロネはそう言っ皮肉な笑みを浮かべる。自分もそうだったと自嘲し。

そのシニカルな態度を見ると、ファルコは理由もなく、信じたくなるのであった。

命の水、琥珀色の濃い酒精を呷る。

「ふ。」

まあいい、かつての英雄が言うのだから信じてやろう」

「ありがたいな。信じてないようだが。それに、私は英雄ではない。英雄であったこともない。ただ、戦った。今、ただの世捨て人さ」

「ふん、俺もだ」

ファルコは太い親指で自分の鼻の頭を觸った。

「ならば、何を惜しむか、喪うものなど、今さらあるか。魂の革命が世の常識の範疇にあると思うか。思わぬなら、来い」

「だがな、イノーグと手を組むのは気に食わんな」

「海神のごときおまえが小さいことを言う。イノーグ族は滅んだ。今いるのは、哀れな少女の巫女騎士だ」

「ふん、泣き落としか。おまえこそ、おまえらしくもない。だが、俺も山の民だ。誇りある古代の民だ。山賊どもとは違う。歴史と、戦士の魂がこの胸にある。」

センチメンタリズムだと言われようが、構いやしない。なるほど、そう言われちゃあ、黙ってられないな。わかった。行くさ。逝くとも」

晴れた山の厳しい傾斜、膝までも雪に埋もれながら歩み、二人は休憩時に、エールの樽を傾ける。太陽はぎらぎらと反射していた。紺碧の空である。あと数百メートルほどというところ。ファルコが、

「あれか」

純白しかない世界で、それ以外の色彩があると、遠目でもあっても何となくわかるもの

であった。

急斜面の上方を見上げる。遠くを見ることにかけては、鷹の眼と同様によく見えるファルコの双眼には、枝を葺いただけの粗末な屋根の翳りが微かにわかったのだ。

ファルコはイシュタルーナに見えた。まみ

真っ直ぐ長い黒髪が腰を蔽い、眉の下で切り揃えられ、眦は切れ上がっている。凛々とした強いまなざしであった。気負いも気後れもなく、じっとファルコを見つめている。『大したタマだな』と感心し、警戒し、心を粛し、なおも驚嘆した。

確かに、神懸かり的な異能を感じる。

到着と同時に、ロネがイシュタルーナにファルコを紹介した。イシュタルーナは彼らを休ませもせず、

「来たな。神兵軍団長ファルコ、副官ジョン・スミス。では、いりやぬ神を拝め。それからだ」

ファルコとスミスは驚いたが、巫女騎士は意に介さず、雪の塀に囲まれただけの、神の坐す聖なる石の場所に案内した。

ファルコは怪訝な表情を泛べ、鍛冶職人に目配せする。奇妙なものだ、と。

「おい、おい、こりゃあ思った以上だ。実に、いかがわしいではないか」

スミスもうなずいた。

雪の塀の南側の部分が約幅七十センチほど開いている。そこが出入り口らしいとは、ファルコにもわかった。深緑の針葉樹の枝を葺いた屋根が光を閉ざす。

暗くて中は見えない。

まったくの静寂であった。永遠の深淵、のように感じられた。底知れぬ宇宙の永久に涯の知られない深淵のように。無空をも超える無空。

唐突に、光燦が炸裂する。半跏坐のいりやぬ神が双眸の瞼を上げたのである。光燦の烈しい即物性、光線が射貫くかのようなであった。露骨なまでの物的な感覚がある。太陽が面前に降りて来て、神々しい金属の光を放つかのようであった。

「おお、おお、おお、そんな、信じられない……」

立ち上がる。石から降りた。

塀の内側は雪に光が乱反射し、網膜を灼く眩さで、神と自然石とが睿らかに晰らかなとな

る。

「あ、そんな、あ、来る、うわ、うわ」

雪の扉から出て来た。動く芸術、美のアイデアをも超越するような、それ以上だ。神聖であった。神の美しさは人の比ではない。燦めく麗しい美少女神の四肢、碧い瞳の冷厳な非情と、崇高の甚深微妙義。黄金の髪は太陽よりも眩く輝く。玲瓏なる女神と、粗野なる石との対比が尋常ではない鮮烈を生む。

畏怖は変じ、深い深い歓喜がファルコ・アルハンドロとジョン・スミスを襲った。神経伝達物質ドーパミンが横溢したかのような。

脳内の快樂物質が最高潮にあふれ噴出したかのように。

いや、それはもつと深く深く、透明で、明晰で、清らかな、何よりも途方のなく深い静寂であった。澄み切った甚深な静寂である激烈な快樂。喩えようもなく、どこまでも広大で無音なのに、勢いあふれ、宇宙の誕生のようですらあった。

これでしかない絶対の真実、正義を感じる。

「あゝ、言葉もない……、俺は生まれ変わったような気がするぞ、スミス」

二人ともすつかりは魂消ていた。解放された拡がりの感覚は、無際限であることに根源的な怖れを覚えさせるも、さらさらと清らかな喜び。

「あゝ、何てこったあ、怖ろしや、こりゃあ、飛んでもねえことです。旦那さま、震えます、感激です」

「俺も驚いたよ、スミス。いや、そんなもんじゃない、大変なことだ。稀有なことだ、いりやぬ神が光臨したんだ、清らかな、爽やかな、澄み切った、清浄な……初々しい生命、あゝ、そうだ、生命は何と美しいことか。俺のニヒリズムもシニスムも死んだ」

ここに、小さな奇蹟があった。実際、ファルコもジョン・スミスも、いりやぬ神という神を知らなかった。しかし、いりやぬという名が既知の名であるかのように、現在から過去へと遡って、先天的に脳髓に組み込まれていたかのように、彼らにとっての、既定の知識となっていた。

ロネはにやにやし、

「いりやぬ神さ、私は最初から、そう言ったはずだ」

ファルコは息を吞んで、ロネをじっと見つめた。

「何をしたらいい？」

ロネはにやにやししながら肩を竦め、

「わかってるだろ？　また戦うのさ、革命のように」

ファルコは電撃に打たれたかのように、ジョン・スミスに命じ、

「ここに住むぞ、身の回りの物を持って来てくれ」

「し、承知いたしやした」

スミスを見送り、暫時、呆然としていたが、ふと気がつく。一時的にどこかへ行っていたイシュタルーナが戻って来た。ラフポワを伴って。

「ラフポワ、彼が神兵軍団長ファルコだ。神将たるおまえの配下だ。よく面倒を看ろよ」
ラフポワは眼を丸くして驚いた。

「そんな無茶な、嫌だよ、無理だよ、莫迦なこと言わないで、イシュタルーナ、僕にできる訳ない。こんなに大きな、強そうな人。とても賢そうだよ。僕ができる訳ない」
しかし、ファルコは神妙に辞儀をした。

「是非もないこと。神の下、忠誠を誓います。身命を惜しまず働きます」

「やめてよ、僕、この人の召使ならやるけど、無茶苦茶だよ、イシュタルーナ！」
ラフポワが逃げた後も、ファルコは神妙な顔で立ち尽くしていたが、ロネを振り返り、冷静を取り戻した顔で言う、

「ロネ、ともかくも俺はここで生活する。そうしてみなきゃ何もわからない。それがいい。何かがわかるだろう。生活が革命だ。日々が解脱だ」

ロネは可笑しそうな眼で、

「そうかもな」

「ふう、俺としたことが、小賢しいことを言ったな、ふん、笑いたきゃ、笑え、あゝ、何とも言え」

「いいさ、神を見たんだ。そんな大袈裟な気分にもなるさ」

ロネの言葉を拒むように、額の前で手を振りながら、巨漢は嘆息し、

「もういい、わかったよ。だがな、取り敢えず、この『祠』モドキとやらを何とかしないか、兄弟。スミスが戻ってくるまでは、良い道具もないが、おまえの鉈かと、俺の斧で伐れる材木だけでもいいから、少しばかり、ましにしようぜ。なあ、おい。

これじゃ、あまりにも侘び寂が効き過ぎてるぜ。

完璧に『冷え』て『凍え』てるいやがる」

ロネは振り返った。

「どうでしょう、イシュタルーナ」

「古来言う、『人、義しきとおもうことをなす、善し』だ。大いに結構。衆善奉行（諸々の善きことを大切に心を込めて行う）の精神を以てなせ。

だが、『味』を台なしにするな。ロゴスに従え、この妙味には、真究竟真実の妙義があふれている」

ファルコは似合わない困った顔をし、口籠りつつ、

「む、なるほど。理解不能ですが、了解しました」

イシユタルーナはそんなことなど気にも留めず、屈託なくうなずき、

「そうか。期待するぞ、黄金の神兵軍団長」

太い枝も、怪力ファルコは斧の一撃で、半ば折りながら耒るように伐採した。枝も、暗濃緑の葉も落とさずに、交叉させ、籬のように編み、雪の塀の上下前後左右を、丸ごと蔽った。あたかも、まるで自然物のような、奇妙な木製の祠が出来上がった。

喻えるならば、数百年も経た巨木が朽ちて、基幹部分の洞が残ったかのような印象である。残存基部に蔦や藁（ひしほえ）（孫生え）が密集したかのような。

なお、この時以来、聖なる壺もここに運ばれ、いぬりやぬ神に捧げられる。

イシユタルーナは感嘆した。

「見事だ。見事な景色だ。素晴らしいアイディアである。神妙だ」

翌日、スミスが戻って来た。五人の若者を伴っている。一人ひとり名乗った。

「イヴァン・オクタヴィウスと言います。奨学金をもらっていた神学生でしたが、友人の讒訴に遭い、退学させられました。

行く当てもなく、流れ流れて、ファルコの農場に辿り着きました。数多い彼の食客のうちの一人です」

被っていた頭巾を取ると、濃い黒髪を豊かに湛えた青年であった。肌は初々しいが、鬚を蓄え、威厳があった。次は、

「へい、自分は棟梁^{アルケー}アーキと言います。無名の頭領の下で働いていましたが、石工組合の新人賞を取ったのが運の尽き、仲間内の悪意に遭い、追放の身の上。いや、人の恨み妬みは怖いものです。流浪の末、ファルコの農場の大工になりました」

巻き毛の巨漢だった。二メートル半はある。眼は恐ろしくらいにぎよろつとしていた。アトラスがいたらこんな感じか。次は、瘠せて小柄な男だった。

「ガルニエと申します。自分は建具師でしたが、女に関する喧嘩が原因で街を逃げ、ファルコの農場に匿われていました。伝統的な意匠に通暁していると自負してます」

時計職人のように精密な仕事をしそうな、繊細な感じの顔立ちで、服の生地や仕立ては良い。零落した貴族の末裔であった。次に進み出た男は、

「俺もファルコの食客です。彫刻家、画家、建築家でした。ミハアンジェロ・アリストテレスと言います。花の都レ・ディ・フィオーリ（北大陸南西部のフロレチェ王国の王都）で売れた時代もありましたが、注文主の言うことを聞かなかったので、干されてしまい、食えなくなったので、新天地を求めて今は流れ者です」

彫りの深い、眼窩の窪んだ顔、いつも眉根に皺を寄せているように見えるが、頑丈で筋骨隆々とたくましい。巨漢（この辺りでは二メートルくらいでは巨漢と呼ばない）、というほどではないが、大きく見えた。

最後に進み出て、しなやかな辞儀する男は、

「絵描きです。ファルコに雇われていましたレオヴィンチ・プラトンと言います。図面も引けます。設計図を作れます。自分は商売としての芸術に興味がありません」

優男で、どこことなく、ラファエロ・サンティに似ていた。だが、後に内面が学者肌であることがわかる。

イシュタルーナは真実義を胸に抱く彼らの魂胆を見透かし、双眸に清爽明晰の精神があることに感心した。信義を貫く男たちだ。

「善き哉。栄えあれ、黄金の聖者たちよ、黄金の聖戦士たちよ。」

ファルコの配下として、存分に働け。おまえたちを見れば、生命には意義があることが窺うかだ。

その双眸に耀く諸々の天叡よ、それらによって晰かだ。その透明純粹な、深くも明るい清澄さによって」

五人は祠の前に案内あれ、まずその外観に驚き、中に入って、いりやぬ神を拝した時は、雷に貫かれた者のように魂魄と心身が震え、崇高感に激しく打たれた。彼らはイシュタルーナに真剣に懇願し、

「どうしてもしなければなりません。いえ、このままではいけません、完成へ、もっと近づけなければなりません。」

この魂に先天的に嵌め込まれた規範、調和、黄金比、基準尺度に遵って、真実へと、高邁なるものへと設計し直さなければなりません。神が我ら人間の魂に与えた美と神聖への、この感覚が過ちでないとするならば」

ガルニエが言う、

「これを見て思うのは、素人仕事ってことです。良いアイデアですが、粗野。良さがあるとすれば、現実ってことです。どんなものも現実ですが。未完成ってことです。完成はあり得ませんから。何を創ろうが、死の瞬間には虚しいと気がつくでしょう」

レオヴィンチが、

「しかしながら、この『風味』には、意味が在ります。風味は生かします。その上で、神のお悦びになるデザインのセンスをとどころに鏤めましょう。自然な木材を使った、人為を思わせない、偶然を基本設計とします。微妙な角度、曲線の妙や、形態の不可思議を交響させ、美しいハルモニアを生み出します」

「そう、人間の計算を超えた、生きた自然の、捉え難い、複雑系的なスタイルを模した様式の装飾、古代ギリシアのコリント式の柱頭のように」

ミハアンジェロはそう言うって相槌を打った。

ファルコが加工してからまだ間もない祠を、聖者たちは改造し始める。五人それぞれの伎倆と持ち味を生かし、最初のアイディアにあった『自然の侘と寂』とを生かし残しつつ、完全な木製の祠として荘厳した。

葉のついたままの枝を籬のように粗く編んだその意匠を継承するように、枝の繁茂にも見える透かし彫りや虹梁などが設置される。

イヴァンは、

「儀式には香炉がなくては。神は香りをお召し上がりになるのだから。精巧な鋳物の香炉を作ってご覧に入れましょう。ミハアンジェロの超絶技巧をお見せします」

火鉢のような開放型の香炉を発案し、レオヴィンチがデザイン及び設計、アーキとガルニエが組み立て、ミハアンジェロが装飾を鋳型で作って、荘厳した。

これらが終わっても、さらに材木を集め、加工する。板を作った。

木の祠内に残る雪を除き、木目も鮮やかな板を内に張った。その上に、木目を殺さぬように繊細な線彫りの障壁画を描く。イヴァンの発案が元となるその図柄についてはガルニエが大いに意見し、レオヴィンチとミハアンジェロが相談した結果、

「敢えて、彩色をしない。線のみだ」

アーキが床板も張る。床にも神獣、植物、海の生き物、山の生き物の図が施された。装飾的な龍彫の梁を渡す。嵌木細工の天井を作った。木彫りの、眼につかない、小さな神獣や神像の彫刻を置く。

祠の入り口の外側に、四柱と軽易な枝葺きの屋根をつけ、祭壇を設置する。

巫女が神を拝するための、壁のない、最も原初的な、小さな拝殿を建てた。

香炉をそこに置く。

「素晴らしい」

巫女騎士は讃嘆した。原初的な芸術の歓喜でもある。

「真の礼拝が可能となった。初期の頃を思えば、何という進捗か。人は集まれば、偉大な仕事ができる。しかし又、衆とは、多くの困難と労苦と複雑化の予兆でもあるが」

束の間過ぎ^よった。暗雲の想いが。

イシユタルーナはスミスを呼び止める。

「鍛冶屋、用事がある」

「何でございましょうか」

「剣を鍛えて欲しい。今、私が使っている聖剣を材料に使ってもよい。渡しておく」

「はい、直ちにに取り掛かります」

「それから、おまえに依頼するが、ミハアンジェロに浮彫や象嵌などのデザインをやるよう伝えてくれ」

「剣にいかようなものを」

「角のある原蛇。自らの尾を咬み、円環を成すウロボロスだ。円環の真ん中には、神籬啊咽厨御皇天帝神様の御徴、聖の聖なる真聖の御徴Ⅰ（イ）を」

「素晴らしいことです。稀有なことです。それであるならば、巫女騎士様の聖なる鞘も作り直す必要があります」

「さもありなん。今のような拵えではないもの、荘厳していないものにして欲しい。それはレオヴィンチに相談してくれ」

「仕上がりでしたら、お持ちいたします」

「頼んだぞ。完成した暁には、いりやぬ神の祝福をその剣に与える。その剣の刃は、いりやぬ神の双眸の光そのままの力を分与されるであろう。

それゆえ、〃太陽の剣〃という名をつけるつもりだ。いりやぬ神へ身命を捧ぐ祈りのすべて、神が人に与えられたままの希^{こいね}いのすべて、睿らかさのすべてを込める。必ずあらねばならない」

その頃、見違えるようになった祠を見て、ラフポワは飛び上がって歓び、ただ単純明快に満ち足りて、感無量という表情であった。

「萬歳、萬歳。萬々歳。凄いやあ。もう、びっくりだよー。ほんとに。」

あゝ、何ってことだろう。僕が作った雪の塀が、立派な「祠」に……、木製の祠に変わった。

奇妙だけれども、これは祠だ。真実の祠だ。素晴らしいよ。讃えあれ、栄えあれ」
黄金の五人の聖者たちは神将に平伏する。ラフポワは困った顔をした。

純白の山脈、紺碧の空。

早朝の狩りを終えて、獲物を調理場に、

「おい、よろしくな」

とぞんざいに投げ渡すと、ロネは斜面を登り、鍛冶場に寄った。

「おい、スミス、いるか？」

融けた砂鉄を冷え固まり切らぬうちに金槌で打つ、鉄へと鍛える。一瞬も気を許せない。集中していた。音が激しいせいもあり、ロネの声も聞こえないらしい。

ジョン・スミスは鎧兜や剣や楯の製作に余念がなかった。今は、農場に一人を残すのみで、工房ごとこちらへ移動している。鍛冶屋の家屋は最初、洞窟で行っていたが、音が響くので、すぐに粗末な小屋を高い位置に建てた。上に昇る煙が他の者たちを燻さないようにするためである。

なおかつ、急傾斜を登るようなかたちで、雪洞を作って煙突をしていたが、この煙突を複数に分岐させることによって煙を分散し、人煙があることに気がつかせない工夫もした。

できた武器や防具はイシュタルーナの下に運ばれ、神の御魂込めが行われる。魂が込められた武器や武器は次々と、神の剣、神の鎧兜、神の楯となっていった。

イシュタルーナも来る。

「そろそろ、来るぞ」

皆一様に驚いた。

「え、何者がですか」

遠望するが、見えない。

「前にも言った。銀の兵だ。我らの衛兵だ」

そう言って笑う。ようやく微かに見え始めた。イシュタルーナはどうして知っていたのだろうか。神のお告げか。

「あ、見えてきました、あれは」

急斜面を大羚羊に乗った騎兵隊十数騎が歩兵を率いて駆け上がって来ていた。ロネが眼窩に手を翳して遠望し、

「どうやら、エミイシ族の正規軍ではないようですね。彼らは最下層の傭兵です。傭兵でも、王の軍よりも勇名を馳せらせるゲ・クラン殿の兵のような鋼鐵の兵もいますが、彼らは山賊上がりのような連中ですよ。」

面倒臭い仕事や、名誉に関係のない仕事をしています。恐らく、斥候、又は残党狩りの調査隊でしょう。あの、道案内をしているのは、ムソルグ村の者のようですね」

イシュタルーナは言った。

「ムソルグ村は我が領地の一村だった……是非もない、弱き者たちは。」

さあ、いりやぬ神の臣にして、月の弓を持つ黄金の聖戦士よ、矢の力を試せ」

月の弓を使うのは、初めてだった。狩りでは普通の梓弓を使う。ロネは驚いた顔をしたが、頷いて弓と矢筒を受け取った（イシュタルーナが用意していた）。

矢を筒から抜く。

「え」

鏃は神々しくも、恐るべき殺戮の光をキラキラと輝かせた。精妙な文様の金具で聖妙に装飾されている。矢羽は青鸞の羽で鮮やかであった。重い。いつ、こんなものができていたのか。ロネは息を呑んだ。うまく飛ぶだろうか。

イシュタルーナは強く命じた。

「射よ」

「しかし、敵との距離は、まだ一キロメートル以上も距離があります。いや、二キロメートル近い」

「射よ」

ロネは有無もなく月の弓を構える。太い弦は軽々と引けた。

「はい」

弦から手を離す。重い矢は雷の速さで飛ぶ。光を散らして燃え、彗星のようであった。風を切る唸りの凄まじさ。重さを感じさせぬ。しかも、途方もない飛距離だ。

「うわああああああ」

ミサイルのような矢が兵五人を射殺す。一人を貫通して、二人目の左を剥ぎ取り、三人目の右を剥ぎ取り、四人目を貫通、五人目も貫通した。五人目は貫通というよりは、八つ

に裂けてしまった。斥候騎兵らは止まって、震え上がった。

「し、信じられない……」

射手すらも震え上がってしまった。

標的となった人間たちは言うまでもない。

「ひええ、ひええ」

「何だ、こりゃあ、信じられない！」

ロネ自身も愕然とし、次が撃てなかった。

イシュタルーナが叱咤する。

「何をしている。早く射よ」

「は、はい」

二本目の矢は空気との摩擦で引火し、炎で七人を斃した。

「バリスタよりも遙かに凄い」

ロネは思わず唸った。

バリスタとは、古代の武器の名称で、大きな弩のような装置を用いて槍を四百メートルも飛ばし、射られた人間がそのまま背後の木に突き刺さるほどの威力を持っている。それを桁違いに凌ぐ凄さであった。

「ダメだ、逃げろ、堪らん」

「ひええ、た、た、助けてくれえ」

三本目の矢が逃げる兵士たちを風圧で吹き飛ばし、九名を粉碎して肉片とする。

「待ってくれ、降参だ、赦してくれ」

ハイエナのような傭兵も、逃げられないことを悟った。生き残った傭兵一名と農民三名は平伏する。

ロネはイシュタルーナを振り向いた。

「降参と言ってます。赦したいのですが、よいですか」

「むろんだ。殺しては守衛にならん」

その時だ。

いりりやぬ神が言葉を発した。

「さようなことはない」

「え、いりりやぬ神よ、それは」

イシュタルーナは解しかねるという意外の表情をし、神なる射手となったロネは、

「殲滅せよとのことでしょうか」

人の問いに応えず、碧き双眸が燃える。

初々しき熾^{かよわ}さの、か細い滑らかな四肢が白銀に輝いた。すると、兵の屍が甦^さる。肉片もそれ自体が蠢^{うご}いて集合し、人体を構築した。

「おお」

あまりの奇蹟に、敵も味方も驚愕する。

甦^さった二十一人の兵士たちは自分たちの手を見、足を見て、眼を丸くし、喜ぶ余裕さえなく、信じられぬという表情で震え慄^{おそ}っていた。

イシュタルーナは咳払いし、

「なるほど、そういうことか、ううぬ。いりやぬ神はまさに自由自在、無礙なること、まさに無際限だ」

歩み寄った。

距離があるので、兵たちの近くに行くまでには、少々時間がかかったが、彼らはもう逃げすることも忘れ、怯^{おそ}え切^きって身動きすらできなかった。見栄も強欲も失せて、天然自然のまま、慄^{おそ}き怯^{おそ}えている。特に甦^さった者たちは死の国を見て来たので、日常の価値観などぶっ飛んでいた。

イシュタルーナは言う、

「おまえたちに、いりやぬ神の守衛を命ずる。もし逆らうなら、大したもんだ、あたしにもできない。世界一の蛮勇者と呼んでやろう。呼ばれたいか？」

傭兵と村人たちは平伏し、哭くように叫んだ。

「滅相ありません、どうか、どうか、お赦しを」

イシュタルーナは苦笑した。

「よろしい、おまえたちは実際、幸運を手中にしたのだ。今日から、いりやぬ女神の聖なる兵だ」

「は、は、は、はい」

ラフポワも言葉を添える。

「そうだよ、僕も一番惨めな兵士だったけれど、ずいぶん、よくなって、今は最高に幸せだよ」

イシュタルーナはラフポワの言葉など意にも留めず、

「傭兵よ、おまえたちのその薄い革鎧、土に臥して転戦を続け、泥だらけに擦れ、傷だら

けだ。不浄な血と汗を聖化しよう。聖なる血と汗に変えようぞ。

裏切りの村人よ、尊き労働の証である着古し汚れた農作業服をまとう者たちよ、それらもまた、聖化しようぞ。弱き者たち、小さき者たちは裏切る。やむなし。

だが、喜べ。生存の不安は消えた。もはや、飢えることもなく、凍えることも、蔑まれることもない」

聖咒を誦す。

鎧兜は銀に輝き、チュニツクや外套も同じく赫く。人々の表情も、自信と尊厳と誇りに満ち、何百万年もサバンナの王者であった獅子のごとくであった。

あゝ、獅子の鷹揚に比べれば、わずか数万年、大地の勝者となつたばかりの人間の、何と不安に満ちて生きていることか。燦然たる勝利者の意気が遺伝子に刻まれるには、何百万年もの歳月が必要なのである。

だが、銀の兵と呼ばれる彼らは、それを手に入れた。

イシュタルーナが肅然と言う、

「防衛せよ、真理は勇者によつて守られるべきなのだ、おまえたちを銀の兵とする。生き続けることの苦しみのために藻掻いて足掻き、一度は捨ててしまった誇りを取り戻せ。

いるりやぬ神のために自らを崇め、勇士として正義を保持せよ」

銀の兵となった者たちは見違えるように勇ましかったばかりではない。身体も大きくなつたように見えた。銀に燃える剣を挙げ、

「イヤハレ、ハレハレ、イヤー、イエー、イエーイサー」

歓呼する。

「驚くべきことだ、稀有なこと、奇蹟だ。恐らく時代が変わるのである。魂の革命が起こる。新たな地平は崩壊の始まりでもある。春は夏の始まりでもあるが、秋を孕み、冬を予告する。

因縁生起、万物は流転する。革命よ、星が廻るように。遷移しないものはない。諸行は無常だ」

ロネは嘆息した。

「ふん」

イシュタルーナはそんな憂慮と希望の綯い交ぜをつまらぬことと鼻先で笑い、祠の御前に、番小屋を作るように銀の兵たちへ指示したが、兵の一人が、

「巫女騎士様、お言葉ですが、番小屋を作る前に作るべきは塀です」

他の者も、

「そうです、祠と『拝殿』をぐるりと囲む、本当の塀があるべきだと思います。番小屋はその外側に附すべきものですから」

銀の兵たちは生れて初めて味わう自由を噛み締め、命を発動して生き生きとし、生まれいずるさまざまな想いを言葉にして発案し、皆が自主的に行動するも、

棟梁アルケーが必要だ。原理アルケーなくして、形相エイドスはない」

「それは引き受けよう」

五人の黄金の聖者たちが来る。

「私たちが君たちの意見を聴き、よく導こう。君たちはロゴスの声に聴従すべく心を清ませ」

拍手喝采。拍手は魂を鼓舞する。

ロネもうなずき、

「そのとおりだ。私は私で、自らのロゴスに聴従しよう」

装い、弓を持って、狩りへと出た。月の弓ではなく、普通の弓を持って。

銀の兵たちの議論は続いた。

「見張りの塔もなくては。眼の前に敵が来たら動いても遅すぎるぜ。敵への警戒、情報
が大事だ、それがあってこそだ」

物見櫓ものみやぐらを作ってはどうか」

それを聞き、巫女騎士は、

「善き哉、良きかな、湧きいずる智慧のままにせよ。それこそは、いみりやぬ神の授け与えしものゆえ、神より流出ヌースせしものゆえに」

そう言って、彼らの意見を承認する。銀の兵たちは額を寄せた。黄金の聖者たちは見守る。

「さあ、考えろ、考えよ。何をするにも、関連することがたくさんある。関連する諸々の事柄を思い起こせ。仕事は単純ではない。準備が必要だぞ」

「計画、材料、アイテム、記録、飯だな」

二人が簡略な図面を作成し、材料のリストと材木の加工の指示書をまとめ、作業のための二十一人を連れて森へ入る。

極寒地での作業には、防寒具が必須だ。毛皮を原料にして衣服を調整する衣服係二名を決めた。

イシュタルーナは森に入った者たちとともに森に入り、樹木を伐採する前に咒を唱える。銀の兵たちは詠唱の後に伐った。

次に、それを引き摺り集め、半ば凍った原木で、祠を囲む塀を作る。

塀には小さな門（入り口）を工作し、その傍らに番小屋を設けた。

原木はほぼ素材のままで、森林の威厳を維持している。

黄金の聖者たちが観照し、賛嘆を込めて祝福した。

翌日、ロネが狩りへ行く前に寄る。番小屋の番兵が出て来て、辞儀をした。銀の鎧が燦めき、王を護る衛兵のようだ。いや、むしろ、將軍のようですらもあった。

「一夜で、さらに生まれ変わったな」

イシュタルーナも朝の礼拝を終えたのであろう。塀のうちから、颯爽と出て来た。凜たる巫女騎士はロネを見て、軽く頷く。

まさしく大神殿の巫女のようになっていた。着ていた衣も鎧も、いつしか更新され、白く聖なる衣に白き金の鎧兜となっている。

ロネは祠の前に膝を突いた。神に黙祷する。清々しい気分だ。

そつと覗くと、祠には、小さな窓が切ってあった。暗く、何も見えない。だが、そこには紛れもなく、いりやぬ神が鎮座していた。

双眸を感じる。崇高と敬虔と畏怖とが同時に胸を襲った。生命が昂揚し、涵養され、静謐と清浄とを満たす。

他の人々も動き出した。

銀の兵たちが洞窟からぞろぞろ出て来る。作業が始まった。木材を積む。何かを組み立て始めた。

ロネは眺め、またもや堂々たる姿に変わった銀の兵たちに驚く。廉っぽい、最低最下位の傭兵と、平凡な村人であったとは思えない。

凛々しく誇らしげだった。

ロネは歩み寄って、銀の兵たちに尋ねた。

「いったい、何を作ろうとしているんだ」

「ヤグラです」

「いへや櫓だど？」

「はい、いずれはここが城門のように、御社の門になります。

この門を起点として、城壁のようにさらにぐるりと廻らせ、祠を木の塀ごと囲むつもり

です。

そうです。囲みは二重になります。

妙法は嚴重に、二重に囲繞されるという訳です」

応えたのはゾーイという若者で、ムソルグ村の農夫であった男だ。

利発そうであるばかりでなく、抜け目のない、狡猾そうな表情ではあるが、後で聞いた話では、春になったら、農作業の手伝いで帰りたい、ついては「イシュタルーナ様が赦してくれるかどうか」を心配しているという、意外に親孝行な者であった。里には老いた父母しかないという。

しかし、取り敢えず、今は神々しくて、憂慮も苦慮もしている様子はなかった。そう、家族を呼び寄せられるようになるさ、だが、今は未だ言わないでおこう。ロネはそう思った。さて。

数日後に完成し、銀の兵たちの住居を兼ねた物見櫓となる。祠の塀の入り口から真っ直ぐ十数メートル南の位置にあり、高さは十四メートル。四階建て。

二つの木製の塔は、いりやぬ神の祠の入り口（小門）から見て、左が東塔と呼ばれ、右が西塔と呼ばれた。

数日後に、二十五人の銀兵たちがそこに潜み棲む。来る者たちを見張った。塀の外側に建つ、大門柱のように見えた。門柱と言っても、壁がないので、象徴的な門でしかなかったが。

二十五人の銀の兵のうち、狩猟隊四名は鹿やウサギやキツネや山鳥を捕らえる。

衣服係は生皮を処理した。

調理人二名は調理して奉献する。

祭祀係一名がいりやぬ神への献上をした。献上の暫時後は神前から下げ、皆の膳に供する。

そのために、祭器とともに、食膳のための器や匙などを一名が作る。

他二名は臨機応変に雑事等々を行った。

物資は皆無に等しいが、でき得る限りことを行う。

居住空間である洞窟も改善が図られた。

「聖の聖なる真聖の巫女騎士と、神将に相応しいお住まいを」

イシュタルーナの坐する場所には雪虎の毛皮が四重に敷かれ、荘厳された。木の匙と石の器でスープを啜る。神将にも同様だ。炉は拡大された。大いに暖かくなった。

ラフポワの悦びは言うまでもない。

石を削り抜いて作られ、イルカや海獣の浮彫の施された湯船が炎で熱され、温泉水を満たされて、運ばれた。

「巫女騎士様、どうか斎戒沐浴にお使いください、一日に何度でも清らかな温泉を運ばせますから」

イヴァンが言った。

「承知、これが必要と思っていた」

鎧を外し、衣を脱ぎ、浸かる。霑り潤い涵しをうるおされるのであった。

禁欲的な巫女騎士さえも感慨深く、

「ふむ。善き哉。生活が戻り来たるや。天然自然なる地の鹽に幸いあれ」

神聖の上にも聖の聖なる真究竟の真実義たる太陽の剣が完成した。

究真究極に真なる儀式が執り行われる。聖句が嘉され、秘祭密儀が荘嚴に奉ぜられ、聖なる器に酒や贄が盛られた。

聖なる意匠を凝らした螺鈿や金銀や蒔絵による拵えの鞆（荘嚴しないという指示はイヴァンが大いに反対し、このようになった）から、イシュタルーナが抜剣する。

いりやぬ神が開眼し、双眸が青く燃え上がった。

剣は神化し、角ある原蛇の鱗の一枚一枚までもが精緻に浮き上がる。聖なるイの御徴が細密緻密で繁縟な文様（彫りと象嵌と刃紋とで、この文様を巧みに再現するという超絶技巧。強度や韌度は問題なく、確保されている）に囲まれて聖化されていた。

生き生きとした鮮やかな生命の睿らかさを明晰判明にする。

「おおっ」

誰もが感嘆した。燦然たる輝きで、世界中が蔽われ、一瞬、何も見えなくなったのである。

山が揺れ、雲なくも、甘露の雨が降った。香り高い、白檀香の匂いがする。

「未だ空の位階にある剣であるが、いずれ、大地をも裂く剣となろう。

真理のすべてがこの刃に刻まれている。これが大義だ。考概ではない、實在だ。生々しく實在する義だ。実存だ。切実な事実だ」

二日後。大斧で、太い枯れ枝を割って、薪を作っていたファルコ。

「旦那さま、大変だ」

振り返ると、羊飼いのボツカだった。

「おお。どうした。何で、ここまで来たんだ」

「緊急な事態で、それで、この時期、暇な俺が来たんだ」

「火急なのかわからない口上だな。おい、何があったかを、まずは言え。物事はな、結論から言うもんだ」

ファルコは最初、笑ったが、ボツカが、

「エミイシの大将が武装した百人近い兵を率いて上がって来たんだ。イノグ村占領軍の一部らしかったよ。恐ろしいことだ」

ファルコはふふんと笑いつつ、顔を引き締め、

「早速、来たか」

エミイシの将が九十九人の武装兵を率いていた。

イシュタルーナを探しに来た訳ではない。村人からのさまざまな怪情報（怪しい光が見えた、など）が寄せられるようになったので、統治者として、一応様子を見に来たのである。

兵を率いる将はイノグの奇襲遠征軍を任されたマハルコ・エミイシ。ソシン・エミイシの弟だ。

イルカの町からイノグ村までの二十数キロメートルをわずか四十分で、野を越え、山を越えて駆け（予め、支度はしてあった）、奇襲を成功させた早駆けの英雄である。

然れども、その彼とても、斥候と調査を兼ねた隊が撃退されたなどとは夢にも思っていなかった。

帰還のないことを不思議とは思っていたが、それを気にする余裕はない。名誉も忠誠心もない、最下位の傭兵である。もし、逃亡したなら、いずれ懲罰するとしても、今は兵たちには知れない方がよい。マハルコの想いも、その程度でしかなかった。

現在の彼の中心の仕事は奇襲当時とは変わっている。

戦の直後は、廃墟となったイノグ族の館を中心とするイノグ村周辺の残党狩りや物資の略奪であったが、治安回復の布告以後は、兵士の賞罰、難民の慰撫、戦後統治へと移行していた。

イノグの村に住んでいた者たちは、平民の女子どもまでも殺戮したが、その周辺の領地の農民らには、手を出していない。彼らは相変わらず、村の周辺のあちこちに散在し、エミイシの軍の様子を見ながら、しぶとく生きている。

農民を安堵させ、吸収し、新たな統治下に置くことが、奇襲軍の新たな仕事となっていたのであった。

暫時の法を布き、懲罰を明らかにして治安を維持、これからこの征服した土地の者たちを領民としなければならぬ。戦後の展開まで見込んだ上で、討伐将軍に選任され、派遣されたマハルコであった。

麓の村人の案内で、最近、異様な動きがあるというアヌグイ山に登るのも、そんな仕事の一つである。

「不思議な神光りがありまして……」

「ふむ」

無知蒙昧な民たちめ、マハルコはそう思いながらも、派手な帽子を斜めに気取ってかぶり、太った大きな体を揺すぶって、たつぷりある髭を捻り、不機嫌そうにうなづくのであった。

ところが、山頂近く。

「何だ、これは」

塔を、無意味な門柱にも似たそれを見上げて、呆れた。

「イノグの連中か？　こんな者を作る人数はいないはずだが。古老ヴォーンの末娘、高名な巫女騎士イシュタルーナが残るばかりのはず」

護衛の騎士も訝しがり、

「しかし、イシュタルーナは外国に逃亡したのではなかったのでしょうか。よもや、イノグの者たちがこんな無意味なことをするとは思えません」

だが、そこには粗末な檻褻切れ同然ながらも、いりやぬ神の御徴の旗と、イノグの紋の旗が風にはためいていた。

「我らの知らぬ残党をかき集めたのか……」

よく見ると、門柱の十数メートル奥に、自然な樹木のままの堀がある。堀の正面は開いていて奇妙な樹木の工作物を垣間見ることができた。

さらに、呆れたのは、小さな少年が独りで、とことこと歩いてきたことだ。これもイノグの眷属？　だとしたら、降参を言いに来たのか？

「小僧、何だ、おまえは」

来た少年は言う、

「ラフポワだよ。ねえ、降参しておくれよ」

驚きと笑いで軍団はどよめいた。

「あははは、こりゃ、ぶったまげたあ、いや、あははは、物凄い勇者だ」
ラフポワは困った顔で立っている。

「勇者なんてとんでもない、僕は全然、強くないよ。ただの神将だよ」

困惑したラフポワを見て腹を抱えて笑う兵士が指差しながら、

「あはは、こりゃあ、ぶっ魂消た、神将様だよ！」

その様子を東西の塔にこもった二十五人の銀兵は固唾を吞んで見守っていた。

また、ファルコは洞窟の前を守護するように立つ。

すべてイシュタルーナに命ぜられて、そうしていた。歩むラフポワも、である。

神将少年はさらにとことこと進み出でて、

「あ、あのー、止めた方がいいと思うよ。これ、いりやぬ神の双眸の光輝を浴びた剣で、
雷霆神剣っていうものなんだけど」

「ふざけるな、図に乗りおつて、こどもとて容赦するな、者ども、ぶちのめせ」

「そんなあ」

ラフポワは仕方なく剣を抜いた。

霹靂が轟き、八岐大蛇のように八つの岐に分かれた複数の雷霆となって、九十七名の兵を巻き込み、焼き尽くす。

生き残ったマハルコと二人の兵たちは恥も外聞もなく平伏し、

「うわわ、命ばかりはお助けを」

「じゃ、皆さん、いりやぬ神に仕えてください」

「皆、死にました」

「そうですか、いや、そうでしたよね、それでも、たぶん、彼らもお仕えできそうな気がします」

「え」

そう言った途端、九十七人は生き返った。

「こんなことができるなんて、信じられない、いりやぬ神とは！ 知らなかった！ いりやぬ神か、あゝ、俺たちは何という愚かなことをしてしまったのか、いりやぬ神に

楯突くなんて、すぐにも兄を諫めよう」

イシュタルーナは悪鬼羅刹すらも泣くほどの、容赦のない怖ろしい形相でにらむ。

「おまえは直截的な殺戮者ではあった。現場で虐殺を行ったのは、おまえだ。

だが、あたしはソシンを憎悪する。おまえは手足に過ぎない。ソシンを第一に裁く。

いつの時代も、庶民である兵隊に罪はない。そもそも、我が父と諍うソシンに因縁があった。

それゆえ、逝くなら、逝くがよい。直ちに逝け」

マハルコは兵をその場に置き、大羚羊を駆って、急ぎ帰った。まずは占領軍本部に行くと、ざっと概略を話し、しつかり見張れ、統治せよ、と言い遣してから、エミイシの町イルカへ早駆ける、疾風のごとく。

さて、アヌグイの山上に残され、茫然自失の兵たち九十九人に、イシュタルーナは命じた。

「さて、おまえたちは青銅の兵だ。その誇りを持って、その尊厳を。

大いなる黎明よ。銀の兵たちの下で働け。銀の兵と合わせて五人組を作れ。それが伍（五人一組、軍隊の最小単位）だ。

五人のうち銀の兵が隊長となれ。それが伍長だ。青銅の兵は四人ずつ、銀の兵に従え。すなわち、一つの伍には必ず一人の銀兵がいるようにせよ。二十五隊の伍ができるはずだ。

そして、五つの伍隊を一人の黄金の聖戦士が率いる。そういう組織となす。

おっと、マハルコがいないから、一組だけ青銅兵三人の組ができるが、そこはしばし待て。いずれ、帰って来る。

いずれにせよ、組織は大いに拡大した。

真究竟真実義を讃えよ、真理は理解するものではない。供物を集めよ。いりやぬ神に仕える者たちよ。

汝らの居所を洞窟内に築き、狩猟採取し、供物とおのれの食糧を収集せよ。

伍長たる銀の兵たちの言葉に従え。よいか、真なる声に聴従せよ」

異を言う青銅兵がいようはずもない。

「はい、直ちに、只今！」

命懸けとはこれを言うのか、と思うほど、必死の応答であった。

銀の兵たちは初めての部下に戸惑っていたが、まんざらでもない表情である。ゾーイな

どは、手慣れた感じで指示を出し、

「皆、どうだ、祠を御社へ格上げさせるんだ。いりやぬ神の御社を構築しよう、これだけ人数がいるんだ。何でもできるぜ。それぞれの伍で、役割分担しよう。」

おい、そこのおまえ、何だ？ 俺に何か用か？」

「シュウゼイだ、忘れたか、ゾーイ、おまえの村に徴税に行っただろ」

元収税官シュウゼイは、本来なら、バカ野郎、この俺様を忘れたか、と怒鳴るところだが、銀兵の存在の威が壓となって迫り、かくも控えめな言葉で言う次第。

ゾーイは冷厳と睥睨した。

「知っている。よくもこの俺に声を掛けられたな。いい度胸だ。この状況で」

シュウゼイは、あゝ、しまったつ、と思ったが、もう遅い。

「いや、何、その節はいろいろと」

「そうさ、良く知ってるさ、忘れもしない、するものか、この地獄野郎、俺の家は父がいなくて、母が病弱で少し猶予をと頼んだが、おまえは容赦しなかった」

「あゝ、赦してくれ、役目だったんだ、むろん、そんなつもりじゃなかったんだ、皆、やっていたことだ、俺だけじゃない、時代だ、役人の哀しさなんだ」

加害者とは、往々にして自分のしたことを大したことは思っていないくて、むしろ、自分はまだまあ善人な方だなどと思っていたり、当然のように普通の人間だなどと思っていたりもするから人は滑稽である。

「そうかな。マハルコの占領地政策は懷柔策だった。おまえは自分の成績という、私欲のために、我が家を不幸にした」

「あゝ、赦してくれ、こんなことになるとは思わなかった」

「どういう意味だ。こんなことにならなければ、謝りもしなかったという訳だ。立派な後悔と謝罪だな」

「いや、そういう意味じゃなくて、いや、いや、本当に、そうじゃなくて、口が勝手に、どうか、ゾーイ様」

そんなやり取りがそこかしこで行われていた。横眼で眺めながら、イシュタルーナは愉快を感じる。このような結果は当然であった。戦いの場の先駆者は皆、下っ端で、真打は後から来るものだ。ところが、イシュタルーナの下では、ここへ来た順に上位となる。

逆転が起こるのは必然であった。

ここに来る以前は、威張っていた者たちがかつて踏み躪っていた者たちに今は虐げられ

る。これを欣快と言わずして、何を欣快と言うべきか。今後も、こういうことが続くであろう。人間は自らの車輪が踏み躪った轍に嵌まるのである。

恨み、復讐、それらは神に仕える身にあつては、狭量な考え方かとも思つたが、こういう考えを無理に絞め殺して来た今までの歳月を想い、こういうことがあつてもよいと、巫女騎士は独り言つ。

「硬直した考え、一向な考え方はよくない。万物は流転する。足場はどこにもない、着地はできない。しかし又、激流に棹を差さずば、筏を彼岸へ渡らせられないことも事実である」

とは言え、現実問題として、いずれは神の御心に適い、聖の聖なる功績ある者が上がり、適わぬ者は下がる。自然淘汰が行われるのである。今、虐げられたとしても、永遠とは限らないということだった。

それは、どうにもならない。弱者に優しくと言っても、限界がある。現実と同じ限界だ。むろん、そうだ。ここは、現実だから。

自らに独り言ちて、

「さあ、さあ、空想を止めよ、瞑想を。」

現在に還れ、事象へ。今へと立ち返れ、イシュタルーナの思惟よ。

祠を社へと荘厳する話へと意識を戻せ。それは偉大なる考えだからだ。善哉、善哉、善哉、良きかな、実に正しい思惟である。

いりやぬ神の御社の建築、おお、そのとおりだ。素晴らしい。いりやぬ神を荘厳せよ。それが為すべきことのすべて。衆よ、為すべきことを話し合え、条理ある話し合いには意味があり、価値がある」

イシュタルーナがかくのごとく価値を肯定し、附与することに因つて、兵たちの魂魄は鼓舞される。

イヴァンが言った。

「私めに考えがあります」

「よし、黄金の聖者よ、黄金の聖騎士よ、おまえの考えを聞こう」

説明が終わると、イシュタルーナも、その周囲にいた者らも皆が納得した。

「それがよい。材木を集めよう。森へ行こう。イヤハレ、ハレヤ、オーレ、イエイ、イエイサー」

森に着くと、イシュタルーナが最前線に出て、

「では、早速、祈りを捧げよう」

聖なる咒を聴いて、樹木の元老たちは納得し、受諾した。

伐採する。杉は脆いので、樫を選んだ。この地方にしかない高山こうざんいつかし斎樫だ。鉄のように硬いが、伐り出しに苦勞する。イシュタルーナが、

「斎樫は、そのような錆びついた戦斧では伐れぬ。待て、いりやぬ神の力をお借りしようぞ」

聖咒を誦した後、戦斧にイシュタルーナが息吹を掛けると、たちまちそれは聖なる大斧となった。岩でさえも、常温時のバターのように力せずともよく切れる。頑丈な材木は整然と列した。

イヴァンは言った。

「樹皮を剥かぬ粗野なままでよい。元老たちの心を大事にせよ」

祠と拝殿を囲っていた真円の塀も含めて、全体を蔽うよう、高山斎樫の材木を方形に組んで壁とし、番小屋をその方形の外に移動し、すなわち、社の中に塀に囲まれたあの奇妙な祠がそのままあるように柱、梁、壁、屋根をくみ上げていく。

方形の各面は正確に東西南北に定めた。屋根は三角の破風のある切妻型で、神と人とが自由に交流し合っていた太古の、素朴な御社のふうである。

本来、真円を四角く囲えば、正方形になるところであるが、御社は長方形で、南側部分が長く延びているかたちに作られ、番小屋はその南の外側、数メートル離れたところに置かれた。

寸法は、南北に十二メートル、東西に七メートルである。

延長された部分はスペースとなるので、二つの部屋が作られた。

「ほんとに？　これ凄いよ！」

何もお願いしてなかったのに、何で？　あゝ、でも、とてもうれしいよー」

ラフポワが喜んだのは、その二つの部屋のうちの 하나가、彼個人の居室として作られたことがわかったからである。

南面する社の正面の長じた部分、元の祠の塀の南外側に当たる部分に、二畳ほどの、板で仕切っただけの狭い空間、イシュタルーナとラフポワのための部屋が、左右に一つずつ作られたのであった。

洞窟からの引越しは日を選んで行われる。

部屋の中は、ベッドと小さな机、簡素な椅子のみで満杯、他には暖房用に熱した石の入

った鉄鍋が置かれていた。

イシュタルーナも微笑み、

「さらに、日常が返って来た感じがする。生活とは尊いものだ。

しかし、油断なきように心を引き締めよう。いりやぬ神の御心は知り難い。人の思惟など、いりやぬ神が糸繰り操る絡繰り人形に過ぎないのだから、何を推し測れようか。推し測ったとて、何かは」

ラフポワは難しいことは考えない、喜悅満面、大いに感激していた。椅子に腰かけ、

「生れて初めてだ、自分の部屋なんて。あんなに不幸だったのに、今は幸せだ」

初期の頃と比せば、まるで天国と地獄ほどの差異があった。暖かく、快適で、食糧も十分だ。

そんなところへ、イシュタルーナが、

「勉強を教えてやろう。学びたいな？」

「そうだよ」

「教える。覚えろ。哲学、神学、歴史、宗教、数学、兵法」

ロネは社の東側の傍らに、併設する小屋を自分で作った。洞窟から、彼の道具等をすべて運んだ。

ファルコは構築されていく生活を再確認しながら想い、こう言った。

「俺も決意した。完全に、ここで暮らそう。定住をしよう。御社の西の外側に、自分の棲息地、棲家を作ろう。」

農場はエクシスとテンツのポジ兄弟と、エッセンとティアのネガ兄弟に正式に任せよう。四人でよく話し合い、協議し、協調して寡頭政治をするよう指示しよう。

ポジ兄弟に任せれば現実的だが、品が下がる。獣的だ。聖化しようとするネガ兄弟の手法も必要なのさ。正解はない、すべてはバランスだからな。奴らによくそう伝えろ」

ファルコはするようにボッカに命じて、スミスとともに帰らせる。

ジョン・スミスは鍛冶の工房を作るために、弟子を呼びに帰るのであった。

ロネは九十九人のうち、十数人に声を掛けて手伝わせ、屋根だけがある（壁のない）大きな釜場を作り上げた。大勢の人間の食事を調理できる場所が必要だったのである。

ゾーイの配下に、チエフという者がいた。

エミイシの軍にいたものだが、元々の職業は小説家で、提案した。

「東西の物見櫓があるだけでは無意味です。城壁のような木の壁が必要です。至急造営し、併せて、そこを青銅の九十九人の住居としましょう。どうですか」

青銅の兵士たちは、自分たちの居所として、東西の塔門を端緒とする社の敷地を囲む壁として、ぐるりと環状の集合住宅を階層的（四階建）に造り、城壁的な役割を兼ねるという計画を立て、五人の聖者に相談し、設計をしてもらい、施工を始める。

完成までの間は、引き続き洞窟で寝食した。

かくして最初の石壁はわずか一週間で完成し、素朴な塔門と合わせれば、総計百二十五人が住む建造物となった。

イシユタルーナはその間にも、別に指示し、

「社に聖なる飾りが無い。真理を荘厳して真理たらしめよう。一切皆空である。聖なる常緑樹の枝葉を飾るべきであろう」

ロネが言った、

「それもよいでしょう。そして、盛大なる儀式のための、もっと大きな祭壇をも作りましょう。彫刻の妙技巧を凝らさせて。」

それが今、巫女騎士様のお言葉にも適いましょう。

さあ、諸君、聞いたとおりだ。この仕事は君たちのものだ、五人の、聖者にして聖戦士たる者たちよ、君たちに任せよう」

画家レオヴィンチはたちまち羊皮紙に木炭で定規を当てながら図案を描き、それを基に大工アーキが切り出した部材に、彫刻家ミハアンジェロが装飾を刻み彫り浮き上がらせ、建具屋ガルニエとアーキで、それらを組み立てる。ガルニエは金物の装飾具を作って嵌めた。

社の前に、木彫と装飾具で荘厳された四阿あずまやが設けられ、そこに原初的な大祭壇が置かれる。

「獣や魚の贅を積み上げよ、酒壺を満たせ、青々識針葉樹の葉を飾れ、木の実をならべよう」

それらが供えられた。太陽の剣を、いりやぬ神の双眸の光に翳す。今まで以上に聖の聖なる御魂の流出を受けた。歓喜の源なる光善を褒授する。剣は眩く光裂し、世界をホワイトアウトさせた。

巫女騎士は立ち上がり、曙光に燃える高き雲のように髪を靡かせ、言う、

「偉大なるかな、大いなるかな。あゝ、幸福よ。弥栄あれ、真幸くあれ。さあ、これより位階を整える。銀の兵は騎士となる。将校として、青銅の兵を従えよ」

参集した一同の歓声。イシュタルーナはさらに言う、

「さあ、皆も食べよ。酒を飲む者は呑め、赦す。饗宴だ」

歓声が上がった。

「あゝ、何て素晴らしいんだろ。二人きりの時が嘘のようだ。これ凄い美味しいね」

ラフポワは初めてこのような盛大な（しかし、粗野であることには、一向に気がつかなかった）饗宴を見る。幸せの極致だと感じた。

さて、日付を一週間前に遡ろう。

マハルコは兄ソシンを説き伏せるため、宮殿を訪れていたが、弟の話聞いたソシンは大いに憤慨した。弟以上の巨漢である兄は長鬚を震わせ、金糸刺繍の真紅の貫頭衣の胸や腹を激しく上下させ、

「何たる愚か、百もの兵を以て、小娘にあしらわれたか、無能め、バカが、何を懐柔されておるや、いにしへの神だど？」

迷信を。言うな、もはや、時代は変わったのだ。地霊や物の怪など、何かは。理性と科学の時代よ。

北大陸^{ノルテ}にある彼の国を思え。今や、世界を席卷せんばかりの独り勝ちだ。祭祀祈祷は人を統合せんがための空想の産物。古代に於いては、人々は神の名の下に結束した。文化・宗教が人々を結束させた。

ええい、見るも汚らわしや。衛兵よ、この愚か者を地下牢に投ぜよ」

とはいえ、百の兵が役に立たなかった事実を重んじ、急遽、資金を作って千人の兵を集わせ、武具を整え、食糧を調達し、号令とともに、出発させた。一貫した憤怒で、昼も夜もなく、わずか一週間で、これらすべてを仕上げたのである。

殺戮の兵器をぎらつかせ、嶮しい雪の急斜面を強いて、湯氣を立てながら行軍したが、そのうちの百人は道々、いりやぬ神とイシュタルーナの噂を聞いて怖れをなし、夜逃げ、若しくは脱走をした。

士気の上がらぬ戦闘もまた、お粗末なものである。

エミイシ一族が誇る精銳はラフポワの雷霆神剣、この時のために特別、一時的に「水」

の位階を賜ったその剣の一振りで、たちまち大きな雷に撃たれ、九百名がたちまち黒い炭となってしまった。その凄まじさは大山脈もゆっさゆっさと、大きく揺らがせたほどである。大地は割れ、丘は崩れた。豪雨となった。

独り生き残ったソシンはびしょ濡れで、恐怖に震えて平伏し、

「大いなるかな、いりやぬ神の慈悲を」

傘を開きながら、ラフポワは困った顔をし、

「どうして無駄なことをするのでしょう。さすがに、僕も面倒臭いですよ、最初から降伏してください」

最初から降伏するなら、来る意味がないが、そんなことを追及する余裕などあろうはずもなく、ただ、ただ、

「どうか、お赦しを。何でも言うことを聞きます、何でも、どうかお救いください、お願いです、何とぞお助けを、あゝ、いりやぬ神様」

ラフポワは呆れ、

「どうして言うことが、すぐに変わってしまうのでしょうか。降参するなら、闘わないでください、愚かです。命の無駄です」

いりやぬ神を振り返って、

「いりやぬ神様、どうすればよいですか」

南の青き海原のごとくに双眸を燦めかせ、舞うように指を空中に滑らせる。細く淡く柔らかに初々しき指先から星が零れた。砂金の霧となって散りながら渦を成し、再び結び、太陽となる。雲が切れ、日が差す。いりやぬ神は命じた。

「朕に仕えよ」

かくして、九百名の兵は生き返って、いりやぬ神に仕える神の兵となった。彼らもまた、かつて生き返った者たち同様、甦ったとても、喜ぶ余裕もなく、奇蹟に慄き震えている。

平伏したままだ。

イシュタルーナは言う、

「九人ずつ青銅の兵の下に什じゅう（十人隊）を成せ。

おまえたちのことを銅の兵と呼ぶ。ソシンは牢に抛る。数には含まない。銅の兵は総勢九百人だ。マハルコが戻れば、すなわち、標準的な一組の伍は総勢で四十一名（銀一名、青銅四名、銅三十六名）となる。」

全体で千二十五人（四十一名×二十五隊）だ」

九百人の兵の中には、先の九十九人の兵よりも、身分の高い者も数多くいた。前回同様、悶着はあったが、青銅の者たちが別人のように威厳があったので、銅の者たちはすぐに何も言えなくなった。

イシュタルーナははっきり断ず、

「いりやぬ神はすべてを見る。すべてを知る。

異逆は赦されない。上位の者に逆らう者はその瞬間に死す。

我らが神の邦に於いては、上位は人の与え給えしものに非ず。家柄や血筋に拠るにも非ず。

我らが神の邦に於いては、いりやぬ神の与えしもの。

人の邦とは事情が異なる。それゆえ、上位者に逆らう者はいりやぬ神に逆らう者である。

あたしは今、はっきりと言った。おまえたちは全員、あたしの言葉を聴いた。それでも、逆らう者は自ら死を望んだに等しい。一切の弁明は不可能だ。

なぜなら、いりやぬ神は無謬だからである。裁判も無用である。完全にして完璧である。人の世とは違う。人は無謬ではない。だから、面倒臭くて、非効率的なシステムがある。いりやぬ神の下にあるここでは、まったく違う」

ソシンは寒冷の中、外套を奪われ、棘の鞭で肉に轍を刻まれ、洞窟の一角にある牢獄に縛られる。

イシュタルーナは激越に罵った。

「愚昧な思想に憑かれ、我が一族を滅ぼした劣等人、愚昧な科学崇拜者、科学万能主義の敗北だ。破廉恥漢、悪魔め、暴虐な殺戮者、貴様には恐るべき死を与える」

「ひいい、どうか、どうかお赦しを、ご慈悲を」

ソシンは震え上がった。

「安心しろ、赦すことなど永遠にない。この世で誰も経験したことのない激烈な苦痛を与える」

復讐の鬼神が彼女の魂にどす黒い噴煙を濛々と上げている。ラフポワが言った。

「イシュタルーナ、怖いよ、そんなこと言わないで」

巫女騎士は顔を歪める。

「おまえにわかってたまるか」

「僕も家族を」

ラフポワがおずおずと言った。

「それがどうした」

間違っている。そう思いながらも、口にしてしまった。ラフポワはめそめそ泣いたが、それでも少年は憤激する巫女騎士を恐れていなかった。

「誰も経験したこともない苦痛だなんて、そんな恐ろしい言葉……。イシュタルーナの苦しみはわかるよ。けど、誰も経験したことのない苦しみじゃないでしょ？」

イシュタルーナの頭頂に激怒が衝き上がる。それは正論をもって突き返されたときに人が起こす逆上だ。

「理屈を言うな、詭弁者め！」

剣の柄をぐっと握りしめ、巫女騎士は唇をきつく結ぶ。悲しみに戦慄わななくラフポワへ向かずに、洞窟の壁を蹴って足早に去った。

とてもかくても、エミイシ氏族の敗北は決定的となる。

その衝撃的な知らせは、エミイシ氏族の都イルカの宮殿を震撼せしめた。

「決戦を。果てるとしても、名誉ある死を」

「まだ一千の兵がある」

「愚か者、残っているのは、ほぼ予備兵だ。予備役で集まった一般人に過ぎない。正規兵ではない。正規軍の精鋭部隊すら敗れたのに」

「もし、予備役に就いている兵士が皆やられれば、成人男子のほぼすべてだ。それが死んだら、どうなる？」

「和平を、和議を、和睦を」

「イノーグの娘が復讐に燃え滾っていると聞くぞ、和睦が叶うか？ 死者は甦らせられぬ、代償は死で払うしかないのだ。もうだめだ、やられる」

「何ゆえに、イノーグの残党に敗れたのか、わずかな人数のはずなのに、精鋭部隊までもが」

「神の力だ、神を否むべきではなかった……」

「ロネやファルコも加担していると聞くぞ」

「ロネ？ ルネッサンス・ストリントベリイ伯爵か、革命貴族の」

「人権派弁護士のファルコ・アルハンドロ」

「ええい、それがどうした、慮もつていても埒が明かない」

「援軍は？ 日頃、昵懇の貴族たちは、いずこに。密約の同盟者たち、暗黙の盟約者たち、言わずもがなのシンパたちを呼べ」

「取り巻きや阿諛追従者たちが何の役に立とう、利害関係があればこそ追従する者たちが。権勢に抛ろうとする者など、風の前の塵に等しい」

「友はいる。いや、ここで我らが斃れば、自らもやがて同じ憂き目を見ると危惧する者たちがいる。檄を飛ばせ」

「承知」

飛脚が飛ぶ。

「しかし、間に合うであろうか」

「いや、間に合うまい」

「だから、それまで戦うのだ」

「保てるか」

「無理じゃ」

「いや、為せば成らぬものかは」

そこへ、喧々諤々たる忠臣、老臣、譜代の臣下らをかきわけてる巨漢の老人。

「待て、かくなる上は是非もない」

一族本家の当主シエミ（ソシンの父にして、エミイシの族長）が決断する、眉間に苦悶の叢雲を寄せ集め、苦渋の選択を。

「カベンソン城へ撤退する。難攻不落の城砦へ」

一万人を超えるエミイシの一族郎党は都を捨てて、大移動する。その牽く影は悲愴であった。取る物も取り敢えず。「イノーグが復讐に来る」と口々に叫んで。

行程はわずか三キロメートル。だが、老人や幼少者、病人や身体の不自由な者には辛かった。

父によって地下牢から解放されたマハルコは大いに悩んだが、苦渋の選択をし、エミイシ族の大移動の列から脱し、いりやぬ神の軍に加わって青銅の兵となる。

「心裂ける想い。さりとて、これが正しきと信ず」

早暁から動き出し、夜までかかって、砦に着く。狭く峻しい急傾斜路を登ることが、最大の難儀であった。

猛々しい岩山の城門を閉じ、籠った。

その同じ日の黎明、奇しくも大移動が始まった頃、アヌグイ山では、

「襲撃する」

イシュタルーナは決意した。

「戦の準備をせよ、敢えて酒を振舞う。飲めや。どちらが正しかったかを、はっきりと決めてやる」

戦争の準備が始まった。

第四章 昇り逝く太陽と滅亡

佛法の聖典のごとくに

百人の兵が選ばれて、ファルコとジョン・スミス、五人の聖者の指揮の下、武器や鎧兜の製作を開始した。真のプロフェッショナルは数人だが、良き指導者と一人一人の熱き想いの下、魂の震えが伝導し、不眠不休で貫かれたわずか七日のうちに、イシュタルーナの望む装備が完成する。

聖なる巫女騎士は聖咒を唱え、眠らぬどころか、食事さえせず、執念で一切の武器や鎧兜、装備を聖化した。

「神魄を込めた瞬、いま翻す刀剣の刃の光輝に不問の正義があり、燦めく楯に真実は実在する」
そう宣言し、自ら大いにうなづく。

しかし、遠征には、糧が必須であった。

パンを焼く石窯が急増される。岩塩坑から採掘した塩を大目に含ませ、保存が利くようにした上で、二度焼きして乾燥パンにし、乾し肉とともに荷馬車に積まれた。肉は塩に埋められる。

数多の樽が作られるためにはたが需要が必要で、鍛冶屋は兵器ばかりではなく、そんな用事にも追われて忙しく、疲労困憊、できた樽には、塩漬けの諸々の食材（肉、野菜、魚）に、オリーブ・オイル、塩、買い集められた葡萄酒が満たされ、車軸の太い、補強された荷車にどすどすと積み上げられた。牽く馬の脚も太い。

何か不足があれば、ロネが供を連れ、麓に降りて、村々を熱心に、至誠と真心とを込めて廻った。

「布施を求めます。いりやぬ神の供養のため、栄光のために。すなわち、真実義のために。」

清らかな、偽りのない、真の心の悦びの起源がいずこにあるかご存じか。それは、い

りやぬ神の希求に他ならない。

そうでなければ、悦びは何ゆえに存在するのか。

人々の誠実な願いは叶います。

やがて、子牛や子羊がたくさん生まれ、太る。麦は大いに実って豊作となり、早魃も大雨もない。

安心してください、物資が不足することは今後ない」

彼は又遠く市場にも足を運び、軍用の大羚羊や軍馬、わずかではあるが龍馬（龍と馬の間に生まれた神獣）を調達した。むろん、最初から上手くいったのではない。嘲笑を浴びた。

「布施を求めます」

ロネは何ら説明もせず、そう言い切った。まるで、イシュタルーナのように。

「頭がおかしいのか？　なぜ、おまえに馬をやらにやららん？」

「失せろ、狂信者」

ロネは薄ら笑いを浮かべた。

「気味の悪い野郎だぜ、ぶっ飛ばすぞ」

「おい、待てよ、あいつはロネだぜ」

「え、あのロネか、何て様だ」

「いや、知らないのか、奴は今、巫女騎士の第一の臣だ」

「え？」

ロネは懷から聖咒の護符を出す。

黄金の光燦々たる眩さに、誰もが魂を射抜かれた。真実義の本質を現実実に実在させている。崇高感に魂を貫かれ、皆一様に言うのである、このように。

「あゝ、信じ難い、何たる稀有な、神々しさ、怖ろしいまでに。あゝ、凄まじい歓喜だ、未だかつて感じたこともない、感涙、崇高な悦びだ」

調達された馬の群れは、青銅の兵たちが次々と引率した。山の麓に臨時的に作られた牧場に集められる。

軍が整うと、イシュタルーナは大いに聖なる咒を唱えて祝福した。二の腕や太腿や胸元の金の聖句の刺青が妖しく焼く。

「いりやぬ神に大いなる栄光あれ、正義あれ、いりやぬ神の御名の下に闘う聖なる戦士たちよ」

金、銀、青銅と銅の兵による総勢四百十六の戦士たちは列す。華々しくはないが、威光にあふれていた。ラフポワは驚嘆する。あまりにもすべての状況が変わった。

輝かしき巫女騎士が閲兵する。イシュタルーナは戦闘を前に、位階を糺した。乱麻を断つごとく人の行いは整然たるべし、と。

「この戦闘に参加する者も、しない者も、すべての位階を糺す。

百の青銅の兵たちは青銅の騎士とする。九百の銅の兵を従えよ。

二十五の銀の騎士たちは銀の将とする。百の青銅の騎士たちを従えよ」

さて、かくしてエミイシの兵がエミイシを襲うこととなったのであった。

銅の兵は三百六十人、銅板を張った革鎧を着て、銅製の長槍を持った。全員が合成弓を備え、強力な投石器と巨大なバリスタを備えている。

バリスタとは、弩のような構造で長槍を発射する武器で、装置が大きいものでは、一キロメートルも飛んだ。威力も絶大で、射られた人間がそのまま背後の木に突き刺さったと言う。

銅の兵の後ろは青銅の騎士四十人、馬二頭が牽く戦車に乗る。二人一組で二十台あった。全員が連射式の弩を持つ。エミイシに雇われた傭兵が持っていたものと同じで、イシュタルーナはその恐ろしさをよく知っていた。一秒に一発発射することができる。すなわち、四十人が持てば、一分間で二千四百発を飛ばせるのである。空を蔽うであろうことは間違いない。

銀の将十人は大羚羊に跨り、銀の剣と楯と槍と合成弓を持っていた。合成弓も、よくできたものは、三百メートルという信じ難い距離を飛ぶ。

金の聖者たちは、イヴァンとガルニエ。

ファルコとジョン・スミスが討伐將軍となつて、実際の指揮を執った。神臣ロネは参謀として参陣。神将ラフポワは今回については留守居役で、いりやぬ神を供養し、守護する役目であった。凜々と軍兵は歩を鳴らし、雄渾なる下山が始まる。

巫女騎士の楯に、精緻に彫られた蜥蜴の紋が焰のように色彩や形態をゆらゆらと移ろわせた。イシュタルーナは問う。

「神の臣ロネよ、敵の兵力は」

「敵は既に主力を喪っています。実際に闘える兵は二、三百でしょう」
ロネが応える。

燦然たる鎧兜の巫女騎士は滾る眼でうなずいた。

山を下ると、イノーグ村だ。

村の廃墟を占領していたエミイシの軍はとくに撤退していた。

悲しみのまなざしでイシュタルーナは故郷を久々に眺める。無残に遺った焼け柱、瓦礫、焦げた煉瓦の体積、名もなき土盛は仮初めの墓か、折れた梁、すべてが亡き生活の残であった。

「少し早いが、ここで休もう」

野営の準備をする。日が没すれば、槍を傾け、剣を置いて、焚火をした。煎った豆を磨り潰して、湯を沸かす。

斥候は絶えず巡回した。深夜であっても、交替で警戒し、守衛する。翌朝、感傷を振り捨てるように、

「是非もない。行くぞ」

征く。

行軍は神霊の香気を持つも、実装は貧相であった。だが、燦燦たる光に満ちる。

二十数キロメートルの道のりは、丸一日を要した。道々、山賊を討伐するなど民衆を安堵させた。よって、名声は高まり、祈祷なども行ううち、布施・献上品を受け、食糧や衣類などの物資に飽くほどで、不足を感じることはない。

イルカに着くと、既に蛻の殻で、しかも、ナポレオンの侵略直前のモスクワのように火を放たれ、既に一週間以上も炎上していた。

「敵はカベンソンです」

難攻不落のカベンソン城は鋭い岩山の頂上にあった。

その日の夜、カベンソン城の麓に、イシュタルーナたちは着く。月光に見上げる尖った岩山の頂上の城砦。とても一万人以上が収容できるとは思えなかった。

イシュタルーナは神の臣や神兵軍団長、黄金の聖者たちを招集する。

聖なる句の刺繍された衣を広げて、包んでいた見事な武器をならべた。

「夜襲だ。ロネ、月の弓を持て。あたしは太陽の剣で赴く。」

ファルコ、おまえには海の大剣（一メートル以上もある広い刃幅を持ち、そこには海馬や海の怪獣や奇妙な海棲生物の浮彫が自然と浮き上がり、又、長い柄の部分にも同じく海馬や海の怪獣が鑄造されていた）を与える。イヴァン、来い。天空の戟を持て。ジョン・スミス、大山脈の双頭の大戦斧（両刃の巨大な斧であった）をおまえに。

おまえたち四人に、大地の楯を与えよう。

これらの鉞・戟・斧と楯とは、未だ「空」の位階ではあるが、神なる武器であり、又おまえたちの権威を保証する。

イヴァンとジョンは、ここに残れ。外部から、敵の援軍が来るであろう。恐らくは、エミイシと一派を組むウマヤド家やオキアミ家など大貴族たちだ。投石機やバリスタでまず遠隔から攻撃し、接近したら連射式弩で射よ。迎え撃つのだ。

カベンソン城は、まず、あたしたち三人で攻める」

周囲の兵たちは驚愕した。あ然として物も言えない。そんな戦術があらうか。

「疑うなかれ、逝くぞ。死ぬと想い為して闘え。いりやぬ神は、すべてを網羅する。いりやぬ神の加護は空気と同じだ。勝つ者は勝ち、敗れる者は敗れる」

「そんな。」

それは現実にかかることのすべてが正しいという意味ですか」

「そうではない。いや、それだけではないと言うべきか。だから、逝くのだ。人、堂々果敢すべし」

大羚羊に颯爽と跨ると、疾風のごとくに実行された。白銀の月の弓は矢を山頂まで飛ばし、城門を粉碎した。次々と放つ矢はミサイルだ。城壁すらも毀つ。

「行くぞ」

高低差二百メートルを一気に上がる。ファルコの振るう海の大鉞はその名のとおり振り被れば波のせり上がりのごとし、潮を轟かせる厚さ三センチ、刃の部分が特別に大きくなっていて、柄も四メートル以上もある巨大鉞で、ぶん回せば、怒涛のように人を呑み込んで粉碎した。

難攻不落と呼ばれたカベンソン城がいつも簡単に陥落する。敵兵二百が斃れ、エミイシは降参した。

黎明の頃、麓近くに、敵の援軍があらわれる、時遅くも。隣のウマヤド伯爵領からの援軍五百だった。ほとんどが槍騎兵である。

「撃て！」

彼らは待ち伏せていたジョン・スミスの兵の、連射式弩やバリスタや投石機の餌食となった。日が昇ると、オキアミ侯爵の軍千もあらわる。侯爵軍は油布を巻いた石に火を点けて、投石機で飛ばしてきた。

カベンソン城に旗を上げたイシュタルーナたちが麓の基地に戻り、オキアミ軍を迎撃せんと向かう。

「それ、逝くぞ」

イシュタルーナは龍馬に跨り、原蛇と聖なる御徴の太陽剣を翳し、先頭に行く。刀身が日光のごとく眩く燃える巫女騎士の剣は光の燦爆で、立ち向かう者を二十人ずつ薙ぎ払った。その勢いにオキアミ軍は早くも逃げ腰、呆気なく崩れる。

「撤退——っ」

その声上がる頃は、もはや潰走状態であった。オキアミ軍が下がり始めると、

「て、撤退、撤退じゃー」

既に弩の餌食となっていたウマヤド軍は堪らんとばかりに撤退を始める。こちらも実質的に潰走であった。

イシュタルーナの軍は歓呼の声を上げる。

「勝ったー、勝ったぞー」

「永遠なるいりやぬ神に栄光あれ、偉大なる巫女騎士イシュタルーナ様に栄光あれ、我らの勝利だ」

抱き合って感涙していた。

勝鬨の怒涛は鳴り止まない。

巫女騎士は言った。

「追わずともよい。

捕虜を連れてイルカに戻るぞ。エミイシの町イルカを衛星都市として統治する。降伏する者を赦免する。市民を養え。後に、イノーグ村とイルカの再建にその身を庸^{もち}う。

イルカの町の名を改め、イキリヤヌイルカとする」

いりやぬ神のイルカという意味だ。

駐屯し、ソシンを洞窟からイルカの廃墟まで引き摺り出した。彼の父であり、エミイシ家の当主、族長なるシエミをも連座させ、聖なる巫女騎士は睥睨する。

勝者となったイシュタルーナは心臓と肝臓と脳髓の根幹から湧き上がる憤りに駆られ、激烈な復讐を望んだ。

「あゝ、遂にこの日が来た。

あゝ、どれほど待ち望んだことか。

歯が折れるほど歯噛みし、血涙を滂沱と流し。

どれほど時間を長く感じたことか、あゝ、遂にこの時が来たのだ。

思い知るがよい愚劣者ども。

もったも残酷で凄惨な苦しみと、長い長いその苦しみの後の死を、忌まわしき、薄汚きソシンとシエミとに与え給え」

シエミ老人はあきらめた顔であったが、ソシンは震え上がり、額と長い黒顎鬚を地下牢の石床に摺りつけて、

「どうか慈悲を。どうかお赦しを」

イシュタルーナは逆上した。

「命乞いをするのか、ソシン、浅ましい。」

おまえは命乞いした我が一族を赦したか。いや、おまえは泣く幼き子までも虐殺した。おまえは、なぜ、自分がしたことを拒むのか。自分だけが赦されると思うのか。その愚かさだけで、おまえのような人間は生きる資格も、生まれて来た意味もない。

おまえの人権を剥奪する。他人の人権をないがしろにする者は、その人権をも奪われる。それは当然だ。おまえには、人権など相応しくない。人である権利もない。生きる資格もない。

もはや、おまえは人間ではない。生ゴミと同じだ」

「おお、せめて安楽な死を」

「すべてはカルマ（行為）の結果だ。右手に斧を握れば右手に斧が在るように、おまえは自らの行動でいるべき場所に来了。穴に歩む者が穴に落ちるように、自らそうしたのだ。車輪が泥濘に轍を刻むように、この結果を導いたのだ。型押しのように道には同じ型が痕する。」

地獄で死者に詫びろ」

だが、いりやぬ神はイシュタルーナの復讐を制止し、巫女騎士にかく命じた。

「生かして、朕に仕えさせよ」

「何と仰せられるか、何と！ ならば、一度虐殺させてください。その上で、いりやぬ神よ、甦らせ、いりやぬ神に奉仕させてください。おお、そうしてください。お願いします。」

そうでなければ、あゝ、いりやぬ神よ、我が心は、いや、我が魂は牽き裂けてしまします」

そう言った後、イシュタルーナは俄かに思い至った。

「そうだ、いりやぬ神よ、我が一族を甦らせてください、最も偉大なるお方、できるはずです」

だが、いりやぬ神は拒否した。

「ならぬ」

「何ということを言われますか。そんな理不尽な。我が耳は狂ったのでしょうか。あゝ、しかし、何ゆえに」

いりやぬ神は冷厳に睥睨したままであった。

イシュタルーナは唇を噛んだ。冒瀆の言葉が憤怒の噴煙のごとく、黒く濛々と湧き上がった。だが、いりやぬ神はさらに言う、

「ソシンとシエミへの復讐を禁ず。いりやぬ神に仕えさせよ、朕はそれを欲す」

「ならば、我が一族も仕えます。何が異なりましようか。いりやぬ神が仕えるものを欲するならば。どうか甦らせてください」

「いらぬ」

「なぜ」

「所以などない。いりやぬ神はすべてを網羅する」

「そ、そんな……異教も背教もないと仰せられるか」

「ある」

「ならば、なぜ」

「すべてを網羅する」

「いったい」

「物質事象時空を問わぬ一切いりやぬである。異教も背教もない。ただ、そのみである。」

異教も背教もある。ただ、そのみである。

異教も背教もなく、かつ異教も背教もある。ただ、そのみである。

異教も背教もなく、かつ異教も背教もない（ということ）もない。ただ、そのみである。

又、それら一切であり、ただ、そのみである。

又、それら以外であり、ただ、そのみである。

そうでなければ、すべてを網羅するということにあたわず。

すべてを網羅するということ自体についても、亦復如是（またまたこれのごとし）「

「な、何と。理解できない、解すべき余地が、やりようがない、理解の仕方そのものが見えない」

理不尽な、……再びそう言いかけて、口を結んだ。

いりやぬ神は理に囚われない。理は絡繰り仕掛に過ぎない。人には義であっても、いりやぬ神には義ではない。現実を見よ。だが、現実を見よと言うことが正しいという義ですらない。

「あゝ、全網羅、すべてを網羅する。全肯定。さりとて。」

理不尽を肯定する。理不尽ではないことを肯定する。双方であることを肯定する。双方ではないことを肯定する。いずれか一つだけであることを肯定する。

遺漏なき肯定。

あゝ、かような我が魂魄をも肯定する、又は逆が是、我が魂魄は身悶え、足搔く。藻搔く、それが是、又は逆が是」

イシュタルーナは猛烈に思料し、炎裂のごとく魂魄に念ずる。

獅子奮迅の猛々しさで、あらゆる理不尽を思う心を殺し、滅尽せんとて、死力を振り絞った。いりやぬ神が与えてくれた解脱を再奪取することに甚深に努める。ただ、それは継続でしか為せないことであつた。ただ、堪えて時を待つ。

いりやぬ神はさような葛藤など意に介さなかつた。命ずる。

「直ちに大いなるいりやぬ神の都を築け」

イシュタルーナは全身の毛穴から憤りの粉塵を上げつつ、魄を滾らせて拝坐した。

「いりやぬ神の欲するがまま、その想うまま、おも惟いのままに、し若くならざらることやあらん」

何一つ納得できなかったが、ただ一つ、思うところがあつた。

父はいりやぬ神のためにエミイシと相争つたが、父の考え方が真にいりやぬ神の意欲に適っていたかどうかは、今となつては、もはや定かではなく、適っていたかを晰かにする術もなく、その点に限つて言えば、理不尽という想いは、薄まりつつあつた。

巫女騎士は騎士道精神で堂々果敢に憶断する、

「基、もと我々は架空の建物に生きる。心は主体（がある）と思い込まされている捏造構築である。我々」という現象が夢見させられている幻で、実在の実態はインパルスでしかない。空架の梁、砂上の楼閣に我々は生きる。幅が零センチメートルの綱を度る。わた

自然発生的な仮初めの絡繰りに仕組まれ、根拠なき範疇を妄信し、準じた煉瓦を組み上げ、空疎な物質、抜け殻でしかない『概念』という廃墟を構築し、それを一つの煉瓦として、『論理』という、不気味な、根拠不明の仕様に沿つて、さまざまに組み立てた理論・

思想・倫理・生活感覚という、大伽藍の宮殿を捏造している。

その宮殿に坐す限り、人間の理性は納得・満足という化学反応を起こし、紫摩黄金に輝く宮殿の玉座に燦然と君臨する。だが、それが正しいという根拠はどこにも見出されていない。

当たり前、自明、直観、直截、見たまま、明晰判明などと言うが、それが正しいという根拠は未だかつて見つかっていない。ならば、それゆえ、その根拠すらない。どこへも着陸する地がない、すらない。

知性が知性である根拠はない。だが、その証明方法もない。

経緯をたどって、因を探ることもできない。手繰り寄せる綱が解れていて、ばらばらだ。時を遡ることも虚しい。架空だ。意味を糺して何が得られようか、煉瓦が砂ならば。砂粒が指の間からすり抜けるだけだ。

現実のみがある。

ただ、唐突に。

勝手で、非情、無慈悲にも、ぶつきら棒で、粗削りな、空疎で、即物的なブリキの空き缶に過ぎない。

何かを判断しようとして見たり聞いたりし、観察するも、見えるものが見えるままであるという証明などなく、かつ証明ということすらも不可解だ。確認するものが眼や耳である以上は。

我々はいにしへの聖者が述懐したごとく、恐るべき荒野にいる。我々はいにしへと何ら変わらず、未だ恐るべき荒野にいる」

むろん、祖先の誠意は疑いようもないが、父や、父を教えた者たちがいたりやぬ神の甚深なる意向の神髄に適っていたとは言いい切れない。

いったい、いりやぬ神の意向に適合する思考などあるのか。

「迷う莫れ」

だから、イシュタルーナは行動した。

ただ、行動しかない。ただ、ただ、行動しかない。ただ、一向に、ひたむき只管只唯に。ひたすらただただ人、堂々果敢すべし。義しきとおもふをなす善し。

声を振り絞って、兵に命じる、

「歩め、逝ける者よ、往くことに於いて行く、善逝よ、真幸くあれ。

贅を探し、祈れ、水を求め、清めよ。

糧と塩を集め、確保し、捧げよ。

いりやぬ神を尊び、民を飢えさせるな」

死者も甦った。数千の人間が働く。石を運び、木を伐採し、食糧を集め、塩を探し、山上の湧水から古代ローマのような大いなる水道を敷いた。

アヌグイの山高きも例外ではない。

御社の木の壁の周囲には、黄金の聖者たちの屋敷が建った。

さらには、それら屋敷も含め、全体を囲むように、巨石を積み上げた石の壁が造営される。木製の東西の門塔と、元々あった木の壁とを大きく囲み廻って、直径百メートルの環状に、石の壁ができた。石の壁にもやはり、集合住宅が造られる。石の塔の門がならび建った。

ファルコやジョン・スミスらの家は木の壁の内側にあり、イヴァンら五人の聖者の家は外側にあるが、外の方が大きな屋敷が建築できる。商人も集い、市場も盛んであった。

このような高山に稀有な市街が生まれる。交易が起こり、次第に商業が栄えた。

不思議なことに、高山にあるにもかかわらず、街の住民は空気の薄さに苦しまない。登山道は駅馬車の乗り継ぎで登攀できるように、道路、又は齒車式の線路が整備された。

その迅速さたるやまさに神業である。実際、神業であった。

さりとて、安堵すると人は考え込むものである。

ロネが疑義を呈した。

「かつて、死して甦った者はありません。甦ったと言われる者も、恐らくは完全なる死には至っておらず、それゆえ蘇生したのです。

死した者が甦らないのは厳粛なる神の掟だったのではないのでしょうか」

イシュタルーナは応えた。

「いりやぬ神は偉大だ。人間のように理にも、名・象にも囚われない。

理は地を這う者の方便だ。傀儡だ。幻想だ。意味を塗り、意義を味わせ租の経験で擦り込み、意欲させ、希わせ、欲望させ、行動になすべき動機があるかのように幻影を抱かせ、行動へと赴かせるために過ぎない。

いりやぬ神は倫理や合理性など軽々と超える。ましてや、理論が構築するいかなるものにも煩わされない」

「しかし、人が増え続けます。

狩猟採取には限界があります。人口の増加とともに、狩りや木の実を集める土地が不足

し、食糧が枯渇します」

「いりやぬ神には涯がない。いりやぬ神は万能だ。土と水と食べ物 unlimited にすればよい」

「では、なぜ今、有限なのでしょう。」

なぜ、死があるのでしょうか」

「知らぬ。いりやぬ神がそうしたいから、そうだったのだ。」

いりやぬ神が無限を望まなかった。ただ、それだけが絶対神聖の倫理だ。合理だ。すべては唐突である。

誰も死なず、人が増え続けることが困るなら、皆死なず増えても困らぬ世界を造ればいい。なぜ、未だかつて、しなかったのかなどと訊くなかれ。いりやぬ神の気が向かなかったから、とでも言うべきか。

いりやぬ神は道義でも倫理でも合理でもない。それは人間の小細工だ。だが、人間が空想で小細工を弄するのも、いりやぬ神がそうさせたからだ。

全知全能とは、それ以外の何ものでもない」

ロネはなおも食いだった。

「無限量産については、いりやぬ神は気が向かないかもしれませんが。無限の量産はできないかもしれません。」

だから、山の麓に、耕作地を作ることを考えなければなりません。ならば、いずれこの高所を下る必要があります。

今のこの場所は聖都とし、特別区として扱いましょう。

生産の中心は他の場所に求めましょう。

まず手始めは、ファルコの農場です。中腹よりも低い場所にあります。

家畜たちはこの高所では生きられません。動物たちは人間と違って、環境とともに生命が成り立っているのです。生命は環境と一体で、一つの生命を成しているのです。彼らは環境の一部なのです。

ここに来ることはできない以上、彼らのいる場所を、我らが直轄地、保護区としなければなりません。これが端緒です。徐々に麓へと下りましょう。山上から下りるのです。やがては、平地に都を築くようにしましょう。

いずれ、そういう運命なのです。都市は大きくならなければなりません。ベクトルは一つ。

後退はない。生命と同じです。

宇宙のエントロピーと同じです」

「わかった。

大袈裟な話をするな。ファルコの農場をも城壁で囲もう。以上だ」

急傾斜地から、農場をも含む巨大な都市の開発が始まる。

神の都イキリヤヌートとなった。

大繁栄する。

第五章 イシュクンディナヴィア半島のロゼリア朝イカルガーノ王国

イシュクンディナヴィア半島は東大陸の北々西部にあり、細い陸地で大陸と繋がっているが、半島というよりはほとんど島嶼であると言ってよかった。

なぜならば、鳥瞰して見ると、細い陸地が幅二十メートルから百メートル、海拔五メートルから十二メートルほどの高さで、二キロメートルほど海を渉って東大陸とイシュクンディナヴィア半島主要部を繋いでいるが、潮が高ければ消えてしまいそうなこの細道は蜘蛛の糸のようなもので、陸続きと言ってよいやら、わからぬからである。

糸の続いたその先に、龍の横顔と呼ばれる、半島の主要部があり、そのまま南々東へと伸び、途中から二つに分かれ、それがあたかも口を開いた龍の横顔のように見えるのであった。

周囲には大小の島が点在し、どれも十数メートルから百メートルほどしか離れておらず、小さいものは、東西十二m南北二十mくらい。大きなもの（龍角島）でも、東西一キロメートル、南北八十キロメートルほどであった。

その異様に細長い島は、半島の中央辺りから、北西に伸び、あたかも龍の角のようである。

さて、アヌグイ山は半島の中央部にあり、その南側の麓から四十キロメートルの範囲がイカルガーノ国であった。

国を六代に亘って統治してきたロゼリア朝、第六代王ローグ・メルヴィグ三世は首都フジワラの粗野な木造の城の玉座に坐し、繁縷なるも古色蒼然たる装飾に沈み、イノーグの滅亡に続く、エミイシの町イルカの壊滅の報告を受けて、大いに憂悶に浸蝕される。イル

カとフジワラの距離は十数キロメートルほどであった。危機を感じる。

だが、憂愁の王と呼ばれる彼は黒い長髪で瘠せた身体、顔色の青白い陰鬱な、空想的で、厭世的、哲学に煩悶する、現実的に対してはまったく意気地のない、無意味な、無為の青年であった。

いりりやぬ神の領域が忽然と宣言されても行動もなく、臣下の進言にも曖昧模糊な返事をするばかりである。

嘆息するばかり、時が過ぎていた。

諸族からも、催促されている。

イシュタルーナの勃興に脅威を感じた諸侯が連合し、軍備を整えつつあった。王にも、国軍を動かすよう、歎願が来ている。

「どうしたらよいだろう」

積極的な意見も行動もなく、厭世的な哲学を演じたり、無常観を述べたりするばかりだったのである。

調査から帰還した神学者サンドルは報告した。

「実証主義的科学精神に於いて、いりりやぬ神があそこにいると確信しました。王に進言いたします。風に唾するなど」

しかし、それで収まりはしない。左大臣ペリゴール、右大臣シャルル、兵部卿モーリス、財務大臣ダレルランを先頭に諸侯が反対した。国は右傾化し、命を狙われて、サンドルは亡命する。若い軍人には過激派が生まれ、穏健派は萎縮した。

ダレルランは提言する。

「神聖シルヴィエ帝国の大枢機卿イヴィルに連絡しましょう。公正で、中立的な立場の者として、調停を依頼するのです」

「それでは狼を招くようなものだ。彼は善良な調停者を装って、平和維持のための軍を配備し、実効支配するであろう」

「それも已むなしですな。今は亡きエミイシの狙いもそこでしたから。結局は同じ結論なのです」

「売国奴め」

「あはは、お戯れを。さあ、すべての契約は有利なうちに締結すべきです。大事なのは、生存です」

一計が案ぜられた。

イシュタルーナはイカルガーノ王国からの王の勅使の訪問を受ける。勅使から親書を受け取り、これを開くと、

『共存のための協定を結ぼうと欲す。真実義と民の福祉のために、我らは協議すべきである。場所はピース大平原の中央岩の下で。設営に当たっては、双方から人を出し、疑義のないように処することとする。時は正午』

ロネは反対したが、イシュタルーナは決意し、

「逝く。逝かざるものかは」

「では、仕方ない。協議に赴く隊の人選をいかがいたしますか」

「ロネ、おまえとラフポワ、ファルコ、あとは黄金の聖者を」

ロネは首を横に振った。

「いかにも手薄です。銀や青銅も連れて行きましょう。いや、銅からも兵を。隊の編成は私がします」

「善きに計らえ」

そんな折、ファルコが銀髪的青年を伴って来た。

謎めいた知者ユリアスだ。

「未だ紹介せずにいました、我が家の食客です。古王国コプトエジャのユリアス。協議には彼が有用でしょう」

「コプトエジャとな。砂漠の国、それは南大陸スーではないか。

おまえの手の者なら黄金の聖者と同等の資格がある。しかし、協議において、弁護士でもあるおまえを措いても、彼の方が必要だという理由は何だ」

「知識と叡智です」

「知識と叡智か、よいだろう、おまえがそう言うならば」

ピース大平原。見渡す限り低い草の絨毯が広がる平地。遠く霞む山々が周囲を囲んでいた。

大天幕の張られた仮設の協議会場がその中央に置かれる。天幕の設営は、罨、絡繰り、秘密の通廊等、陰謀のないよう、双方同数の戦士を出して行われた。

近くまでは、それぞれに軍を引き連れ、代表十数名のみが一キロメートル圏内に入り、天幕に入った。警備も案内も接遇も、双方の戦士が控えて行う。その数は代表とは別に、

百名と定められている。

彼らが協議のテーブルに着いた時、議長席には、純白のローブをまとう、氷白の髪長くも、若き氷の肌を持つイヴィルが坐っていた。薄い唇に冷笑の張りついた青年、高貴な生まれ、冷厳な神像のようである。

金の刺青を燃え立たせるイシュタルーナ、雷霆神剣のラフポワ、月の弓のロネ、海の大鉞のファルコ、コプトエジヤの賢者ユリアスが東に坐した。向かい合う西に左大臣ペリゴール、右大臣シャルル、兵部卿モーリス、財務大臣ダレルランが坐する。

議長席は北であったため、イヴィルは左側を見て驚いた。

「おや、これはユリアス、白と薄紫の長きトーガをまとい、何と意外な、貴殿がここにいるとは。」

もつとも、世界を旅する貴殿のこと、どこにいても不思議はないが」

「そのとおりです、大枢機卿殿下、どうかお気になさらないように」

イシュタルーナは、さような事柄など無視するように、主張した。

「いりやぬ神が顕現した以上は、王制を廃し、いりやぬ神の統治とせよ。王権神授は委任に過ぎない。真の主が来た以上は、王は統治権を返上すべきである。懲罰を明らかにし、宗教改革を提唱した者を罰する。」

又、エミイシは賠償を実行すべきだ」

老獪なダレルランが言う、

「緩やかな変革を。巫女騎士殿の主張は過激に過ぎる。権限については、段階的に返上すべきであろう」

白き氷の長髪、怜悧なまなざしのイヴィルが仲介する、

「期限を決めて返上を行うとして、プログラムを作成し、平和裡に確実に実行されるように、わが軍が駐留し、監視し、進行をチェックしつつ、平和維持に努めよう」

イシュタルーナは睥睨のまなざしで、

「それは無用。侵略の口実か」

「何と仰せられるか」

顔色を変えるイヴィルに、ユリアスは言う、

「ならば、ついでに復興に大いなる協力をいただけたらと思ってよろしいか」

イヴィルが油断ならぬと言わんばかりの眼つきをし、慎重に言う、

「内容にもよるが、基本はそうだ」

澄ました顔で、ユリアスは言う、

「では、駐留していただく。」

まずは、インフラ整備への補助と無利子の借款をお願いしたい。二年前、貴帝国の司教団グラディアスによる絶対神聖皇帝への嘆願書の中に、『他国の尊敬を得るための善政を布くことに関する条項』があって、『善意の第三者として駐留する際に、借款とインフラ整備に特段の配慮をすること』というのがあったはずです」

イヴィルは大理石の彫像のように整った伶俐な顎、薄青い双眸、冷厳なまなざしの顔に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

デジャヴだ。こんな光景を見た気がする。いや、気の迷いだ。そもそも、諸概念・諸考概など、かたがたがない、蓋然たる印象に過ぎない。かたち・定形がないのだから、神経伝達物質の分泌でそう想わせること、印象操作でどうでも観ぜられるものだ。どのような構えもない、どうにでもなるものだ。すべては経緯すらもない唐突だ。存在とは、そういうことだ。

だが、それも現実だ。司教団グラディアスも。叩き潰すべき現実だ。

帝国内の人権派と称する司祭や司教たち、彼にとってみれば、売国奴に等しい。人類の和平？ この私に偉そうに説教がましく講釈する奴ら。彼らは言う、

『いいえ、大枢機卿猥下、国とは、人が国であって、国土ではない。ましてや、皇帝の血脈でもない』

血脈だと？ バカな。我が帝国の皇帝の決定は五人の大枢機卿の互選で行われるのであって、血族姻族の限りではない、などと独り言つ。ふ、思い出して憤るなど、私に相応しくない。

それはさておき、おお、非現実的な背教徒ども、聖者イキが「現実が真実である」と教えたことを忘れたか。国がなくなっていくかに人が平和に暮らせよう。皇帝なくして、いかに国が治まろうか。誰が真実義を護るのか。

いや、今はさような時ではない。

忌々しい、古王国コプトエジャ王の庶子め。気楽なもんだ、世界を自由に飛び回り、余計なことに首を突っ込む。愚か者め、その高貴な澄ました顔、見てただけで虫酸が奔るわ。

ユリアスはイヴィルの葛藤を見透かすかのように、さらに言葉が続けた。

「貴帝国内には、人権派の彼らを売国奴呼ばわりする愚劣な者もいるようだが、それは非

現実的な意見であろう。

ここは、この世界は、イデア・アース（イデアの地）である。現象世界ではない。人の怨嗟を積み重ねて永らえることはない。

他国が剣と槍と弓で闘い、せいぜいトレビュシエット（固定式攻城用平衡錘投石器）や大型弩砲（バリスタ）くらいで戦争をするのは、そのためだ。

貴帝国のように、巨大な航空母艦から、ジェット燃料で高度一万メートルを飛ぶ戦闘機を飛ばし、追跡型ミサイルを発射、機体に備えつけたMG（自動装填連続発射銃。マシンガン）で一掃射撃、ナパーム弾や炸裂弾を投下、そんなことなどしない。

鉄で装甲された戦車に砲台をつけ、キャタピラ走行で人を追い、民家に迫って撃ち合はない。

大陸間弾道ミサイルの開発などに着手しない。

なぜなら、イデアの大地では、正義こそ最も強力なウェポンだからである」

イヴィルは嘲笑した。

「だが、我が帝国は二千年来、繁栄している」

ユリアスは蔑みのまなざしで、

「哀れ、そして、愚か。」

これほどの圧倒的な、科学力、十億の兵を擁する貴帝国の国力があっても、未だ世界を制し得ないことこそが証だ。

正義がないゆえに、蟻と獅子ほどに力の差があっても、何百年たっても一向に世界を制覇できていない。これほど明瞭な証拠があろうか、偉大なる大枢機卿殿！

衷心より貴殿に教え奉る。貴帝国が未だ潰えないのは、いかに聖者イキの真究竟真実義が尊いかによるもので、それも限界があり、いずれ命運は尽きる、と。

そして、司教団グラディアスのような誠実な人たちがいつの時代にも貴帝国に絶えないからだ。それをさかしまに亡国の徒だの、背教徒だのと考える者こそが真の背教徒であり、亡国の徒だ。

非現実主義者だ。

まあ、教えに拠れば、非現実には存在しない、あり得ない、ってことですけどね。だが、何もかもが正しいとは限らない。一向が正しいとも言いきれない。なおかつ、一つだけが正しい。それが全肯定、全網羅ということだ。異教徒はいる。それが全網羅だからだ。あなた方の聖者はそう言った、たとえば、神が万能であっても」

イヴィルは不愉快な顔をする。

「異教徒からの講釈など無用。

無利子借款もインフラ整備も、我が帝国はお断りする」

イシユタルーナが冷ややかに言った。

「結構だ。

おまえらの受諾など求めぬ。干渉も調停も要らぬ。和平協議は決裂だ。協定など結ばぬ。

イカルガーノ王国は今日、滅ぶ。

イヴィル殿、帝国が介入したいならば、介入せよ。七億の兵とミサイルとジェット戦闘機と一万の戦車隊を持つて来い。神聖シルヴィエ帝国の終わりを見せてやる」

巫女騎士は剣を抜いた。原蛇と聖なる御徴の文様の睿らかなる太陽の剣だ。その光燦々たるはすべてを眩さで消す。

「ううわああ」

敵も味方も、誰もが叫んだ。光輝が収まった時、ダレルランの首に剣は当てられていた。

巫女騎士はテーブルの上に灼熱の紅に輝く、黄金の装飾具の絡むブーツのままで立っている。見下ろしていた。睥睨している。

「殺そうと思えば、殺せた。おまえらの力など、吹けば飛ぶようなものだ。真実義は我にあり。神は祈る者に味方する」

そして、髪を靡かせ、金の聖句の刺青を燃え立たせ、振り返る。

「帰るぞ、軍とともに再び来る。我らに従うならば、今のうちだぞ、イカルガーノの兵たちよ」

剣を鞘に納める。テーブルからひらりと降り、背を向けた。

だが、ダレルランは叫んだ。

「そうは行くものか、出合え！」

地下に隠れていた兵士ら数百が飛び出す。平原に二日前に穴を掘っていて、そこから仕掛け板を跳ね上げて出て来たのだ。

あらわれたるは、精鋭部隊、巨漢揃いだった。だが、彼らの意気は既に大いに挫けている。なぜなら、太陽の剣の光が地下深くまでも差していたから。あの燦めきを見た者たちは偉大な、大いなるものを眼の前にした時に感じられる、根源的な畏怖に襲われるのである。

ユリアスが前髪をかき上げて冷ややかに言う、

「こんなことだと思っていました。」

茶番を愉しませて戴きましたよ、ダレルラン卿。さあ、行くか、諸君」

イカルガーノ国王メルヴィング三世は懼れ慄きつつも、イシュタルーナへの微かな思慕すら抱いたが、欲望の炎に憑かれた財務大臣ダレルランは叫ぶ、

「何をしておる、やれ、逃がすな」

意気地を甦らせ、意に反して巨漢たちは剣を抜いた。そうせざるを得なかったからである。

ロネが白銀の弓を構えた。月の弓の恐ろしさは既に国内に広く伝わっていて、精鋭部隊は足が動かさなくなってしまうた。矢を放つと、「ひゃあ」と叫んで身を竦めた。

弓矢は兵士たちの頭上を飛んでその巨体を吹き飛ばし、大天幕を大きく裂いて周囲に散らし、空に消えた。その風圧で柱が折れ、空を貫く摩擦熱で布は燃える。

呆然。

ラフポワが尋ねた。

「僕も剣を抜いた方がいいのかな」

イシュタルーナは微笑んだ。雷霆神剣は既に“粒”になっていた。ここにいる全員を吹き飛ばしかねない。

「もういいだろう。行くぞ」

太陽の剣と、月の弓とは、平然とイカルガーノの精鋭兵たちの波を分けて、海を渡る聖者のように進んだ。誰もが竦み上がって見送ることしかできず、巫女騎士たちは悠々と会見の場を去った。

イカルガーノの兵の一人が言った。

「おい、おい、俺たち、本当に戦うのかよ」

かくして、二日後に戦い、イカルガーノ王家は壊滅した。

王族も貴族も男爵も大商人も豪農も平民も皆、一万二千の鉄の兵となる。

ダレルランは赦されなかった。夜間は地下牢に鎖で繋がれ、冷たく硬い土の上に眠り、黎明から夕まで炭鉱で、財務大臣に恨みを抱く者たちの監督下、十二時間も鞭打たれながら、石炭の採掘に従事する。

国王メルヴィング三世は自殺を図ったが、彼のようなタイプの例に漏れず死に切れず、生き残って、ユリアスの肝煎りで新たに建築された古文書館の司書となり、結構、楽しく暮らしていた。待遇は鉄の兵である。悪くはない。インク壺に羽ペンを浸しながら、

「余は満足である。王よりも遙かに良い」
苦勞知らずで共感を覚えることの少ない若き王は他者に関心がなくて無責任なため、国が滅んで幸せそうであった。

第六章 イシユクンディナヴィア半島の統一 太陽の正午

イヴァンが都市計画を担当した。都フジワラは拡大され、特に貧民窟の集合住宅はなくなる。すべての人々が一軒の持ち家に住むようになった。イカルガーノ王国の国庫の解放が行われたのである。

名称もイキリヤヌグランドと改められた。

イキリヤヌートを聖都とし、イナーク村を副聖都とし、イキリヤヌイルカを大商業都市と計画し、イキリヤヌグランドを首都と定める。

「イカルガーノ王国の国号を、いりりやぬ国と号する。改宗は強要しない。いりりやぬ神への信仰は宗教ではない。生命である。生きるもののすべては、いりりやぬ神へ祈っているのだ。

国となって、民の数は増え、多くの歴史や文化を持つ人々が入り混ざり合う。位階も改めなければならない。統一した考え方で、民が増える度に、一定の規則性を以て位階を改めよう。

銅の兵は銅の騎士とする。鉄の兵を率いよ。

青銅の騎士は青銅の将とする。騎士を従え。

銀の将は銀の聖闘士とする」

イシユタルーナは高々と宣言した。

イキリヤヌグランドからアヌグイ山の聖都イキリヤヌートへの道、総計二十キロメートルは一直線の街道で結ばれることとなる。川や峡谷や湖沼に石の橋を渡し、山を越えて、森を貫通する。一時で千里（いっしよとせ）は二時間。一里程四キロメートルとするを走る龍馬が時速二十キロメートルで往来するので、五分も要さず連絡した。

エスプレッソ街道と呼ばれる。

インフラも再整備され、一度は荒廃した国土が次第に復し、整うに連れ、イシユタルーナの遺憾の念も絶え間なくなっていくた。

「祭壇に使う香は国内にはない。かつては外国の商人から買っていたが」

イカルガーノ壊滅で、通商は途絶えていた。

貿易商を呼ぼうにも、皆、国外退避している。

香は海から渡ってくるものであった。舶来品である。イカルガーノは海のない土地であった。

海への入り口を開拓しなければならない。

「海と接する国と国交を結ぼう」

「結んでくれましょうか」

同意する国などなかった。

「野蛮な弑逆者、粗野な新興の宗教国家を誰が信用しようか」

いずれの国もそういう主旨の主張であった。イシュタルーナは瞋目し、

「さもありなんか。」

誠意をもって話し合おう」

「と言いますと」

ロネが尋ねた。

「直截、会いに行く」

眼を丸くする。

「それはダメです。戦争をしに来たと思われます」

「そのようなことではないと、十分に説いて行こう」

「そんな言葉を信用しましょうか」

「一人で行く。太陽の剣も置いて行く」

「それは無茶です」

「至誠、天に通ず、だ。案ずるな」

「案じます」

しかし、イシュタルーナは行った。狭い半島である。いりやぬ国と国境を接するすべての国は、海に接していた。

イシュタルーナはスロシェヴィツチ王国を目指す。

スロシェヴィツチ王家は大騒ぎとなった。

「大変です」

「何事だ」

「イシュタルーナが来た」

「何だと。本人か、まさか、なぜだ」

「交易したい、と」

「何、突然に」

「何の前触れもありませんでした。龍馬でやってきました」

「どうすべきか」

王の叔父がやって来て、

「巫女騎士が偽りを言うものか。他意はあるまい、応ずるしかない。とてもじゃないが、敵うものかは」

「叔父上、何を愚かなことを。イカルガーノの二の舞ですぞ」

「あれとこれとは事情が異なる」

そこに従兄弟の騎士団長も来る。

「実際、丸腰だぞ」

「なるほど、もしかしたら、好機ではないか」

王の顔が妖しく好調した。

イシュタルーナは素朴な木造の王宮に招かれる。しかし、入ってみると、謁見の間で剣を持った殺意の兵士たちに囲まれた。

巫女騎士は憐れむように静かに憤る。

「恥を知れ、スロシェヴィツチ王家ともあろう者が。かような背反行為、反道義反信義、愚か者よ、貴様らの天罰は免れぬ」

たちまち、稲妻が窓から入って、王と大臣と將軍たちを焼き貫き、牽き裂いた。

イシュタルーナは宣言する。

「己むを得ず統治する。異論ある者は前へ。あたしは丸腰だ。怖れるな。ともに生きよう。ともに善く逝くならば、おまえたちも鉄の兵とする」

怖れない者などいなかった。

いりやぬ国は海を手に入れたのである。

「港を整え、倉庫を増やし、会計士を雇え。帳簿を整えよ。又、工廠を建てよ、帆船を大いに造れ」

ロネが苦言する。

「しかし、資金が」

イシュタルーナは地図を広げ、

「見よ、ここを採掘するよう命じてある。金の太鉞脈に当たるであろう、この位置ならさほど掘らずとも」

「何と、これも、いりやぬ神様の」

その頃、スロシェヴィツチの隣国であるスカラ王国は同じような小国であったため、大いに動揺していた。だが、王は、

「今なら鉄の兵になれる。この後になったら、どんな地位にされるか」

参謀である賢者ヨシイロも勧めた。

「それが賢策と存じます。時代を正しく見ています。真理への通曉者の見解です」

王は帰順した。

イカルガーノ一万二千、スロシェヴィツチ二万、スカラ二万を『鉄』として加え、いりやぬ国は人口五万を超える国家となった。

スカラに滞在していた大海商ネプチュルスは国外逃亡を図って荷物や商品やお宝を大急ぎでまとめ詰めていたが、いりやぬ神の全知に抗う術もなく拿捕され、イシュタルーナとの会見を強要された。

「久しぶりだ、大海商。

いりやぬ神への祭儀に必要なのだ。おまえの航海を大いに防衛しよう。白檀などの香木、流涎香や麝香を買い集めてくれ」

ベルベットの貫頭衣の上に虎の毛皮を羽織った太鼓腹の巨漢は狡猾な眼を光らせ、

「なるほど、あつしも商人です。それに見合うものが頂戴できるなら、何でもかんでもいたしやしよう」

「支払いはこちらだ」

金貨を卓上に転がす。

その輝きは特別だった。イシュタルーナが言う、

「純金だ。

スロシェヴィツチ王家が民から搾取して貯め込んでいたものを、いりやぬ神が聖化した神聖純金貨だ。イカルガーノのものもある。又、わずかだが、我がイナークの累代の資産も」

「これは、貨幣と言うよりは宝ですな」

「そうだ。

我らがいりやぬ国は他国の王侯貴族や皇帝のように商取引上の信用がない。我が国の紋章を刻印しても、他の貨幣のように取引に応じてくれるような信用には繋がらないであろう。貨幣は信用の下に成り立っている。なぜ、小さな金属の円盤が品物と交換できるのかと言えば、その硬貨に印章された王侯の紋が王の権威に懸けて、それを保証しているからだ。物品と交換しても、また、物品との交換に使えるから、人々は安心して品物と交換するのだ。

しかしながら、我がいりやぬ国には、未だ信用がない。これが品物と交換できるという保証があることを、人々は信じまい。

だから、貨幣の原点に戻って、純金で鑄造し、貨幣というかたちを持ったこの物質自体の価値を高めたのだ。これなら、明白だ」

「ふむ、ふうむ。なるほど」

片眼ルーペをポケットから出して、仔細に眺める。思案してから、

「これと同じものが何百枚か戴けるなら
ネプチュルスはふっかけた。

「それだけか。何千枚と言うかと思った。おまえら商人とはふっかけるものだと思っていたが。ましてや、おまえは。

意外に誠実だな」

「いや、いりやぬ神様に嘘は吐けません」

そう言いながら、冷や汗をかきつつも、重ねて尋ね、

「いったい、どれくらいお持ちで」

「何百万枚もある。金の鉱脈も発見した。今後は数億枚に近くなるであろう。だが、それを世に出したら、金貨の価値が下がる。おまえも儲からなくなる。民衆も苦しむ。自分のために貯め込むつもりは毛頭ないが、世界のバランスを考え、金の時価等を常時、鑑みつつ出すつもりだ」

「ご明察です」

大海商はビジネス・チャンスを見出す。

ロネの提案に基づいて海軍を創設し、ネプチュルスの航海を護った。

「海軍の編成は神兵軍団長に一任する」

イシュタルーナは発令する。

神兵軍団長ファルコはジョン・スミスだけを伴って出掛けた。

行く先は海ではなく、山である。深く山中に入って、山賊の砦の近くに着いた。虎鬚で汚れた革のような皮膚の山賊数名が立ちふさがって、喚く。

「やい、てめえ、ここをどこだと思ってるやがる」

体の大きなファルコは高みから睥睨し、

「おい、雑魚ども。ユーグルに言え、ファルコが来たとな」

「冗談じゃねえ、ファルコだと、そんなことを信じると思うかえ」

その時、繁る大樹の枝を折りながら、独りの壮者があらわれる。縮れた鬚を伸ばした巨人で、二メートルを軽く超えるファルコの頭が彼の臍下くらいであった。

「おら、その辺にしときな、おまえの命が飛ぶぜ、兄弟。そいつは間違いない、ホンモノのファルコさ。そして、お供は、ジョン・スミス」

「よお、久しぶりだな、ユーグル」

「あゝ、最近、神懸ってるようじゃねえか、ファルコ。要件はわかってるぜ」

「なら、話が早い。どうだ」

「ふざけるな、ガラじゃねえ」

「そうでもなからう、おまえも王家の末裔だ」

「何百年も前の話を」

「それを言うなら、海賊皇リュウは数千年前だ。奴は乗ったぜ。何てったって、ネプチュルスが乗ったからな」

「そいつはリアルだ。実際、儲かるってことだな、へへん」

「そうだ。」

おまえも、そろそろ、先祖の名を世に甦らせるべきだぜ」

「おまえが属するってことは、大義があるんだろう。ネプチュルスが絡むなら、儲けがあるのだろう。」

山賊親分の最大の仕事は子分を食わせることだ。俺の下に荒くれ者どもが集まるのは確実に食わせるからだ。裏切らないからだ。いいだろう、俺も乗ってやる」

「おまえが兵学に通じていることは知っている。大将をやってもらうよ」

山賊皇ユーグルや海賊皇リュウを統合し、鉄の兵としたが、ユーグルを陸軍大将とし、リュウを海軍大将に抜擢した。

「いずれは鉄すらも大将になる時代が来る。先取りさ」

実際は、それ以上であったが……

さて、野蛮な武者たちの剣や斧や鉄槌は聖化され、神々しい真理の紋の入った武器となっていく。

碧き海原、潮風の甲板では、髪を翩らせる二人の男が語り合っていた。

リュウとネプチュルスは旧知の中である。

「よろしくな、海賊野郎」

「あゝ、わかってるさ、守銭奴。貴様がいると聞いて、俺も腹を決めたんだ」

「そんな小さい夢じゃあるまい。先祖の霊を慰めてやれよ」

「まあな」

いりやぬ国に、山賊一万と海賊一万が加わった。

人口七万の国家となる。イシュクンディナヴィア半島の中では、中規模の国家であった。剣を挙げて、巫女騎士が大号令する。

「我が下へ集え。世界を革めよ」

大衆は歓呼した。

各国の王たちは動揺する。

「何と言うべきことか」

「あまりにも早し」

だが、驚嘆し、慄然としつつも、周辺国家の群れは、いりやぬ国の発展を、ただ漫然と眺めていただけではない。強い国々はいりやぬ国に対抗するために連合した。

ミラネ王国、ベネチャールノ王国、ナポロ王国はいずれも人口二十万以上を誇る強国であり、三国連合軍は他国にも檄を飛ばし、八万の大軍団を編成し、イキリヤヌグラードのあるピース大平原に侵入する。

対峙したのは、イシュタルーナ唯一人であった。

誰もが驚愕したのは、巫女騎士が独り草原に立っていたからだけではない。

燦然たる聖句の鎧兜の姿の神々しさに皆、崇高と畏怖とに打たれたためであった。永遠の蒼穹のような、響き渡る鐘の音が聞こえる気すらする。

イシュタルーナの刺青が燃え上がった。金が青白く燦めき^{かがや}焼く。

繁縷なる莊嚴のなされた鞘から抜く太陽の剣は、この世のものとは思えぬ精巧な原蛇と聖なる御徴とを刃紋として浮かび上がっていた。

「愚かな者ども、我が太陽の剣は既に、^水の位階に達した。この聖化された先祖伝来の楯を見よ。精巧に彫られた蜥蜴の紋を」

剣と楯が眩く燃え赫く。燃え立つ炎のようであった。ほとんど神に等しく見える。人々の心は根源的な畏怖に心底震え上がった。

「逝くぞっ、覚悟せよ！」

響き渡る巫女騎士の大音声に八万の兵は竦む。

イシュタルーナは走った。脛当ては楯の持つ神性に感化され、同様の神威力を帯びる。その影響で、走る速さは龍馬にも劣らなかった。眼に留まらぬとは、このことか。

「いゝゑいゝいゝふーっ！」

剣の燦裂が時空を超越し、一振りで十数人が斬られ、数十人が巻き起こった風に切られ、百数十人が風壓に昏倒し、斃れた。

「速いつ、旋風みたいだ、見えない」

一振りコンマ一秒、すなわち、一秒で二千人が斃れる。五秒後に一万、連合軍は十秒後には戦意を喪い、十五秒後には兵卒は将校の制止の叫びも聞かず、悪鬼に追われる童のように逃げ始めた。

怒涛のような数万人の潰走、收拾がつかない。

「逃げるな、引くな」

「斬るぞ」

「将軍、無理です。あまりに凄過ぎます」

「危ない、退避してください」

既に将校たちですらも、我先に逃げ出している。当然であろう、緬羊の群れに凶暴な狼が入ったようなものである。

いや、眼に見えない猛烈なウイルスに襲われている感覚である。何もわからないうちに、千人単位で人間が次々と斃れ、どこに逃げてよいのかもわからない。

昼夜を問わず死力を尽くして走り抜き、命辛々、それぞれ自国に還って、身を潜め、震えて守りを固めた。

戦争は終わる。平原には、ただ、静寂のみがあった。巫女騎士はつぶやく。

「新たな地平が現れる。それは稀有であったり、どこにもない場所だったり、どこにでもあったりするのですらない。領域ではない、非領域」

イシュタルーナの双眸は冷厳であった。

「真実は勝つ。真実は空疎であってはならない。真実は実在である。実存は真実である。言語ではない、論理ではない。それだけのものではないということでもある。理・論であ

つてもよい。躬でもあり、情でもあり、感覚でもあり、すなわち、現実である。

我々は懐疑の極北を超え、論理の果てまで来た。もはや、ロジックは超越されるべきものでしかない。言語による理解も説明も体系も。

現実を動かすものが真実だ。現実を変えるものが真実だ。真実は実在する。すなわち、現実だ。

現実というものに到達しなければ、真実ではない。真実は現実であるがゆえ、現実を変えられるのだ。

慮れ。鑑みよ。

論理や言語は現実の前に無力だった。

武器は現実を変えない。暴力も現実を変えない。喪ったものを取り戻せない。死を超えない。正義も栄光も来ない。顧みよ、武力を振るうことによって、真の勝利を得た者はいない。

金貨紙幣は、なおさら。言うまでもなし。

心で解し、感覚で解し、言語で解し、体で解し、体験で解し、行動で解するもの、それが真実だ。身口意密もそれを言う」

瞑目し、両の手で印契を組み、真咒を誦す。

「身躯が理解で、感覚が解釈、感情が分析で、行動が思考、体験が論理で、天翔け詠うが知性。

毛の長いヤクの背に乗った女仙が幽玄に叡智を臍下丹田へと運ぶ。

新しい思考様式、新しい知性のかたち、領域ではない場所、非領域。それは現実それ自体であり、それゆえ、現実的である。現実を動かし、現実を革めることも可。

そうでなければ、どうして独りで、八万に勝てるだろうか」

死した者たちは皆、甦って、鉄の兵となる。いりやぬ国の人口は、十五万に膨れ上がった。

イシユクンディナヴィア半島の趨勢は決定した。戦おうとする国はない。静観、観察、陰謀、そんな中で、和睦・同盟を申し出る国が現れる。

「早い方がましな地位に就ける。遅ければ、鉄以下にされるに違いない」

そのとおりであった。

オエステ
遂に東大陸も動き始める。

リヨンリャンリューゼン（龍梁劉禪、又は大華嚴龍國）の帝都、大元汎都からは二十一

人のスパイが放たれ、イン・イー・インデイス（殷陀羅尼帝国）の帝都、大涅槃城からは九人のスパイが放たれていた。

又、北大陸^{ノルテ}の神聖シルヴィエ帝国からは数百人もの諜報部員が潜入している。

イシュタルーナはイキリヤヌートの、暗き祠のような、簡素な丸太の部屋に坐し、まさしく巫女としての言葉で、はっきり言った。

「オエステ（東大陸）の数々の大帝国や、ノルテ（北大陸）の超大国がスパイを放っている。

大いに結構、いりやぬ神はすべてを見ている。このリストの者たちを公開の場に呼び出し、すべてを晒せ。行状はつぶさに、書記官の筆に記させた」

ロネは書面を受け取って、直ちに行動する。

さて、リヨンリャンリューゼンの情報部長官トンテイ（貪餓）は青い顔をして入って来た。参謀長コウ將軍がそれに気がつく。

「どうした、君らしくもない」

「諜報活動は失敗です。情報部員は皆、帰還しました」

「何だと、なぜだ」

「すべてがばれているからです。

情報部員は広場に、公開の場に二十一人、すなわち、全員が呼び出され、衆の前で、名前と生年月日、住居や家族、入国してからその日までの全行動を公表されました。すべて正確な事実で、一切の間違ひがありませんでした。これではシラを切れません」

「何と言うべきことかな、これもいりやぬ神の力か」

「そのようです。全知ですから。

その上で、このように言われたそうです、『今帰れば、赦すが、帰らなければさらに追及し、裁判なしで刑に処する』と。いりやぬ神は無謬なので裁判は必要ないと」

「そんな無茶な」

「そうではありません。

神は無謬です。誤った判決も冤罪もない。神の言葉のすべては事実です。正確なる真実です。

神を騙る者がやるから、今までは無茶だったのです。神の言という詐称であったから、歴史上は暴挙だったのです。

本当に本物の神が直截やれば、間違いではありません」

千数百人の各国のスパイが逮捕された。半島の各国の者たちだけではない。リヨンリヤンリューゼン以外の東大陸の国や、神聖シルヴィエ帝国を含む北大陸の国々の者たちもいた。

「いりやぬ神に隠れて、ものを思うことはできない。心に想ったことは、すべて知られている。謀反叛逆を胸に抱く者は既にバレている。

時折、対象者にダイレクト・メールで教えてやろう、その者がいつどこで何を考えたかを、詳細に、緻密に。

だが、即刻に罰することはしない。すべては神の御心のままである。背教も異教徒もない。全知全能とは、そういうことであり、他はない」

すべての王侯貴族はあきらめた。もはや、闘い方がない。

かくして、イシュクンデйнаヴィア半島は統一された。

イシュタルーナは統一の日、衆を集めて演説を行う。

これが世に言う、巫女騎士大敷衍、又は、イシュタルーナの衆講義である。

「半島に平和が訪れた。あたしは巫女だ。神の言を預かる。それを人に、いや、生命に伝える。

又、日々神に祈る。

この大地に永遠の平和を、と。二度と終ることのない平和を。それを希求する。魂が希求するからだ。それは動かし難い絶対の根拠だ。

なぜ、人は平和を求めるのか。無事に、安全に、生き残りたいからだ。幸福に逝きたいからだ。愛する者たちの苦しみを見たくないからだ。単純素朴な強い真実だ。神がさように創った。人が平和を求めるのは、神がさように創ったゆえだ。

嬰兒は誰かに愛されないと生き残れない。人は肯定されることで、自分が生き残れると感じ、安堵する。無意識層にある根源的な死への畏怖から表面的に解放される。解放感（肯定感）は人気や名声、権力や財力、所有や卓抜した能力などで得られる。

未来（死への畏怖・生存への希求）が肯定への欣求の根幹である。さらにその根源には、種としての存続がある。自己が生存することは種として存続することでもある。だから、人は時に愛のために自己（個）の生存すら犠牲とする。

神がさように創った。人が存続を求めるのは神がさよう創ったゆえだ。

ならば、なぜ、神は最初から永遠の絶対肯定された生命、普遍にして絶対不変の正義、すなわち、平和を構築しなかったのか、世界をそのような仕様にしなかったのか。なぜか、

人は問わずにいられない。しかし。

問うても虚しい。なぜ、非存在ではなく、存在なのかという問いと同じだ。

衆よ、おまえたちに告げる。いつの時代も、答はなかった。ただ、現実があった。それゆえに衆よ。

新しい地平が必要なのだ。答がないことが妥当な、あたりまえな、ポジティブだという地平が。

懐疑は極北に達した。理性の槍は折れた。論理は斃れた。真理は喪われた。思考は追いつかない。

全網羅の世界観で、人はいかに堂々果敢すべきか。

魂の声を聴く耳は、数学にはなく、学的な体系哲学にもない。学究的方法論は整理された〴〵やり易いもの〴〵しか取り扱えない。ごった煮的な雑多で複雑系的なジグザグした理不尽な事実すべてを取り扱えない。消極的だ。積極的ではない。事実的ではない。ポジティブではない。

事実肯綮するものを、肯定的な精神を、学では得られない。現実へは到達できない。証明は論理に任せられない。光こそが真実性を晰らかにし、睿らかとする。事実的でないならば、現実的ではない。空想だ。しかし、紙幣や貨幣の価値は空想だが、切実で、現実だ。生活への意欲を呼び醒まし、人の心の拠り所となるものの多くは空想だ。だが、切実で、現実だ。虚しいからと言っても、多くの人は捨て切れない。

さあ、我らの魂はいずこへ。

新しい時代を生きるおまえたちに告げよう。

真実も虚偽もない。味方も敵もない。勝利も敗北もない。有価も無価もない。妥当も非妥当もない。かたちもかたちなきもない。仕様も無仕様もない。きよらさやかもけがれもない。あはれも卑俗もない。聖も俗もない。

さような一切すらない。さような一切がなく、かつある。さような一切があるのみであり、かつ、さような一切がないのみである。

諸考概は無効だ。

よって、理由も経緯もない、すべて唐突だ。これが〴〵唐突〴〵である。

この睿知を了解しようとも、いずこへも着陸できない。いや、いずこへも着陸できないこともできない。模索の中、求究の中途のまま、途中の状態でしかない、未だに求めているさなか、半端な、〴〵未遂不収〴〵である。

着地できないとは、着地できないという地点にも着地できない。できるとすら言ってもよいかもしれない。真の真なる「辿り着けない」状態である。

衆よ、これは是非もない。

衆よ、我々にとって、ただ、在るものは、ただ、眼の前の現実だ。現実があるのみだ。

我々には現実しかない。現実、現実とは、ただ「唐突」だ」

イシユタルーナは口をつぐんだ。

じつと聴衆を見つめた。

それは威嚇のようでもあり、威厳のある愛のようでもあり、絶望でもあり、睥睨でもあり、深い深淵の洞察のようでもあった。

再び口を開き、語り出す時、その言葉は底響きするほど、厳かであった。

「それゆえ、現実を追っても虚しい。

現実は何められない。捉えられない。無形というかたちもない。真に零である真の空だ。

現実是非情である。無味乾燥だ。だが、時に深く、時に優しい。美と豊穡と繊細精緻に満ちる。

自然の摂理が恩寵であり、無慈悲であるように。

いりやぬ神は救う。いりやぬ神は戮す。我が一族だけが甦らない。矛盾だと叫ぼうが虚しく風が吹くのみだ。

あゝ、風よ、今は風が帆を孕まそうとも、明日は風ともなる。

いりやぬ神が神聖シルヴィエ帝国の神にならないと、誰が言えるか、彼らも真究竟の真実義を究求している。いりやぬ神が敵となっても、敵などはない。味方であっても、味方などではない。

聞くがよい、神は「全網羅」だ。

すべてを超越的に網羅し、一切の遺漏がない。すなわち、遺漏すらもする。遺漏だけをする。現実、いずれも起こり得る。「全網羅」とは、現実ということだ。

されば、異教徒はいない。なぜならば、異教徒が実在だからだ。異教徒は現実にいるからだ。

耳ある者は聴け。

異叛も、違背もない。いずれもある。いずれだけがある。

異教も、背教もない。いずれもある。いずれだけがある。

いずれも現実にかかることがある。

さて、とてもかくてもさりとて、衆よ。

さようなもの・ことを捉えられようか。捉えられない。

捉えられないという地点にも着地しない。真の零、真の空だ。

だが、衆よ。

あゝ、それでも人は永遠の平和を希求する。欣求する。

それが真実だから。切実で、現実だから。人の実存だから。

だから、衆よ、本然の本性に遵おう。神が与え給うたままに。神から魂に拝受した先天的な命題の、真髓の真奥の真の本質のままに。

天命（神の命令）のままに。

あゝ、それなのに、何ということか、永遠の平和は決してこの大地を訪れない。だから、永劫の欣求をする。喉の渇き、飢えのように。終わることがない。

終わることなく、人は今を超えなくてはならない。進化だ。すべての生命は進化する。進化が生命だ。すべての生命は己を超越しようとする。

進化は自己超越である。

植物は過去の自己を超えて、繁殖のために花を咲かせるよう進化し、蜂を活用する。大空を飛べなかった小さな恐竜たちは飛ぶ鳥へと進化し、生存した。地上に上がれなかった魚は両生類へ、爬虫類へ進化した。

人間は進化し、客観性を獲得した。

多くの生き物は環境と一体で環境を離れては生きられないが、人間は工夫し、自己を護り、環境を改革し、どこでも増殖する。それは、自己を超越し、客観という視点を得ているからだ。物という概念を持つからだ。自己の存在を超越して、物という存在を認めているからだ。

科学はかくして発達した。すべては進化だ。

無私や自己犠牲も自己超越であり、進化の一環だ。

生き残るため、存続するために、今を超越し、常に新たなる地平を希う。革新を欣求し続ける。

新たな地平を求め続けねばならぬ、衆よ。

魂の声を聴け。ロゴスに聴従せよ。

真睿知を欣求し、真究竟の真実義を希求せよ。

こころきよらに こいねが 希い続けよ」

衆は呆然とした。

いりやぬ国は、首都イキリヤヌグラードの大改造に着手する。宮殿を始めとする木造の建築はすべて壊され、石造建築となった。

牧歌的な街の風貌が変わる。

出来上がったものは、民間の商家などと軍施設とがならぶ、複合都市であった。瞬く間に起こり、瞬く間に終わる。三か月で聳える城壁に囲繞される城塞都市へ変貌するのであった。

輸送手段も整えられる。

街道の再整備とともに、大河パルテノスから分岐して南下する大運河が南北大街道と並行するように造営された。そして、南下の途中で、十文字を刻むように分岐し、東や西へ往く街道と並行して流れる。

いずれも大貿易港のある東・西・南の海まで接続した。

海運と繋がって、内陸への物資の輸送を容易にする。さらに、首都にまで到達する間にも、その中継地点のさまざまな場所からの物資が加わり、それとともに人も集まって大いに繁栄した。

紛争は絶え、人の往来はしやすく、物流の大氾濫、商業は殷さかんになり、空前の大繁栄が起こる。安定した社会は、経済活動の活性化には必須で、海外の諸国も、当面の争いを断念し、国交を結び、通商条約を締結した。以前のように、祭壇の香料の不足に悩むこともなくなる。あふれるほど輸入することも可能となった。

貨幣も付加価値の必要がなくなり、簡易化することも可能となる。むしろ、他国の通貨よりも価値があるくらいであった。

イシユタルーナは高々と宣言する。

「栄光あれ、真実は勝利である」

しかし、彼女自身はイキリヤヌートの御社を蔽うように建てられた、壮大な大神殿の奥の奥（すなわち、祠は社に蔽われ、社は神殿に蔽われ、三重構造となったのである）、幾重にも奥なる木製の扉の中の祠の一室に籠って、神に祈り、身を捧げる日々を過ごすのみとなり、ほとんど他へ行くことはなくなっていた。

時には、洞窟にも籠る。

行くとしても、かつてのイノーグ村の跡地で、今は街そのものが巨大な拝殿となっているイノーグ副聖都へ、時折、下降するくらいであった。

第七章 シエスタ（午睡） リヨンリヤンリユーゼン（龍梁劉禪、又は大華嚴龍國）

大元汎都（ダーゲンヴァント）の汎界^{はんかい}天宇太陽太陰霽月星辰宮殿の朝廷（毎朝、官吏がならぶ広い庭）、大華嚴の間において、廷臣が集う。

朝廷の原義から言えば、本来は、屋外であるべきところだが、そこは一万人以上を収容できる広間であった。

皇帝オウリユー十三世はポウ將軍の説を聴いていた。

「海を制すべきでしょう。

神聖帝国は海軍を寄せています。彼らが半島を西から攻める時、その動向を見守りましょう。恐らくは、彼らも必勝の理を、機^{はた}らきをつかもうとしています。

しかし、我らが伝統から見れば、彼らは未だその道の素人でしかない。わずか二千年の歴史など。

シルヴィエ帝国の敗退の瞬間を狙い、我らはいりやぬ国と和議し、いりやぬ神を奉じ、我らが神となすのです。古来の精緻なる典礼儀式の妙を尽くして祀り」

皇帝は苦笑した。

「我らは通曉者か。

さような叡智があるか。

知とは、何ぞや。

イシュタルーナの衆講義の記録を読んだか」

ポウ將軍は一人の老人を招き寄せた。白く長い髪、白く長い髯、長人（のっぽ）と呼ばれた天文占星学者タイパクである。

「天文占星を専らとする家、エイセイ家の長、このタイパク師によれば、いりやぬ神は天然自然、万有を融通し、無罣礙、無為無差別、無分別が本来、今、イシュタルーナの味方になっているのは、風が西から吹いたり、北から吹いたりするのと同じ、現実の非情性

と何ら変わりません。

我々天文占星の者たちは陰陽五行の理を尽くし、奇門遁甲の妙を究めて、いりやぬ神の御心を推察しようとしております。

天然自然の理に心を寄せ、悟ろうとしています。

ロゴスに聴従しようとするように。

御心に寄り添うために、道（タオ）を究め、平常道を究めようとしています。

天地の機らきを読み、機をつかめば、神の御心に適うのは、我らです」

冷厳なる皇帝は薄ら笑いを浮かべた。

「天地の理を読み解きて、世界を思うがままに涉った者など、歴史上、未だかつて、一人としておらぬ。

人は天地を読むというが、その人の心を機らかせているのは天地である。人は、ただ、天然自然の理のままに、動き、望み、考え、心する。

自由などない。

おまえの読みも、いりやぬ神の手のうちだ。

どうなるかは、誰にもわからない」

昏き祠にて、イシユアルーナが祈禱する時、いりやぬ神は告げた。

「叡智は世に満ちている。叡智を持つ者たちは、必ずしも専門家ではない。

一皇帝が叡智を抱く時もある。

イシユタルーナよ、我がしもべ、おまえに教えよう、今朝ほど、大華嚴龍國の皇帝が何と言ったかを。

叡智は流出したいところへ流出する。オウリユーに語らせたいと思えば、オウリユーは語る。

絶対神聖皇帝であろうと同じこと。

すべては朕の思うとおりに動いている。選択肢はない。永劫の過去から、永劫の未来まで、一貫し、一瞬とても途絶えたこともない。無数の巨大な宇宙を包括する全世界のどこであつても、どこでなくとも。遺漏はない。天網恢恢疎にして漏らさず。

朕は全知全能完全無欠全網羅である。

永遠の勝者は喪失を怖れない。釈迦牟尼は老病死苦を厭わぬことで老病死苦を超越した。

神にならんとする者は神にはなれぬ。神ならぬ者こそ神なり。不死者は不死ではない。死を怖れるから不死なのだ。真の不死者は死ぬる者である。

さればこそ、朕は敗残の潰走者となる時に、敗残の潰走者となるであろう。死すときに死すであろう。すべてを想うようになせぬときに、思うようになせぬであろう。

完全無欠であるがゆえに。

そうでなければ、完全無欠ではない。

さあ、もうわかったであろう、イシユタルーナ、巫女騎士よ。大いなる季節が来る。飲
び歌え。

大審問官と手を繋いで踊れ」

イシユタルーナは瞑目し、『大審問官』とは何か、甚深に思考した。そして、
「古代の洞へ。」

大疑団の萌芽の起源となった彼方の究竟へ。

もつとも古い深層へ。如何なる懷疑も死に絶える彼方の極北へ。

逝にしへを甚深に究めようぞ。精妙に神妙に究竟せよ、と衆に言おう。よく噛み分けよ、
香のよう味覚のように古生代の感覚を呼び戻せ、と。

いざ生きめやも。

真空の世に寄る辺なし。激流に足場なく、縋る洲もなし。

されば、棹を差さずばなるまい。

あたしは衆に告げるであろう、人、敗れるとしても、堂々果敢すべし、と」

イシユタルーナは祠の傍の洞窟の開発を命じた。

祠が社に蔽われ、社が神殿の奥となる時、洞窟の入り口も神殿の一部となっていた。調
べれば調べるほど洞窟は深い。

照明を設置し、飲み水（清らかな地下水の大河が発見された）や食糧や衣服を備え、住
環境として整備し、衆の移住を命ずる。

「なぜなら、やがて超大国が攻めて来るであろうから。衆よ、地下へ。かつて野獣を恐れ
て洞穴に隠れたように。

衆よ、逝にしへに還れ。感覚を呼び戻せ。人のロゴスに、魂魄の真髄に聴従せよ」

イキリヤヌグラードの中心には、大きな公道が貫徹している。エスプレッソ街道だ。

北にある、イノグ副聖都まで一直線に伸び、イキリヌートへと登る道に繋がっていた。

道路の幅は全体で二百メートルある。左街道、中央街道、右街道に三分割されていた。左街道は幅五十メートルで、イノグから南下する者が進んだ。

右街道もまた、幅は五十メートル、イノグへ北上しようとする列が進むのであった。いずれも、徒歩の人やロバやトナカイや馬車や牛車や騎馬や大羚羊が悠々と往復し、稀に駱駝や龍馬や麒麟や乗用白虎なども行く。

道路沿いには商店や旅籠など多くあるが、広い歩道上に露店を広げる庶民も数多いた。

中央街道は中央分離帯の役も果たしている。

イオニア式の円柱や、トレーサリーを上部に戴くアーチ、数々の彫刻で覆われた壁を処々に置き、壮麗なことこの上もなかった。

幅は百メートルあり、上と下の二層構造で、下道は屋根つき列柱廊で、高速専用の一般道である。屋根の高さは十メートルあり、左右の街道を行き来するための陸橋が処々に渡されていた。

実質的な道路幅は四十メートルほどで、両脇は食料品店や衣料店、食堂や喫茶、休憩所、薪売り、旅籠、飼葉販売、蹄鉄作りの鍛冶屋、湯浴み所、公衆酒場などがある。

上道はその屋根の上にあって、要するに屋上なのだが、胸壁を備え、軍事専用道路であり、急使や派遣された軍兵団などが疾駆していた。

胸壁と警備隊の駐在する小塔がある以外はフラットである。

ゾーイはイキリヌグロードを貫く幅二百メートルの街道を跨ぐような、陸橋型の城砦を、いや、屋敷を建てて、公私を問わずにいつも往来の監視をしていた。

この陸橋構造の城砦型の屋敷の両端には、石造建築が聳え、それぞれの中心には、四角い中庭があった。砂漠色した敷石が敷き詰められている。数百人の兵士が整列する時もあった。

自宅とは言え、兵舎や武器庫も兼ねているのである。

ゾーイは天球儀のある書斎で、海図を見ながら考え込んでいた。

暖炉の薪がパチパチと爆ぜる音しか聞こえない。静寂であった。

痩せっぱちで小柄な、大きな鼻、口髭を盛り上げるように蓄え、風采は貧相であるも、今や押すに押されぬ銀の聖闘士である。

窓の下を眺めた。街道を数多の人や馬車や騎馬が往来する。

絹の服を着て、豪勢な青貂の毛皮を被る。

国民のほとんどが鉄で、一般市民であるか、一兵卒、又は軍曹・曹長かであるか、極稀に少尉であった。

銅はブルジョワジー、又は下級将校や騎士などである。

青銅が上位の騎士や、男爵など小貴族、将であった。

そして、銀は聖なる闘士という神聖な身分で、大貴族という時代である。

ゾーイの子分であったチエフも、今や男爵だ。彼自身はゾーイ同様に小柄だが、筋骨隆々たる銅の騎士数名を常にさぶらわせ、華美な儀装に、威風堂々。嗅ぎ煙草を嗜む。

「時々、我に還って、顧みる時、信じられない思いがする。数か月前と何と違うことか。足軽風情の俺が王侯貴族の身分になっちまったんだからな」

「運命ですね」

「ちげえねえや。ふふ。まあ、諸行は無常なのさ。なるようになるさ」

「そうですね。しかし、わかっていても、人間って奴あ、悪足掻きするもんです」

「そのようだな。おい、チエフ、相も変わらずシルヴィエはスパイを送り込んで来てるんだな」

「ええ。いりやぬ神の力に納得がいかないのでしょう。何とか工夫をすれば、いりやぬ神の眼を免れるかと、毎度、毎度、あの手この手でさまざまに創意工夫しています。まったく感心するほどですが、所詮、人間の力ですから、無限ではありません」

「おかげで、向こうの動きが解って、こっちは助かっているが」

ゾーイはポケットから乾燥煙草を取り出して鼻腔に吸い込む。

「まあ、それが偽の情報だったということもあるんです、こちらをハメるための。

しかし、裏の裏の裏の裏の裏であろうとも、いりやぬ神が知らないことなんてありませんから、問題はありません。

そこまでバレバレなのに、あたかもバレてないだろう的な自信満々で来るから、いや、滑稽で滑稽で、楽しくて仕方ない」

「確実にわかっているのは奴らが侵攻して来ることだ。大艦隊でな。

大航空母艦に、ジェット戦闘機だ。

俺には、わからないが、それでも、俺たちが勝つんだろうな」

「いいえ、衆講義のとおりです。」

ちなみに、東大陸の帝国たちも、我らを潰そうとしています。新しい力が気に入らないのでしょう。特に、強い力が。

人は実は皆、怯えて生きています。

彼らには不安と猜疑があるのです。不安なので、信じるのが怖くて、すべてを信じたくないのです。

彼らは彼らが見ている現象、すなわち、彼らが見たいように見えるように企投した現象を見て、事実を推測しています。

猜疑心でモノを見るから、猜疑的にしか見えない。

結局、実在があつて、それを感じて反映する感覚を、その段階では何者でもない感覚を、何かのかたちに構築してモノ・コトとして整理し、整理されたものを命名して分類し、認識が生じる、現象がある、ということではない。つてことです。

まずは、いきなり現象があつて、そこから“実在”が捏造されるのです。すなわち、人はありもしない実在の幻影を見ているのです。起因もキツカケもなしに、最初から企投しているのです。

すべては心です。

我々は宣教も侵略も何も考えていないのに、不思議なものです。勝手に脅威を感じているようです、奴らは」

「戦争なんて、そんなことなのさ。もしくは、武器商人の販売促進活動さ。それがために、庶民は家族から引き裂かれ、見知らぬ土地で悲惨な死を遂げなければならないのだから、堪ったもんじゃない」

「商売ですからね」

「ふ。そんな奴らでも、娘の誕生日にはプレゼントをかうのさ」

「政治家も高級官僚もです」

「確かにな。」

栄華と権勢と名誉と金銭とを求める。清貧を嫌い、名声への依存、妄想的に肥大した自己の優越性を顕示することへの欲望。

多くの国の官僚は国家を私物化している。自分の成功と収入のため、ポストを求めているに過ぎない。

人は奇妙だ。そんな奴らでも、慈悲を説く神の前で祈り、家族を愛し、週末にはご馳走を食べ、夏には海辺の別荘へバカンスに行く。大したもんだ。

そんなことのために庶民は運命を狂わされ、夢も絶え、見知らぬ場所で辛酸を舐め、斃れて死す。

戦争が終わって生きて帰れば、少女を姦したか、こどもを殺したかと問われ、非難される。庶民は徹底して犠牲者だ」

「王侯貴族は兵士など駒としか思っていないませんかね」

「上流階級の子弟は激戦地にはあまり行かないようだしな。

どこであろうと、いつの時代も、侵略されているのは庶民であって、国じゃない。攻めた国も攻められた国も、犠牲者は庶民、庶民がいつも被害者なのさ。

国単位、宗教単位で裁こうとしても、実態に沿わないと思うぜ、俺は。

つまりはヒエラルキーの下層が犠牲者で、悪はその上の方にいる連中なのさ」

「まるで、階級闘争の話みたいですね」

「俺は共産主義に興味はない。私有財産という蜜を知った人類が原始共産主義には戻れないように、共産主義には根底から無理がある。或る意味、基督教的な禁欲的理想主義だ。全員が私利私欲のない善人ならよかったんだがな。

社会制度をいくら工夫しても無駄だと思うね。人は皆、抜け道を見つける。したたかなクズどもはね」

「他人を犠牲にしても、人生、うまくやればよい、という考えはクズです。生きる意味も、価値も、資格もない」

「まあ、公平に言えば、誰も彼もうまいことやろうとしてる。そこは貴賤を問わずだよ。大したもんじゃねえか。素晴らしい世界だ」

「酒場にも行きましょうか」

「あゝ、それがいい」

ゾーイは高級な店になど、あまり行かない。バルなどの立飲みが基本の大衆酒場によく行く。

上等な服を脱いで、粗くて、機能的で、頑丈な服に着替えた。いい気分だ。剣を佩く。非番の歩兵だと思われるであろう。それも楽しい。

行きつけに行った。二の腕の太い亭主は実は彼の配下で、抜け目のない男だった。

「スワン、元気か」

「おや、旦那、久しぶりで」

スワンなどという綽名とは似ても似つかない、海坊主のような漢だ。

昔は海賊皇リュウの家来の下っ端だった。直属の親分はポセイ。ポセイは渦巻く髪のと渦巻く鬚・髭・髯、ネプチューンのような大男で、リュウの配下でも特に暴れん坊であった。その親分の気風を受け継ぎ、スワンも元は冷徹な海賊であった。

「あゝ、そうだったかな？ まあ、最近、忙しかったから。海の方でも、行こうかと思っただけ、どうだい、あつちは」

「いろいろ、ありやすぜ」

そう言いながら、微かな目配せ。ゾーイがそっちを見ると、

「おっと、ありやあ、ダーじゃないか」

敢えて放置している、遊泳中のシルヴィエ・スパイだ。諜報担当の大枢機卿シニクの直属で、特別な存在であった。

神聖シルヴィエ帝国において、大枢機卿は世界の注視を集める存在だ。絶対神聖皇帝は五人の大枢機卿の互選によって選ばれる。すなわち、五人が互いに話し合っ、五人のうちの誰かを選ぶのだ。大枢機卿のうちの、少なくとも一人は、後の絶対神聖皇帝になるのである。

シニクは家柄もよくないが、ここ数年で躍進著しい。五、六年前までは誰も彼が大枢機卿になるとは思ってもいなかった。

チエフも小声で言う。

「尾けますか」

「むろんだ。検証しなければわからない。今知る限り、知り得る限界の範囲内言えば、奴は海の方へ行くはず。敵は軍艦を寄せる海域や接岸地を決定しようとしている。

むろん、半島の地理は何十年も前に調査済み、凡そ決めているはずだが、実行するにあたっては詳細な情報、精密な確認が必要だ。どんなこともそうだ。

確認を怠る奴は物事を甘く見ている奴だ。甘く見る奴はしくじる、ヤケドをする、それが常道だからな。

土地の起伏、海岸線の輪郭、気象条件や起こり得るあらゆる可能性を、奴らはその最後の一押しのために、実地調査する。おい、スワン、ちよいと使いを出してくれ」

「心得てござんす」

ゾーイは見ることもなく、観察する。

「どこにでもいそうな男だ。存在がないみたいだ。まあ、誰しもだが」

ゾーイは苦々しくつぶやいた。マシフが来て、偶然のようにゾーイの隣に坐る。

「準備はできましたぜ。ジョン・スミスのところへも知らせを出しました。今宵も、霧が出てきました」

ジョンは今、イノーグの副聖都にいる。

「そうか、わかった。で、誰と誰が来た？」

「ロイとシドニーです」

「わかった。チエフが先に行く」

チエフが出た。

少し後で、ダー・ザ・インが小銭をカウンターに置き、スツールから立つ。出た。外で待っていたチエフがさりげなく尾行する。

ロイが席を立った。チエフの後を尾ける。ダー・ザ・インの背中が遠く見えていた。

獣脂のランプが街のあちこちで未だ点灯している。男たちが歩いたり、露店があったり、酔っ払った兵士が坐っていたりした。霧が出る。ひたひたと忍び寄るようであった。

ロイの後方をシドニーが行く。シドニーの眼には、チエフの背中が霧のベール越しに見えていた。マシフとゾーイが小銭で勘定し、襟を立てて顔を半ば隠し、店を出る。シドニーを尾行しながら、ロイの背が霧の向こうに消え始めていた。

「あまり距離を取れないな、見失ってしまう」

「そうですね、奴が気づかないことを祈るしかないですね」

チエフが横丁に入り、姿を消すと、ロイがダー・ザ・インに少し近づく。しばらくして、ロイが姿を消すと、シドニーが近づいた。

シドニーが姿を消すと、どっからともなく、チエフが現れ、尾行する。入れ代わり立ち代わりであった。

広場に来る。ダー・ザ・インは深夜発の駅馬車に乗った。八頭の馬が牽く三輦編成だ。二時間ほど揺られ、小さな宿場町で降りたが、森に入り、数分後に馬に乗って、五人の供を連れ、街道を疾駆する。

蹄に革を巻いた馬で、チエフが追う。どこにでもそういう馬を用意していた。後をロイとシドニーが追う。ゾーイとマシフは少し遅れて、大鷲の背に乗った。空から急いで追尾する。

数時間後、海岸に着いた。リアス式海岸の深い入り江だ。

「思ったとおりだな」

黎明の兆しを感じられ始める。ダー・ザ・インたちは日の昇らぬうちに沿岸の調査を済

ませ、沖から突如あらわれた高速艇に乗って、彼方に消えた。

「恐らくはダミーだろう」

「って言うと、わざと尾行させたと」

「むろんだ、チエフ、どう考えてもわざとらしいだろ。イキリヤヌグラードの繁華街にいた理由がわからない」

「確かに。でも、もう一步、疑ってみませんか。

高速艇があらわれたことです。あの舟艇は長距離航行には向かない。きっと、本隊があるはず。船団が近くに来ています」

「そうだな。つまり、裏の裏を搔いて、ダミーに見せ掛けて、実は本当にここが上陸地かもしれないな。ふ」

「真実は現象の霧の蔽いの奥深くにある、ってことですかね」

帰り道、ゾーイの一言で、ロウマンヌという村に立ち寄った。

「ランチにしよう。俺たち、何も食っていないんだぜ」

土壁に石灰を塗った家や、地産の黄白色の石を積んで赤い素焼きの屋根瓦を葺く家々がならぶ。川は何万年もかけて大地を削ったのであろう、数メートル下を流れていた。

石橋を渡る。荷車を牽くロバが擦れ違いざまに欠伸する。

中心に行くと、村の中で二つの川が合流し、合流点は船の舳先のようにであった。その先端にある料理屋に入り、食事とする。

村人以外は来ない小さな店なので、彼らが坐ると、座席の半分を占めた。

「ふむ、落ち着く店だ」

「色彩のせいもあるかもしれませんがね」

「クリームのような黄白色だな」

石板に書かれたメニューを読む。チョークで手書きされた文字には味わいがあった。

「俺はラザニアだな」

「葡萄酒も」

「このチーズは何だ？」

「山羊のようだが、少し変わっているな」

「旨いには違いありませんよ。後で仕入れさせましょう」

窓からは直下に浪々たるロウ川があった。川向こうの家なみも見える。

人々の営み、洗濯女や市場へ行く婦人たちの立ち話、魚を市場に運び終えた漁師が既に

バルで一杯。鋤や犁を荷車に積んで農耕馬に牽かせる太った農夫。商人が館で交渉している。笑い声が聞こえた。

「この平和が永遠なら、本望だな」

第八章 豊穰の午後 神聖シルヴィエ帝国

最果ての北極圏の永久凍土に、神聖シルヴィエ帝国の聖なる首都ヒムロ（非无呂）はある。

東西南北を長さ百キロメートルの第一の城壁に囲まれていた。その城壁の厚さは百メートルある。

そこを抜けて、百メートル行くと、第二の城壁であった。その高さは二百メートルで、厚さも二百メートルである。

さらに、そこを抜けて百メートル行くと、第三の城壁があった。高さが三百メートルで、厚さがまた三百メートルであった。

三重の門を抜けるだけで、八百メートルもの距離があるのだ。

大門は東西南北にあり、大路が正方形の都市を十文字に切っていた。その交差点が聖都の中核である。

ヒムロの真中央には中枢となる建築がある。

聖者イキの座のある大聖堂であり、彝啊咽厨御神の神殿であり、絶対神聖皇帝が居住し、かつ祭祀及び政務を執る聖大神殿である。

中心の塔の高さは二千一百メートルの尖塔で、四つの七百メートルの塔が東西南北を支えていた。東西南北から列柱廊が伸び、一キロメートル先に高さ三百メートルの尖塔を持つ。

真上から鳥瞰すれば、壮大な十文字であった。

その聖なる建物の中に入ると、広大な礼拝堂があり、大祭壇がり、大祭壇の頂上には、聖の聖なる御徴の、

が荘厳されたていた。祭壇の背後は黄金の衝立であるが、それを背景に祭壇の最も基幹をなす部分に、背凭れが二十メートルも屹立する玉座がある。

絶対神聖皇帝イータは肘掛けに頬杖を突き、体を傾け、台座の階段の下にならぶ臣たちを物憂く睥睨している。気怠そうなまなざしで。

大賢者セトが言う、

「我らは、聖の聖なる聖者イキの教えのとおりを考え、言い、行動しています。

その真究竟真実義は『龍肯』です。

全網羅です。現実主義です。

現実が真実です。『存在』という語を誰もが理解し、日常に使い、何ら不安もないのに、それが何であるか、まったく解明されていません。『現実』ということも、同様です。誰もが知るのに、捉えられません。

しかし、それでも、乾いた風は火を煽り、火は鉄を溶かし、鉄は水に冷まされ、水は火を消します。右手が握るものは、右手に握られている。我らの科学兵器が古く弱い兵器を淘汰するがごとくに。

我らは、いりやぬ神に逆らいません。いりやぬ神は我らの味方です。

聖なる皇帝陛下、勝利は眼の前です。世界はまもなく制覇されるでしょう。我らを超える超大国がありますでしょうか。

百億人の民、三億の専門戦士、二億の予備兵、十万の自走式砲台付き装機甲戦闘車輛、超音速で飛ぶ一万機のジェット戦闘機、大陸間弾道ミサイル、島のように巨大な五千隻の航空母艦、他国は弓矢や盾矛で闘っているというのに。

我らが勝利せずして何でありましょうか、光の神、啊素羅神群アスラの意のままに。我らが信仰に栄光あれ。

最高神、天の神の帝皇、神カム彥い亞あ呷れ厨ず御の御心のままに」

大將軍ムーノは進み出た。

「既に、戦闘機と空挺部隊を乗せた戦闘ヘリコプターを載せた航空母艦千隻がイシユクンダイナヴィア半島から十キロ沖の海上に停泊しています。

それ以外にも、さまざまな科学的調査をし、周到に用意しています。

諸々の企てが幾重にもあり、準備は万端です」

「陛下、彼らは何もまだ気がついていません。霧と高山から瀧のように流出する雲のせいで、視界が零だからということもあります。

我らが科学的予想どおりの現象です。だが、イシユタルーナらが気づかない何よりの理由は」

大賢者は言葉を止め、皇帝が静かにゆっくりと息を呑む。一秒の間の後、厳かに続きを言った、

「いりりやぬ神が教えないからです」

海霧が深い。沖を見ようとしても、

「何も見えないぜ」

昨晚、ゾーイの報告を受けてから、今朝、早速、沖を偵察しようとしたが、凄まじい濃霧であった。

「おまけに冷えやがるぜ」

「あゝ、まったくだ。ふいつくしゅんっ」

「大鷲將軍殿は、まだか」

「いや、来てるぜ。俺はここだ」

「おゝ、ゾルゲーノフ殿」

地に足をつけて立つと、三メートルを超える大鷲の將軍ゾルゲーノフは、

「俺に乗れ。早くしろ。誰が行く」

「俺だ」

海賊皇リュウが自ら出た。

「何と、海軍の大將が出てよいものか。おまえに万が一のことがあってみる、いったい、何とするか」

「何を言う。おまえは大鷲族の將だ。將の背を借りてよいのは將だけだ。おまえとて、万が一のことがあってはならぬ身ぞ。おまえが死するなら、俺も死をもつて責任を取るしかあるまい」

「愚かなことを。軍はどうする」

「俺の軍は、いりりやぬ神の海賊軍だ。俺などいなくとも、何も困らぬ」

「そうか。已むを得まい。承知した」

大鷲は飛んだ。

沖に出ても霧は深い。

「ダメだ、見えないな」

ミサイルが飛んで来た。躲すも、追尾してくる。

「まずいな」

「当然だろ、敵はレーダーで感知してる。想定範囲内だ」

「しかし、何も見えんぞ。引き返すしかない」

「驚の眼を以ても見えぬか」

「我が一族は梟のごとく夜目が利くが、霧では無理だな」

「降下しよう」

「バカな」

「墜ちたら、泳いで俺が半島に連れ帰る」

「ミサイルだぞ。粉も残らんわ。ふ、笑わせる。仕方あるまい」

「俺は海賊だぞ、四角四面にやっつけられるか」

急降下。

「見えた。船影だ。微かな灯も」

「このまま低空飛行するぞ、いいか」

「むろんだ。数えるぞ」

行けども行けども、群島の中に突っ込んだように艦隊が聳え、その列は絶えない。

「おい、これは」

見渡す限り、巨艦のシルエットで、海上に大きな都市ができたかのようにであった。

「数千隻はある。航空母艦だけで」

自動装填連射銃が凄まじく連続音を響かせる。高射砲を撃つ高さではないし、そもそも艦と艦とが近過ぎて、砲の類は撃てないからであった。

「引き上げよう。これを知らせなければ、ならない。たとえば、この身が裂けて死し、魂魄だけとなったとしても」

イキリヤヌートの洞窟、いや、地下都市への移動は完璧であった。

水も空気も確保されている。

この洞窟への入口には、途轍もない圧力で固められた数百メートルの厚さを持つ大磐で幾重にも塞がれた（いりやぬ神の神威なくして、どうしてできようか）。

しかも、洞窟そのものの周囲は強固な岩盤である。

ここが水などの浸蝕でできたものではないことは明らかであった。

夏涼しく、冬暖かい。常に空気が新鮮できよらさやか、地下水流や湖の水も麗しく潤い、うまい。

食料の備蓄は、大量の塩で漬けられたものもあるが、乾燥したものが中心で、たっぷりあった。

家畜の飼育スペースも広大で、乾燥したトウモロコシが大量に飼料としてある。

薪は見上げるほど積まれ、燃料も何十万バレルもあった。

五千人が数年暮らすに充分である。

イシュタルーナはこの都市をアビスと名づけた。

長老のアビスの名に因んだのだ。

「イシュタルーナ様、ご安心ください。我らのことはご心配なさらずに」

イシュタルーナは強く頷く。

「心のままに。」

他に何もない」

神聖シルヴィエ帝国の空前の大侵攻が始まった。

大航空母艦から放たれるジェット・エンジン搭載の戦闘飛行機は高温高压ガスを噴射して音速（秒速三百四十メートル、時速千二百二十五キロメートル）で飛び、半島を五分もかからず横断し、一時間で縦断する。搭載したミサイルを発射、自動装填式の連射銃で撃ちまくり、数千機で上空を蔽い、太陽を消した。昏い。

絨毯爆撃、大空襲であった。

龍馬に跨るロネが馳せ、月の弓で迎撃するも追いつかない。首都周辺の都市は次々と陥落する。

数千の艇から、一万数千の戦闘車輛が続々上陸した。

村を焼き、町を破壊し、進む。

だが、そのいくつかは、イシュタルーナの太陽の剣やラフポワの雷霆神剣、ロネの月の弓やファルコの海の大鉞に叩きのめされた。

ここで、一代の英雄が現れる。ジヴィーノという北大陸出身の傭兵で、鋼の長槍（長さ

五メートル）を十本束ねて鋼を撚った極太弦（弦というよりは太い綱だ）をつけた超弩級の靱力の強い鋼鉄の弓で三キロメートル以上も飛ばし、上空の戦闘機を射落とした。

この男、世界最強の臂力皇帝羅范にも匹敵しようかという超巨漢で、身の丈四メートル、二の腕の太さがサラブレットの胴回りくらい、肩幅も広くて身の丈に近く、胸板も分厚くて身の丈に近く、遠くから見ると前から見ても横から見ても正方形に見える。

魁偉の剛力兵であった。

しかし、これでも空から来る敵には抗し切れない。

いりやぬ神の凄絶なる力を使えば、楽勝なはずであった。

いりやぬ神は瞑目し、何も言わず、金箔の細切れのような照りが揺蕩う黄金色の空気の中で、甚深なる瞑想をしている。

民を襲ったのは、ジェット戦闘機や砲台附戦闘車輛だけではなかった。

「あ、あれは何だ」

「龍だ」

龍族だけではない。迦楼羅も飛翔する。

神聖シルヴィエ帝国は圧倒的な科学兵器を備えているにも係わらず、イシユタルーナの（いりやぬ神の）魔訶不可思議な力を適切に（つまり、必要なだけ）警戒し、科学を超えた魔訶不可思議の力も自軍に加わえようと試み、異界の眷属たちに依頼をし、遺漏なくいりやぬ国に対処しようとしたのであった。

だが、日頃の帝国の科学主義的なパブリック・イメージを鑑みれば、到底、成立しない交渉のはずである。だが、奇蹟的に成立した。

「信じられぬ。稀有だ。あれよあれよと言う間に。まさか、いとも容易くこの日を迎えようとは」

交渉の責任者であった外務省副大臣のアイシユタウゼン自身が驚き、又、違和感を覚えたほどである。むろん、交渉に当たっては、可能な限りの準備をした。各民族の魔術師や召喚士、魔法使い、奥義書博士、神秘研究家、錬金術師、修験者、宗教家、在野の修行者など、日頃まったく顧みていなかった者たちに莫大な謝礼を支払い、仲介を依頼した。だが、それとしても、意外、不思議、あまりにも容易過ぎる。たやす

成功感よりも危機感の方が強かった。おのれを超えた力の機らしきを感じ、畏ではないかという猜疑の念から、すべてを再検証・再調査したが、危機は発見できない。

「むしろ、その方が怖い。いりやぬ神の企みでは」

彼の懸念は功を急ぐ外務大臣から無視され、軍部への報告は、

「懸念なし」

それを受けた軍事大臣、兵部の卿はさまざまな噂を聞いていたが、気運や打算や彼らの立場上の成り行きなどに追いつまれ、併せて功績と栄誉を欲す心に駆られ、既に準備の整っていた軍にGOサインを出す。

ジェット戦闘機、龍や迦楼羅の次に、半島の北西沖に停泊する軍艦から放たれた舟艇がリアス式海岸のあちこちに着岸し、続々と上陸するは悪鬼よりも怖ろしき、慈悲もなき修羅ども。

これこそが世界が怖れる無敵非情の殺戮集団、『屍の軍団』だ。聖教のために命と生活すべてを捨て、生きながら屍骸同然となった、死を恐れぬ最強の戦士、最精鋭の戦闘集団であった。

イシュクンディナヴィア半島のすべての王国はたちまち寝返って、神聖シルヴィエ帝国と和睦を結び、イキリヤヌグラードを攻めるための先陣となった。

首都は包囲され、陥落寸前となる。

敵はさらにアヌグイの山周辺に集結し始める。イノーグ副聖都に迫り、イキリヤヌートを目指す。

その時にも、昏い祠で、イシュタルーナは独りいりやぬ神に対峙し、巫女の務めを淡々と果たしていた。問うこともしない。

しかし、遂に、いりやぬ神の言葉が下された。

「去れ、朕は動かず。汝らは去^いね」

「いりやぬ神様、御意のままに」

「神聖シルヴィエ帝国の兵どもが朕を圍繞するであろう。だが、朕を崇め、禱り祀るであろう。」

イシュタルーナよ、時は来た。星が廻る。星の運行は常である。天が回転した。天命が革まる。諸行は無常、万物は流転するのである」

巫女騎士が集結していた神将や神臣、諸将や騎士、隊長らにこのことを告げると、一同は絶句する。

「僕らは用なしってことですね」

ラフポワが陽気に言う。

イシュタルーナは戒め、

「愚かなことを。いりやぬ神は見捨てぬ。誰の肩も持たず、味方もせぬ。万物万象である。異叛も背教も違逆もない」

イヴァンが敬虔な面持ちで、尋ねる、

「民は」

「いりやぬ神は現実と同じだ。万民は常にいりやぬ神の下にある。いずれの国の民も民族も」

「神聖シルヴィエの民も？」

ゾーイが疑義を呈す。

「さよう」

「しかし、シルヴィエがいりやぬ神を辱めるのでは」

司祭マグヌスは歎ずる。彼はエミイシの司祭であった。イシュタルーナは冷厳に、

「さようなことができようものか。あらゆる意味に於いて。いりやぬ神はシルヴィエなどいとも容易く滅ぼすし、又神聖帝国が何を為さんとも、違逆も背教も異叛もない」

レオヴィンチ、ミハアンジェロ、アーキ、ガルニエが思わず呻き、

「それでは空気に等しい、ないも同然」

「当然だ。」

一つ喩えを言おう。世界とは、時間（一次元）・空間（十次元）を合わせた十一次元時空と、ありとあらゆる事象との一切で構成される何かだ。

では、おまえたちは自分がどこにあると思うか」

「何と仰せられる、今ここに。聖なる都イキリヤヌートに参集しました」

「では、イキリヤヌートは、どこに」

「今ここに、アヌグイの山、イシュクンディナヴィア半島に」

「では、半島は、いずこぞ」

「東大陸に、このイデアス・アースオエスデ (the ideas earth イデアの大地、又はイデアの地球) に」

「では、地球は。どこにある」

「何と！ 大いなる宇宙に」

「宇宙は」

「……せ、世界に」

「世界は、いずこに」

「それは……」

わかりません。それは時空であって、器のようなもので、どこという場所ではなく、いや、その器や時空はどこにあるかとお尋ねになりました。在るとは一定の場所を占有することでしょうから、物理的であると、心理的であるとを問わず。まったくもってわかりません」

「しかし、おまえは困窮したが、何ゆえの、何の困窮か。それが言えるか。そもそも、在る、とは何か。

実在するものも、しないものも、そのそれなりの仕様・意味・かたち・形相・輪郭で実存する。現に実存している。

どれもこれも、かたちで、現実存在だ」

「わかりました。世界・現実はあるとか、ないとかを言うようなものではないのです。未遂不収です。

ただ、行動するしかありません」

「ならば、『人、堂々果敢すべし。人、義しきと以ふ（思う）を爲す善し』の義だ。古来言うとおり」

「あゝ、そうは言うが、癡かな自分^{おろ}は嗟嘆せずにいられない」
青銅の兵の一人がそう嘆いた。

第九章

黄金の黄昏

死なんとせば生き　生きんとせば死す

嘆きをよそに、イシユタルーナは淡々と、

「では、行くぞ。ぐずぐずするな」

ロネが、

「しかし、いずこへ」

「西へ」

「西？　敵が西から来るというのに」

「死中に活あり。艱難辛苦に遭つては敢えて渦中へ。あたしが太陽の剣で、列の剣尖となつて逝く。

ファルコとジョン・スミスがその後ろに遵え。

その後ろはレオヴィンチ、ミハアンジェロ、ガルニエ、アーキだ。

次はユリアスと銀の聖闘士五人、次は銀八人、次は十人、次は銀と青銅の将を合わせて十二、かように四十に達するまでは二人ずつ増やし、四十人に達したならば、それ以降は四十人がならぶ横列を二十まで成せ。錐の尖のごときを陣形とし、敵を剣の尖端のごとく貫徹する」

ファルコが「水」の位階に達した海の大鉞を手にとって、大海のごとき威風を持つ刃をしみじみ眺め、

「了解。ちなみに、いりやぬ神の力が得られなくとも、鉞の神威力は有効ですか」

「やれば、わかる。いや、確信がある。渡り鳥が時節も行き先も変わらずに数千キロメートルを飛ぶのごとく。明瞭な確信が。

皆、大地の楯は逝き渡っているな。砲弾が来る。頭上にこれを翳せ。災厄を免れるであろう。

途中、山賊皇ユーグルと合流する」

聖都から脱出行が始まる。総勢一千二百二十一人の騎兵隊を編成する。一般市民を究竟の奥義のごとく洞窟の奥の奥に秘匿し。

「逝くも地獄よ、いりやぬ神の加護あらば加護がある」

民を隠し、戦闘員のみが強行突破を試みるかたちだ。

「為すべきを為す。いずれ近いと希求する奪還の日のために。しかし、心は静かなる湖面のごとくせよ、きよらさやかに、今を生きよ、未来を希うという時間性の中に」

準備はたちまち整えられた。兵士たちの鼓動が聞こえる。ロネさえも死を覚悟し、体が強張った。ラフポワが意外とぼんやりした表情である。ロネは苦笑した。

「俺もまだまださ。俺が死んだって世界は何もかわりやしない。安心しろよ、ロネ・ストリントベリイ。さあ、何を恋々とするか。俺は随分前に死んだはずじゃなかったのか。ふふ」

一向に動じないイシュタルーナは見廻し、確認すると、

「真向正面から直截に行く」

ごくり、兵士たちが息を呑む無音の音がする。しかし、それだけであった。反対者はいない。

早暁、装甲した龍馬や大羚羊で一氣に下山した。装甲も聖別され、神光に赫く。

「いえいやああ」

聖句の金の刺青を青白く燃え上がらせるイシュタルーナが叫び、原蛇と聖なる御徴の刃紋の泛ぶ太陽の剣を振り翳した。敵軍は予想外のことに眼を剝く。

アヌグイの山の麓に集結していた帝国軍は未だ少なかった。とは言え、数万もの数である。だが、天降り給う神のごとくに熾え赫く火の玉を見て畏れぬ者はいなかった。

太陽の剣は既に「土」の位階に達している。

その一振りは光焰の龍のごとく実在の力で数千人を薙ぎ倒し、焼き滅ぼし、機装甲された砲台附自走式戦闘車輛を真つ二つにした。

バズーカ砲や移動式連射砲、自動装填連射銃などが襲うも、楯が撥ね返し、太陽の剣に感化された脛当てが脚の動きを神速に変え、旋風のように走らせ、軽々と高く飛び、何人もこれを阻めない。

紅海を渡るごとく、怒濤が裂け、太陽の前に道は開かれた。

「あたしに続け、錐の切り尖のごとく、差し込み捻じ込み切り裂き貫き刺し徹せ」

ファルコの海の大鉞はハリケーンの日の太平洋の怒濤、イヴァンの天空戟はジェット気流のごとく、ジョン・スミスの大山脈の双頭両刃の大戦斧は存在の大威壓で、兵器を粉碎する。いずれも一撃で数十人を裂き砕き斃す。

ロネは白銀の月光の弓を構え、前後左右へ自在に矢を放った。神なる矢はまるでミサイルだ。何もかもを貫き、燃え上がらせた。

ラフポワも雷霆神剣（ソシンの千人の兵を屠るために一時的な「水」の位階にあったが、今は正規に昇格し、「水」の位階に到達していた）を振り、戦車も人も数千を一緒に電撃と業火で破壊粉碎し、砂塵と化する。

錐の外側を逝く兵は、龍の鱗のごとく、鎧のごとく、錐を護った。始まってしまえばはや観念し、一心不乱、無我夢中、覚悟して死を決し、一所に命を懸け、背水のごとし、鬼神の勢い。

どうにか突き抜けて、最初のポイントであるドーリー岳群に入った。槍のような奇岩が林立する場所で、大軍は入ることができない。海底が隆起してできた巨岩山が数千万年の間に浸蝕されて、堅い部分だけが牙のように残ってできた奇観であった。

イシュタルーナは「人数を確認しろ」と命ず。暫時休め、とも言い添えた。

「奇跡だ」

兵士たちは生きていることに感無量であるが、巫女騎士はさようなことを気にする暇もなく、聖鎧で装甲した龍馬を駆け上げさせて、尖った巖山の一つの頂上に立ってその高台

から遠望する。ロネも来た。

「敵は追ってきませんね」

「一つは怖れをなしたからだが、それも今だけだ。

未だ『屍の軍団』が来ていない。奴らなら、怖れはしない」

「半島内には確実に上陸して来ているはずです。いつもとても迅速ですから」

「うむ。じきに追い込まれるな」

「仰せのとおりと思料いたします。

我らはどちらへ行くのでしょうか、イシユタルーナ様」

「ユーリー王の都だ。彼は忠誠心あふれるあまり今頃抵抗しているだろう。降伏を勧めに行く」

「今は寄り道の余裕はありません。戦う道を選んで、彼が滅ぶなら、それも彼らの主権です」

「それに、もしイシユタルーナ様が彼らを慮ってわざわざ危険を冒し、ユーリーの王都へ立ち寄るならば、余計に忠誠心を煽られ、逆効果です」

「では、敢えて見ぬふりをして通過しろと。うむ、忍び難いが、そうすれば、裏切られたと思い、我らを恨んで降伏を選ぶであろうな。

なるほど、それもよからう」

「で、どちらへ進みましょう」

ユリアスが問うた。

イシユタルーナは瞑目したが、

「龍角島へ」

「え、まさに敵の懐かも」

ロネが反対し、

「危険です。西の海にあって、北西へ延びる島は、我らが半島を龍の顔とした時、額から立つ角に喩えられますが、見方を変えれば、北大陸へ向かって伸びるかのようにも見えます」

イヴァンも同様に、

「よい選択とは思えません。前衛基地があるかもしれません」

だが、ユリアスは、

「いや、あの島は海面から切り立った絶壁の島です。岩礁も多く、船を寄せるに適さない」

「詳しいんだね」

ラフボワが感心する。

「コプトエジャにとって縁ある島です。かつて、宗教改革による迫害を逃れた人たちが紆余曲折の末、遠くあの島に逃れ辿り着いたことがあります。四千年も前のことです」

「わかった。逆に敵の盲点かもしれない」

ファルコが言うも、

「お忍びで行ければな」

ロネが苦笑する。

その時、突如、見慣れぬ騎士団が寄せて来た。問う、

「何者か」

「イシュタルーナ様をお迎えに」

ロンダーリン王の使いだった。

「大儀であった」

イシュタルーナは信じ切った顔で皆を促すが、

「念のため、用心しろ」

ゾーイは配下に命じた。

王城に着くと、イシュタルーナと数名の主要な将のみが謁見の間に通される。侍従が言った。

「さ、王の御前です。武器を置いてください」

置いた途端に、荒ぶる精鋭兵たちに囲まれる。

「お命頂戴いたす」

イシュタルーナはまったく動ぜず、毅然としていた。むしろ、憐みのまなざしで、

「愚かなる王よ」

一言そう言うのみ。

すると、謁見の間に渦巻くどす黒い叢雲が起こり、凄まじい雷霆が起こった。

王も大臣も将軍も武士たちもたちまち後悔し、震え上がる。平伏し、

「あゝ、気の迷いです、どうかお赦しを」

だが、既に遅し。王と大臣と将軍は稲妻に裂かれた。生きている城中の兵も家令も、畏怖に凍てついて蠟人形のように動かない。

城を出ると、ユーグルが近くまで来ていて、合流する。

「危ないところでした。獣道を数キロ行くと、地元の山の民も知らぬヴァン・ダイスの砦があります。今宵は、どうか、そちらで体をお休めください」

「わかった。心配には及ばぬ、大したことはない。大儀である」

だが、砦はシルヴィエの『屍の軍団』の夜襲を受けた。怖ろしい無慈悲な死の兵たち、悪鬼羅刹以上に凶悪強力な者たちである。散り散りになって遁れるしかなかった。

なぜならば、太陽の剣を振るうも、黒雲に太陽が隠されたかのように、普段の威力がな
い。

「ううぬ、いみりやぬ神のご加護が今はないようだ。やむを得ない。

撤回するぞ。皆に伝えよ」

龍馬に乗る暇もなかった。巖山を走る、唯只管、走る。ただひたすら

「ふむ、七転び八起きとはこのことか」

「まだ起きてはいませんが」

「むろん、起きるのだ。他はない」

「承り候」

無我夢中で巖から巖を飛び、急斜面を駆け下り駆け上がるうちに、周囲の者が一人二人と減る。

「あ、イシュタルーナ、気をつけて」

ラフポワの叫びも虚しく、

「あっ」

羚羊のごとき巫女騎士があろうことか足を滑らせ、岩から転落した。

「イシュタルーナ！」

ラフポワが駆け寄る。

「うううっ」

腕と肩と肋を押さえ、うなる。怪我をしていた。

「イシュタルーナ！ 大丈夫？」

「ラフポワか、大丈夫だ、大したことはない。他の者たちは無事か」

「わからない、もうバラバラだよ」

「ふ。二人いれば、十分だ。最初に戻っただけだ」

「そうだね」

正面から木々の間を縫って次々と『屍の軍団』の殺戮兵が迫る。情のない凍てついた、

蛇のようなまなざし。

光燦々たる聖なる太陽の剣を構え、

「目にも物を見せてやろうぞ」

振り被る。血飛沫、血潮撒き散らし、激しい乱戦。息が切れる。

「ゼハア、ハア」

「あ、危ない」

ラフポワが雷霆神剣を振り被った。イシュタルーナに向かって三方から襲い掛かった鬼神のような兵が肉片と化す。

それでも、普段の威力はない。

「神は僕らに試練を与えているの？」

「いや、神慮は計り難い」

危機一髪、凌ぐも一瞬、たちまち群がる敵、非情なる修羅の群れ、次々闇雲に斬るも、傷ついたイシュタルーナとラフポワだけ、埒もない。

「巫女騎士、神将、ここか、見つけたぞ」

そう喚くのは『屍の軍団』の中でも特に恐ろしい虐殺者、特殊殺戮部隊アンゴーモンに属する地獄の天使モーグヴの兵たちと、暗黒巨大トロールのパーエル兵たちだった。

ラフポワは絶望した。

「あゝ、もうだめだ。遂に、死ぬんだ。竟に畢った。とても幸せだったよ、イシュタルーナ」

「死ぬるか。ふ。善き哉、難儀の究竟に究竟の死力を炸裂させようぞ。これぞ人の生の華なるかな。死中に活を」

聖句の刺青の炎が光を放射し、イシュタルーナは瞑目す。聖なる刃紋の太陽の剣を青眼に構え、聖咒を唱える。刹那の間もせず、飛ぶ。

「いやあーっ！」

怪鳥のごとき奇声とともに、同時に数名の重装機甲兵の怪物らを縦に断裂し、剣は勢いあまって地面をも数キロメートル裂いた。地下は岩盤に達す。凄まじい燃え滾る赫奕、剣は「土」の位階に達し、すべてを灰燼とするも、その光燦によって、周辺の皆に居場所が知られてしまった。

「急げ、ラフポワ」

「もう走れないよ」

「弱音を吐くな、諦めるんじゃない」

「でも、イシュタルーナ、囲まれているよ」

「ぬぬ」

周囲を見た。深い森の陰に、殺戮の眼が数百も光っている。イシュタルーナの髪が逆立ち、全身の毛穴から炎のごとき気が噴き上がる。苦境に陥るほどに、激しさを増すのであった。快ですらある。

「何の、この程度、敵ではない」

「相手は『屍の軍団』だよ。死を怖れない特殊部隊だ。世界最強だよ。無理だよ。絶対、無理だよ」

「望むところ。己を超えてもなお己の頭を踏みつけて超えよ。超越をも凌駕せよ。己を超えた上にも超えて、究極の窮極を究究しようぞ」

「そんなあ」

「死中こそ活。それが生の営む新陳代謝、脱皮する蛇、死と再生、太陽、超越、破滅と未来、それこそが生命の本義ぞ」

究竟の刃紋を泛べる太陽の剣は“木”の位階に昇った。その神威は天も超えるほどの驚異である。

「いええええいっ！」

気魄、気合ともに精神一到、魂魄を込めて振り被り、振り下ろす。霹靂のような大轟音とともに、信じられようか、神の御業のごとく、激震が起こって大いなる大地を割り、高い雲をも引き裂いて、その一振りだけで、数千人の『屍の軍団』が滅する。

ラフポワは腰が抜けて動けなかった。

「こ、怖い。」

凄過ぎるよ、助けて」

イシュタルーナはかっと睨く大眼が坐り、強く少年の腕をつかむ。みひら おおまなこ

「さ、逝くぞ。立て！」

草臥れ切って朦朧、半ば意識を喪ったラフポワを引き摺るように駈ける。

その頃、いりやぬの戦士たちは巫女騎士を探し回っていた。

「イシュタルーナ様は、いずこに」

「わからぬ、皆探し回っておる」

「こういう離散時のために、いくつか集合場所があるが、そのいずれかに向かうはず。と

思われるが」

「太陽の剣の光を見たという者がいる」

「確かに、二、三十分前、空が明るくなったのを、昏い峡谷の狭隘の底にいても感じた。いずこの方面で」

「西南に四キロメートル、思ったよりも遙かに進んでおられる。集合場所の一つ、アジュールの丘に近い」

「深い樹林と峻厳な岩に囲まれた場所だ」

「急げ」

黙って従う兵卒数名、それは敵のスパイだった。だが、この大混乱、誰も気がつく余裕がない。互いの姿を顧みるも難しい嶮しい奇岩が林立する土地だ。兵が往こうにも、進捗の難しい地域だ。

難儀を究めたが、ようやく戦いの雄叫びを聞く。

「おゝ、あれは、いったい」

「戦っている。あそこだ」

「あ、イシュタルーナ様の声がする」

その時、背後から斬りつけられる。

「うぬ、貴様、何を」

「ふ、案内ご苦労、俺たちが始末するぜ」

「裏切りか、スパイか」

「死ぬる者には関係なからうよ、ふふ。」

死に際の、最後の最後に聞け、巫女騎士はもうこれで終わりだ」
だが、その数分後に炙られて死したのは彼らの方であった。

第十章 龍角島

またもや囲まれた。

「真究竟の真実義よ」

イシュタルーナが死を決し、叫ぶと、木の位階の太陽の剣は一気呵成に石の位階へと、下から上へ、地から天へと逆流、抗って遡る亢龍のごとくに翔り昇り、怖ろしい

までの勢いで、さらに激しく赫く。

「う、うわ、こ、これは」

何もせずとも、数万トンはあるかと思われる大岩が灼熱して次々と真っ赤に溶け出し、木々が黒煙を立ち昇らせ、炎上した。

「あたしたちが死すか、おまえたちが死すか、二つに一つしかない。生命を、我がうちの奥なる生命の究極を燃え上がらせるのみ、死力を尽くすのみ、それしかない」

巫女騎士は運命と合致した者のように、冷厳な眼で睥睨する。

もはや『屍の軍団』に勝機があるうはずもない。まるで、神と人とが闘うかのようなであった。

「うぐぬわあ……ぐわ、うぎゃあ」

苦しみ死に逝くも、最後まで、「あああああつ、聖教の仇敵め、天罰やあらん。うぎゃあ」

「無念、残念、無念、残念、うお、お、おのれーっ、イシュタルーナ」

などと呪詛の言葉を吐く。

巫女騎士は意にも介さず、

「最後まで救いのない奴らよ。それも又、善哉」

特殊部隊は壊滅した。同時に、黎明となる。

しばらくして、四メートル近い巨漢、山賊皇ユーグルが兵を率いてやって来た。

「おい、よくぞ、ご無事で」

「凄まじい焼け焦げの痕だ……」

「あの、先ほどの強い光は、その剣の」

イシュタルーナは剣を正面に立てて見せる。

「そうだ。これだ。見よ。太陽の剣は一挙に『石』の位階に到達した。さあ、時を無駄にするな」

ラフボワは気絶していた。

海へ向かううちに、薄明がほんのり空を染め、微かな黎明とともに夜が明け始めると、離散した者たちが一人、二人と合流するようになる。

出発した時には千二百二十一人いた戦士たちは、千二百十四人になっていた。生き残っていない、全員が疲労困憊、怪我人が多い。

満身創痍、這うようにたどり着いた、早朝の碧き海。

「あゝ、さ、早くこちらへ」

海賊皇リュウの配下の者たちが迎えに来ていた。敵の姿はなく、小舟百二十艘で龍角島へ渡る。波に揉まれながらも、束の間の休憩であった。着岸し、梯子で崖を登る。

原生林であった。細く狭いが、長い島なので、面積はある。だが、険しいため、無人島であった。人は住まない。

「これが龍角島か」

「何たる原始の姿」

「逝くぞ」

イシュタルーナが迷いなく歩き出すと、疲れ切っていた戦士ら皆驚き、

「いずこへ」

それに対して無記（記別せず）のままにて応えず、巫女騎士は無言で山中を歩き続け、疲労も溜まる頃、一つの洞窟に至りつく。

「こんな所にも洞窟が」

誰もが怪訝な表情の中、ただ一人ユリアスが、

「ああ、これは」

「そうだ。これこそがおまえたちの祖先が隠れた洞窟だ」

ユリアスの表情は信じ難いと言わんばかりであったが、

「あり得ないと思っていたのですが、それでも念のため、ここに古地図を持って来てあります」

ファルコが驚く、

「何だと！ 信じられん、まさか、この事態を予想してこの洞窟の古地図を持って来ていると言うのか」

「そうです。迫害されて、ここまで来た古代の聖者たちが作った地図を。彼らは国に帰ることができませんでしたが、手記などの文献や地図などの資料は数奇な運命を経て、故国に還ったのです」

ガルニエもゾーイも眼を丸くしている。

イシュタルーナだけが淡々とし、

「さ、逝くぞ、龍の巣へ」

イヴァンが問う、

「それがこの洞窟の名なのですか」

「おゝ、あまり入りたくない名だ」

巨漢のアーキもそう言った。

「なぜ行くのですか」

チエフが問うた。

「なぜ？だと」

「チエフの疑問は尤もです。敵に見つかったら袋の鼠です」

「レオヴィンチ殿、心配には及びません。この数十キロの洞窟は、言わば、大地下道です。

アヌグイの山まで続いています」

ユリアスがイシュタルーナに替わって答えた。

「何と！ 海峡を越えてか」

「本当か」

イシュタルーナがそれに答え、

「かつて、アヌグイ山の洞窟で、コプトエジャ古王国の物と思われる古文書が素焼きの壺に入っているのを発見したことがあった」

「うん、在ったね、祠に移動した」

ラフポワが思い出す。

「あゝ、祠にあったあれか」

ジョン・スミスが唸った。

さっさと入ろうとする巫女騎士に向かって、

「あ、イシュタルーナ様、先頭は私が行きます」

「ロネよ、太陽の剣を翳して照らす。あたしが先頭を逝こう。たとえば、魔王が出て、立ち向かうことができるのは、あたしだけだからだ」

「じゃ、怖いけど、僕がイシュタルーナとならぶよ」

「わかった。仕方ないですね。已むを得ない」

かくして次のとおりに横にならび、進んだ。

イシュタルーナ、ラフポワ。

ロネ、ファルコ、ジョン・スミス。

ユリアスが道案内、イヴァンが相談役。ユーグル、リュウ。

ゾーイ、チエフ、アーキ、ガルニエ。

レオヴィンチ、ミハアンジェロ、ネプチュルス。

その後は、聖闘士、青銅の将、銅の騎士、鉄の兵が遭った。最後尾は、ジヴィーノという、身の丈四メートルのあの巨大漢であった。

太陽の剣を、繁縷に荘厳された鞆から抜くと、巨大な洞窟が明るく鮮明に照らし出される。イシユタルーナはもう歩き出していた。慌てて、ラフポワが続く。

「おゝ」

驚嘆すべき光景。

「素晴らしい、これは助かるな」

歩き始めて、ロネは素直に喜ぶも、ファルコは眼を丸くし、

「信じられん、凄いな、ジョン・スミス」

「いや、魂消しました。照らして初めてわかる地の底、深い深い深淵……」

ユリアスが促し、

「さあ、さあ、皆さん、気をつけて、照らされても闇ですから」

イヴァンも、「そして、魂の灯火で照らすことも忘れずに」と言って歩き始める。

「オクタヴィウス殿は、うめえこと言うな、リュウ。さあ、逝くぜ」

「真面目に聴くもんだぜ、ユーグル」

ユーグルやリュウの背を見ながら、歩き出し、

「だが、安心はできない、用心しようぜ、チエフ」

「言われなくとも、わかってます。だって、ほら、明るいですが、それでも……」

その言葉を聞いて、後に続くガルニエが、

「そうとも、あちらこちら、そこかしこ、昏い、深い陰翳が在る。ない処はない。とても深い。リアルに。まったく以て、実に」

憂鬱そうなその言葉に、巨漢のアーキは、

「おゝ、まったくだ。気味が悪いぜ。だが、それだけだ」

レオヴィンチやミハアンジェロらは無言でうなずき、

「いつか地獄の絵を画く時の参考にしよう。かくも地の底の威圧とは。凄まじきものか」

「そうしよう、生きて帰れれば」

ネプチュルスは首を振り、

「よしておくんや、旦那方。暢気に言う話じゃないですぜ。後の聖闘士さんや青銅の将の方々、背後はよろしく頼みますよ。さすがのあつしも背中にや眼がついてねえもんだから」

「ふふん、何か、霊的な雰囲気と言うか、空気感が違うぜ。なあ」

ユーグルが言い、リユウも大海商を振り向き、

「ほうら、山賊皇様の言うとおりさ。本当に、魔王が出そうだが、ネプチュルスよ」

「脅かすない、海賊皇らしくもないことを。似合わねえや」

大海商はもううんざりだという顔をしていた。

ユリアスが清ました顔で、

「いやいや、いるかもしれませんね。地下に棲むゴブリンやオークの王がいてもおかしくない。少なくとも、古文書に依れば、大審問官がいたと記録されています」

「大審問官？」

巫女騎士が訊いた。

「魔神のような存在で、地底の最深奥部を支配していると記されています、古文書の記録によれば」

ユリアスは厳粛な面持ちであった。イシユタルーナも深くうなずき。

「ふむ」

「わかるの、イシユタルーナ」

「いや。この世はわからないことだらけだ。『わからない』しかない」

「だよな」

先ほど、ガルニエがいみじくも言ったとおり、皓々と照らしていても、ところどころ深い陰翳があって、なぜか、それがこちらを見ているような気がしてならなかった。

「なあ、水の音がしないか」

ユーグルが言うと、リユウが、

「するぜ、さっきからな」

「水と言うよりか、激流みてえだ」

鍛冶屋がそう言うと、ファルコが、

「見てみる、ジョン・スミス。ほうら、あそこの奥深い真っ暗がりを覗いてみりゃあ、わかる。剣の光が届いている」

峡谷、絶壁、ここに墜ちたら、どこまでも真っ逆さまだ。

ラフポワが震えた。

「川が流れているんだ」

「落ちたら、終わりだな。瀧になって、さらに落ちているようだ。奈落の底へまっしぐら

だ。気をつけて歩けよ」

イシュタルーナが言った。イヴァンは天があるであろう方向を仰ぎ、

「神よ、我らを憐れみ給え」

横目で見てファルコが、

「さっさと、逝くぜ」「あゝ、逝くよ」「そうさ、去ぬろう」

数時間歩む。

「今日はこの辺で野営にしましょう」

ユリアスがロネに言った。

「そうだな」

煮炊きが始まる。

「何だか、さっきからずっと、見られているような気がして仕方がない」

「何だ、ジョン、おまえもか。俺もそうなんだ」

ファルコのその言葉を聞き終えるまでもなく、ゾーイが立ち上がる。

「銅の騎士を連れて、巡回して来ましょう。チエフ」

「すぐに人選します」

腕の立つ者、気が利く者等を、数十人選び、言い出してから、五分の後には出発していた。少しの騒ぎが洞窟内に響いたが、数分で鎮まる。

ゾーイたちが百匹のゴブリンを率いて来た。

「こいつらです、俺たちをこっそり見ていた連中は。」

ちなみに、こいつらの言うには、大審問官というのは、地底の大魔王のことで、どうやら本当にいるらしいですぜ。

どうしますか。遁ずらするか、尊顔を拝するか。その二つに一つしか思いつきませんが」

「ふ、大審問官か。いかような奴なのだろうか、ユリアス」

イシュタルーナは双眸を赫奕たる太陽のごとく耀かせ、訪ねた。ユリアスが穏やかな、平静な面持ちで、次のように説明する。

第十一章 真夜中 真究竟の窮極の大深淵

「書に伝え聞くところを引用しましょう。」

『深き地底の壮大な魔宮があり、八千兆の兵に守られているという大審問官。八本の大角羊の角を生やし、三つの蛇の眼、左右各々に十二枚の蝙蝠の大翼、蜥蜴の尾、龍と黒山羊の混ざった顔を持つ。胴体は毛深い人間の体だが、黒い鉄の甲冑に覆われて見えない。鎧は鉾が打たれ、針の山のようにもある』とのこと。なかなか興味深い存在者だと思います」

話を聞いて、

「面白い、彼の意見を是非、聞きたい」

イシユタルーナが言った。

「巫女騎士様、またそんな無茶を」

「何を言うか、ロネ。無茶なものか。脱皮だ。身を捨てる、清々しき超越の飲み。炸裂の歓喜。自由自在の愉悅。

保身に走るな、生き生きとせよ。

身を裂き碎き天翔け躍れ」

「あ、イシユタルーナ様、そんな乱暴な、少しお待ちを」

イヴァンも止めたが、

「それ」

断崖絶壁から飛び上がり、墮ちる。地底の暗黒の峡谷の遙か彼方の深淵、そこへ飛び降りた。

「イシユタルーナ！」

ラフポワが叫ぶ。叫んだ時には、巫女騎士を追って、彼も飛び降りていた。

「ああー、お待ちを」

「どうする」

そんなやり取りも耳にせず、ロネとユリアスは飛び込む。

「どうするも糞もあるか、俺は行く、後は頼んだぞ、ジョン・スミス」

「いや、俺も行きます」

「ちくしょう、俺もだ」「俺も」「いや、俺も」

次々奈落へと下る。

驚くべき世界であった。人間世界にも巨魁な建築は数々あり、神聖シルヴィエ帝国の首都ヒムロの巨大建築なども、その代表例であるが、大審問官の建築たるや、筆舌に尽くし難き空前絶後、喩えのありようもなく、山脈や蒼穹と雖も、魔神の宮殿の巨魁さの比には

あらず。

何百万キロメートル降りたか、ひらりと着地できたのは、摩訶不思議の奇蹟で、何者かの計らいであると感じた。

毅然と立ち、にらみ、言う。

「いりやぬ神の巫女騎士イシュタルーナが推参した。大審問官殿に取り次がれよ」
黒きダイヤモンドのごとき鎧兜の牛頭の衛兵が現れ、言う。

「お待ちしておりましたぞ。」

第一義の最高法廷たる大疑殿へお越し願いたい」

「わかった」

そのやり取りの間に、他の者たちも次々堕ちて来た。

聞いたとおりの姿の魔王は玉座に坐って、蹄の足。坐っていても、角までの高さは八十メートルを超えた。その声は地底に轟く。

「怎麼生」

イシュタルーナは応え、

「説破」

「愚劣なる人間よ、おまえらは生まれて来ない方がましだったと知るために生まれて来たのだ。

そういう絡繰りだ。そういう絡繰りだからそういうことに陥る。これゆえにこれにあり、これ在るがゆえにこれ在り、だ。

人間存在の構造とは、そういう絡繰りでしかない。その絡繰りを人間と呼ぶ。

さればこそ、智慧など何の役に立とうか。すべてが儚い霞、狭霧、泡、水面の月の光、幻、薄羽蜉蝣の羽の影に若かず。

水が茎の内管を廻り、光が当たれば、蕾が萌え出でて、花を咲かせるように、親兄弟の愛すらも化学的な現象に若かず。

諸考概、イデア、概念も、ニューロンへの刺激を送り伝える電氣的発火現象の仕組みに若かず。物的現象に若かず。思惟の内容たるや、いったい、何者たるか。能わず。

それが諸考概の実態・意識の実在という。しからば曷や情、心、魂。

焉いずくんぞ由来、経緯、理由、根拠、意味、意義は。

さよう問えば、人間どもは、とやかく応え、理を捏ね繰り廻す。されば我、さらに問わん、とてもかくても、畢竟なん奚ぞや、と。

さあ、答えよ、おまえらは『唐突』に過ぎない。さて、『唐突』の何たるかを言ってみよ、この大審問官様へ言ってみよ」

いかなる剛の者も震え上がりそうな大審問官の音声を、イシユタルーナは眉一つ動かさず脳裡に留め、

「魔王ともあろう者が、愚劣なる質問を。所詮、それ自体が思惟、諸考概のうち。球体の中を廻る鼠に等しい。空疎すらもない空疎なる建築物。この巫女騎士を試すつもりか。風もなき風なのに、心の平安を亂す莫れ。」

さような問いへの答など、言えるものかは。未遂不収にしあらば。この世、現実、存在は、只管是惟がゆえ、只管是惟しかあらず。ひたすらこれた只々唯々あるのみ哉」

悪魔大王は嘲りを泛べ、

「ふわはは、面白きこともなき世なる哉。無味乾燥、非情、上中下左右もなき超絶大激流の真っ只中で棹差せる處なし。棹なし。筏なし。静寂もなき無音。汝の敵を愛せるか」

「いや。する気もない」

「何ゆえに」

「それに就いて、あたしの答は既に畢おわっている。神が全網羅し、全肯定なるゆえ、我は敵を愛さず」

魔王は口角を裂いて、陰謀を孕む陰深き悪魔の笑いを笑った。濛々たる噴煙のごとき、もの凄い瘴気が上がる。哄笑は氾濫する太陽のように。

「逝け、長く居るな、最初は東を統治するであろう。その時は、亜沙羅偉を呼べ、ついで竟には宇宙世界を統治するであろう。その際は、彝啊咽厨御を招くがよい。」

かくして、一切世界は統治されよう。善き哉、悪しき哉、究竟の静謐、身も裂き砕き天翔け躍れよ」

太陽の剣が激しく燦めく。刃に睿らかに繁縷なる真究竟真実義の真言聖咒が彫られている。原蛇の円環を囲むような円環で。

『鉄』の位階を褒授し、聖の聖なる剣となる。

さて、そのアヌグイの山は包囲され、神聖シルヴィエ軍は屍の軍団を先頭に急斜面をあとと言う間に登った。既に、一般住民は洞窟の入り口を閉ざして深く潜伏していたため、イキリヤヌートは抵抗もなく、陥落した。

「行くぞ、神殿の奥へ」

「心して逝け。いりやぬ神がいるのだから」

暗視用スコープをつけて、手榴弾や短銃、マシンガンなどの武器の他にも、通信装置やサバイバル用品、携帯食など、フル装備した兵士たちは進む。

神殿内に御社を見つけ、そこに入る時は、屍の軍団すら震えた。それはどうにもならない、根源的な畏怖であった。

「これが御社、この中に塙と祠が在るはず……」

昏い。わからない。どこに、何があるか。人が逃げてしまったので、灯もついていないのだ。携帯用照明具を点ず。進む。塙があった。その奥の祠。

「ここか」

「そのようです」

「さあ、行くぞ」

「はい、少尉。何か感じます。何か、居ます、この奥に」

喉がぐくりと動いた。塙の切れ目、入り口だ。入った。

双眸が静かに碧く、光っている。

「あ、あゝっ、い、います」

「う、ううぬ」

女神が半跏坐で石の上に坐っている。

いりやぬ神は言った。

「朕はいりやぬ神。世界の支配権を持つ。ここを動かず。皇帝は参集せよ、絶対神聖皇帝も例外ではない」

帝国の将軍であっても、神の言葉には従わざるを得ない。急ぎ帰国して復命すると、絶対神聖皇帝イータは神を畏れずに憤り、

「朕に来いと言ったか」

だが、その日、神聖シルヴィエ帝国の首都ヒムロの曇天に怒りの声が雷鳴の数十倍の音量で轟き、石畳が揺れて浮き、ガラスが割れた。

「朕という一人称を使えるは、今日より神のみと知れ」

だが、名称の件も、参集の件も従わず、イータは首都から動かなかった。

帝国の民は皆大いに不安と怖れを覚えたが、その予感当たる。

「うわあ、何だ、これは！」

凄まじい大音響とともに地面が激しく上下した。

「いったい、何が起こったのだ」

すぐにわかった。

三重の城壁からわずか十キロメートルの地点の大天災、大災厄である。

超巨大な陥没が起こっていた。その規模たるや凄まじいもので、直径五十キロメートルの円が深さ五キロメートルにも達する垂直の絶壁をなす、円筒型に陥没していた。

「ヒムロもこのようになる」

人々は口々に叫んだ。

「もうわかった。已むを得まい」

蒼褪めた神聖皇帝は額を震える手で押さえ、行幸を命じる。とは言え、それから実際に、大行列がアヌグイ山に向かって動くまでには、二か月近くが経った。

イシュタルーナたちは気がつくと、『唐突』に元の場所、そして、元の時間にいた。不思議に思いながらも、それが自然なことと感じられている。大審問官の冥府へと降りなかった多くの者たちは、あ然として恥じることさえも忘れていたが、イシュタルーナの言葉に自らを叱咤し、奮い立たせた。

「おまえたちが飛び降りずに、ここに残っていたことは必要なことであつた。あたしもおまえたちが飛び降りることを望んでいなかった。

しかし、この場に残ったことが思慮の末ではないことは、おのれがよく知っているであろう。勇気がなくて、降ることができなかったことは、おまえたちの意思に関わらず、魂魄に自動的に後悔として刻まれるであろう。

すなわち、未来に向けて改善する努力を怠る莫れ。心の苦しみを超えるには、それしかない」

地下洞の行軍を再開する。道は困難を極めた。

保存食は尽きる。飲み水が得られなく、渇きに苦しむ時もあった。地下水脈は常に轟音を上げていたが、場所によっては危険過ぎて、水を汲むことなど、到底できない場所も多々あつたのである。

イシュタルーナが思料する傍で、ラフポワが獣脂に小さな火を点す。

イヴァンは朝の祈りを捧げていた。ファルコが起きるや否や、大あくび。まるで獅子だ。

ジヴィーノも眼を覚まし、快活に咆哮する。

「あゝ、今日も腹ペコだあ」

その音声に起こされ、寝袋からむくりと起き上がりながら、

「寝た気がしないな」

ゾーイが眼を擦る。チエフもぼやく。

「そもそも、いつが夜だか、昼だかわかりません」

ラフポワが陽気に、

「いつ襲われるかもわからないしね。どんな敵がいるのか、まったくの未知だ」

ネプチュルスが今日もぼやく。

「有難いお言葉だ」

「闇だから、仕方ないな。いくら太陽の剣が照らそうとも」

ロネがそう言うと、今日もネプチュルスは肩をすくめ、

「わかってますよ」

誰もが支度を始めた。朝飯もない。

ファルコが励ましにならぬ励ましを言う。

「じゃ、今日も行くか。今日なのか、昨日なのかよくわからないが」

氣力を振り絞った。だが、どこまで来たのか、よくわからない、ただ、間もなくのはずだ、とイシュタルーナは断言する。皆、巫女騎士を信じ、無言の笑みで励まし合った。

「おい、あれは」

何かが見える。

「あゝ、何となく灯に見えないか」

「いや、灯だ」

光明なき艱難辛苦の末であった。遂に、アヌグイの山の真下に着き、深き所に隠れていた民衆らと邂逅する。

「あゝ、イシュタルーナ様、ご無事でしたか、あゝ、嬉しや、もはやこれ以上の希いも、望みなし」

古老たちは噎び泣いた。

「再会を歓び合う暇はない、さあ、行くぞ、剣を抜くのだ。槍を持て。弓を出だせ。殺戮のまなざしを持て」

「まあ、少しお休みください。」

絶対神聖皇帝もようやく半島に着岸するという頃合いです」

「なぜ、わかるのか」

「この地下洞窟は途轍もなく広く、無数に分岐し、複雑で、地上へのさまざまな小さな出口を持っております。」

占領軍には気がつかれずに、身体の利く者たちを大いに使って、世俗に漏れ伝わる情報の聴取に努め、幾許かの貴重な情報を収集いたしました」

イシュタルーナは感心した。

「わかった。その確証があれば、休もうぞ。」

休息があつてこそ甦るのだ。すべては遷移し、新陳代謝する。移り変わり揺れ動く、縁結びては、相反発し、細かく散って別れ離れる。

諸行の定め」

ラフポワが手足を伸ばしてどんと仰向けになる。

「あーあ、やっと休んだ気がする」

ファルコやジョン・スミスも嘆息とともにしゃがむ。皆同様であつた。ネプチュルスのぼやきも頂点だったが、すぐに眠る。

ただ、ロネとユリアスがジツと地図を眺め、何かを話し合っていた。

軍団を率いてイシュクンディナヴィア半島に着いたとき、神聖シルヴィエ帝国の絶対神聖皇帝イータは侍従長からの報告を聴いて驚く。

「何と、オウリユー十三世とその大行列が来ていると。大元汎都（ダーゲンヴァント）の汎界天宇太陽太陰霽月星辰宮殿から。」

なぜ、今日まで、その情報が入らなかった」

「情報網が惑わされていました。幻惑されていたのです。在りもしない事実を見て。恐らくは、いぬりやぬ神のお力かと」

賢者セトが恐る恐る答えた。

「何としたことだ、大丈夫なのか、今回の訪問は」

しかし、ここまで来ては、もはや。

連絡を取り合い、互いに異がないことを確認し合うと、二人の皇帝は初めて相見えた。

「こんな形で会おうとな」

「本来、我々が直截会うなどあり得ない」

ともに、自分の精鋭兵に囲まれ、門をくぐる。

イキリヤヌートは蛻の殻であった。誰もいない。当然、迎えもない。

「予想はしていたが」

「これでは、どうしてよいのか、わからないぞ」

二人の皇帝が来たというのに、異常な状態であった。静寂、この不気味な異様さにイラつく。

シルヴィエは武装した数万の戦闘員を伴っていた。自動装填連射銃やバズーカ砲や野戦砲などを装備した鋼鐵の軍隊を。その上にも屍の軍団が絶対神聖皇帝を警護している。

世界最高の戦士たちだ。

大華嚴龍國も数千の兵を率いていた。

だが、イータもオウリユーも震えていた。

「ここまで来て今さらだが、拒めば殺されるであろうな」

オウリユーは離れて立つイータに聞こえないよう、小声で宦官に話す。

「は、間違いない」

イータも恥も外聞もなく、歩くのをやめた。

「どのような衛兵が余を（朕とは言わなくなっていた）護ろうとも、何の安心も得られない。まるで、丸腰で、いや、裸身で敵軍の槍の林の中を歩く気持ちぞ」

こうなれば、儀礼もへつたくれもない。先遣隊を先に神殿に入れる。十分調査させてから、絶対神聖皇帝も警護に囲まれて入った。

御社の前に立つ。その時、音が。

神殿の奥、御社を越えたさらなる奥の場所、洞窟の方から聞こえた。巨大な神殿は洞窟の場所も蔽っているのだ。イータは何かを予感した。

「何事か、すぐに見てまいれ。余は一時、ここを離れるぞ」
しかし。

「いや、待て、絶対神聖皇帝イータよ」

呼ばれる声は女のものであった。

「おゝ、まさか、その声、おまえは。あゝ、神よ、神よ、救い給え」

聖句の刺青を黄金に耀かすイシュタルーナが洞窟から、聖なる太陽の剣を掲げてあらわれる。

「本当に貴様がイシュタルーナか、あり得ない、なぜだ、あゝ、そんな莫迦な、神が我らを謀られたのか」

剣を鞘に収める。

「会見が必要だった。殺しに来たのではない。大いなる和を求む。あたしは心に背かない。魂が欲すことを欲す。会うべきであると思った。会わねばわからぬ」

皇帝たちは黙った。

イシュタルーナは再び剣を抜く。

皆がぎよつとした。

叫ぶ、

「大義を観ぜよ。見ずしては、大義を知らず。されば、大義を知らせん。これを見よ。実存する大義は、ここに」

原蛇を囲む繁縷なる真究竟真実義の真言聖咒の円環を持つ太陽の剣の光燦々とともに、いりりやぬ神の双眸も純金に燃えた。

イシュタルーナの聖句の刺青が曙光を反射する湖のように燦めき移う。彼女は生きている経典のようであった。

イータ皇帝とオウリユー十三世は魂が抜けたかのようにになる。あまりの清らかさ、あまりの美しさに陶醉した。生けとし生けるものの求めるものすべてがある。万象の欣求するものすべてがあった。

いりりやぬ神が音声する、

「神が天降り来たる今や、王は要らず。よって、王制を廃す。王権を返上せよ、母国へ帰って、遅滞なく、それを行え。急急如律令（速やかに、法令のごとくせよ）」

途方もない要求であったが、誰も逆らえない。

「帰還するしかない」

オウリユーは苦渋の表情であった。

イータも同じだ。

「余がいかに不可侵の絶対神聖皇帝とは言え、いや、それなればこそ、余は殺されるやもしれぬぞよ」

二人とも帰国の途に就く。蕭然たる雨が降っていた。

帰国後、当然のごとくに、いずれの国も騒然とし、元々国内にいた反対勢力は勢いを得た。イータは毒殺され、オウリユーは幽閉された。人々は革命を叫ぶ。

絶対神聖皇帝の断末魔の叫びは、絶望と悲嘆に牽き裂かれていた。

「あゝ、いりやぬ神様」

この悲痛な叫びにも、イシュクンディナヴィア半島に坐す、いりやぬ神は眉一つ動かさない。その声は、いりやぬ神の耳には聞こえていたにもかかわらず。

その後の動きは、神聖シルヴィエ帝国と、大華嚴龍國とは、大いに異なった。

神聖帝国に於いては、イータ亡き後、大枢機卿の互選で神聖皇帝シニク・ナルシニヒリシズムが選ばれる。シニクは妄想的な、壮大悲愴抒情的性格であった。

彼の唱える主義主張はこうであった。

物的客観超越他者性科学主義は構造や原因や仕組み・絡繰りを説くが、意味や理由を説かない。完璧な科学とは言えない。それを知るためには、知では不足であった。もはや知では限界である。心で知り、情で知り、体で知り、魂魄で会得しようとしなければ、知ることができない。完璧なる科学を説くのが、魂魄体情心知の六象主義。それこそを現実主義、実践主義とした。

その思想的な影響は西の帝国の影響が大きい。

シニクは西大陸のヴォード共和国の大学に留学していた時期があった。彼の思想はその時代に培われた。

ヴォード共和国の陰謀である。権謀術策に関しては最も発展していた彼の国も又、他にはない国家体制を取っていた。

大統領と皇帝がいる。

全国選挙で選ばれた大統領はマイケル・ハンマー。タフな実業家で、内政を行う。

二百年前から続く王朝の皇帝ジョニー・コークは外交を主として行う。

また、選挙で選ばれる有識者から成る会議で選ばれた顧問がいて、大きな発言権を持つ。

現在は哲学者コートニー・トランプス。

そして、大統領が指名する宰相がビリー・ブロンクス。

顧問が指名する補佐が軍出身の兵法学者のアーネスト・ヘヴィ。

マイケルは早くからシニクの才能に眼を留め、平凡な司教の子であった彼を特別な待遇で留学生として迎え、自然に思想を植えた。マイケル自身は一切表に出ずに。

ヴォードはシルヴィエを最大の脅威とし、南大陸マールロ帝国の勢力皇帝羅汜^{らはん}と結んでいった。

ちなみに、マールロのラハン（羅范）は身の丈四百四十センチメートルである。腕力の強

さだけで十億の民を支配する世界最強の大豪傑であった。彼の歴史は七歳の頃から始まる。一族の貧困層であったが、族長と一对一の勝負で撲殺し、民族のしきたりによって族長となつてから、次々と勝負をした。誰もが七歳の少年など、ナメている。通常は、めつたに行われない勝負であったが、よもや、負けはあるまいという思い込みと、ラハンの激烈な罵りによって、「こどもと思つて、容赦していたが、もう許せん」というセリフを吐かせることによって、戦いに挑ませた。すべて圧倒的な勝利で終わる。たちまち、五部族をまとめた。

その段階で、彼と勝負する族長はいなくなった。

だが、既に遅し。大勢力となつていたラハンは毎日、転戦し、世界一広大なる砂漠を縦横に走る騎馬の達人集団である数億の民を支配し、千の族を隷属させ、超大国の仲間入りを果たした。わずか十年である。弱冠十八であった。

マイケル・ハンマーはこの南大陸の超大国と盟約を結ぶ。ヴォードが何年も前から画策していたシルヴィエ包囲網の一環であった。

しかし、いりやぬ神の脅威が明らかになると、仮想敵をシルヴィエからいりやぬ国へと、戦略を変える。だが、神に敵対することはできない。武闘ではなく、アカデミアへの提訴という道を選んだ。

アカデミアとは、この世界に於ける最高にして至高の聖域、聖なる学園都市で、多くの学生たちが真究竟の真実義を研究している場所だ。その学長は精神世界に於ける絶大な権威を持ち、皇帝たちの権威とは別格の存在として、或る意味世界を制している。

イシユタルーナは嘲笑った。

「よほど、正義に自信があるらしい。

あのアカデミアが権力や金銭や外交手段などで動くと思うか」

そして、聖都イキリヤヌートの全機能を完全に回復させる。副聖都、首都などを次々甦らせ、いりやぬ国は復活した。

国内が安定すると、

「今こそ魔王の、地獄の底からの進言に従おうぞ」

数千の軍団を組み、海を涉つて、太陽の剣を振り翳し、偉大な神威によって混乱している大華嚴龍國を平伏させ、善政を布いて統治した。

民は歓呼する。金銀財貨は再分配された。貧困は消失する。生活保護の認定事務は必要がなかった。神がすべてを知るから。支給は早急で、不正受給者は間髪を入れずに処刑さ

れる。王侯貴族や資産家の不正も同様であった。上流階級や富裕層は意気消沈した。

さらに、大華嚴の周辺にある、他の国々と同盟を結ぶ。

東大陸において、大華嚴龍國に次ぐ第二の帝国であるイン・イン・インデイスは同盟締結に賛否両論が起こり、皇帝は大いに逡巡したが、隣国をイシユタルーナらが統治しなければ、大華嚴龍國內に混乱が生じ、流民や群盜の類が国境を越え、その対策に莫大な経費が掛かることを慮り、渋々同盟を一時結ぶ。

東大陸は竟に統一された。むろん、小規模な反乱は幾度も続いた。特に中央の情報がいき渡らない地方都市の勢力が無謀に暴れる。シルヴィエの侵攻や、イキリヤヌート陥落以来、いりやぬ神は必ずしも味方ではなかった。もし、神がその気なら、反乱など起こりようはずもない。

だが、イシユタルーナのみならず、ラフポワやロネやファルコなども、そういうことに矛盾や違和を感じることが少なくなっていた。

ファルコは各地で起こっている反乱について、淡々と主張した。

「討伐軍を編成しよう。人員も財源も十分だろう。早速、着手する。動き出せば、大して時間もかからない。確実に勝てる」

だが、ロネはそれを蔑み、

「いつからおまえは狂信者や独裁者や専制君主のようになったのだ。反乱の動機に対処すべきであろう。政治的な陰謀から煽動者もいるであろうが、民衆の潜在的な欲求が隠されているかもしれない。」

皇帝など、もううんざりだ」

だが、イシユタルーナはそれを伝え聞き、敢えて巫女皇帝となった。神に跪いた後、神殿に祀っていた榊で編んだ冠を自らの頭に被り、

「あたしが直截に逝く」

ラフポワなど数名の供を連れ、激動する現地へと龍馬を駆ける。

殉教者にも見えたが、実際には、その神々しさに誰もが跪いた。涙とともに帰順し、飲んで首を垂れる。そんな場面の連続であった。

「善き哉、人よ、己の真の心に従え」

最初に帰順した者たちは、**石**とし、次を**木**とした。そして、東大陸のみならず、全世界に発信した。

「世界に告げる。今、帰順すれば、土の兵たることを保証しよう」

東大陸で最後まで抵抗した勢力は、『土』になれず、『水』とされた。

「だが、人は水なしには生きられない」

この大幅な組織拡大に伴い、初期の頃からの者たちに対しては、大幅な格上げが行われた。尤も、ラフポワは神将、ロネは神の臣、ファルコは神兵軍団長と当初から、特別な高位にあったので変わらぬ。だが、黄金の聖者たちは大枢機卿となり、銀は枢機卿、青銅は王、銅が大將軍、鉄が將軍、石は聖闘士、木は将、土が騎士、水が兵とされた。

聖化・聖別と、厳粛な式典、神々しき祝賀の儀が行われる。

真幸くあれと祈禱した後は宴となった。

「飲めよ、喰らえ、歌え、舞うがよいぞ」

言祝ぐ。

翌朝、イシユタルーナは高々と宣言した。

「遂に時は来た。亜沙羅偉を畏れ畏み招く」

巫女騎士の大号令で、大動員が行われ、神業のごとく速やかに元汎都はんかいてんの汎界天宇太陽太陰霽月星辰宮殿は改造される。世界最大の神殿となった。イシユクンデйнаヴィア半島にいるいりやぬ神の真咒が大空に鳴り響き渡る。

「見よ、いりやぬ神が真咒を誦する。奇蹟が起こる。亜沙羅偉神族の長、大宇宙の主宰者たる亜沙羅偉神が天降り給うぞ」

天空から、見たこともない巨大な光の塊が降り、広大無辺なる全宇宙を光燦によって塗り潰すように蔽った。聖なる歌声が響く。

「朕が幸福に統治する」

亜沙羅偉は全宇宙に轟く声で宣言した。誰もがそれを聞いた。石や水さえもそれを聞いた。山も海も空も星も月も太陽も雲も湖も樹木もそれに従う。時や空間ですら逆らわない。逆らわせない。

いわんや人をや。

この情勢にあつて、三大帝国も黙らざるを得ない。

さらに、追い風となったのは、アカデミアからの採決であつた。

いりやぬ国への賛美と称賛。

二十四枚の白い鷺の翼を持つ、螺鈿のような黄金の龍神に乗って、アカデミアの学長ユリイカは来た。単身である。

小柄な少女であった。わずか十四歳（イシュタルーナと同じ）である。彼女が学長になった理由は、智慧もなく学もなく、学長に相応しくない、ただの女の子だからだ。だが、そんな子はたくさんいる。だから、彼女なのである。

とは言え、紆余曲折はあった。それは『ユリイカ青龍エクスタシス』という数巻の書にまとめられていたが、今では喪われてしまった。

「おめでとう。あなたたちの勝ちよ」

「お会いできて光栄です、学長」

人はイシュタルーナが初めて顔を赤らめ、緊張するのを見た。

ユリイカは悪戯そうなくくりした双眸で、おかしげに見ている。だが、どこことなく憂愁と暗鬱とが顔を蒼く翳していた。さまざまな死と矛盾とを見て来ているからだ。

「忘れないでね、平安と健やかさが永劫であるように、希うことを。小さき者、弱く儚き者たちのことを」

「承知しています。それがあたしの スニャター 空の大義です」

「良かった。あなたは友だちね」

「そうです」

イシュタルーナは頬を赤らめた。

マイケル・ハンマーは地団駄踏むも、もはや手段はない。自暴自棄に走り、世界を巻き込んで破滅しようという勝手な思いから、自滅の闘いを決意した。思いを同じくするシルヴィエと連合し、マールを巻き込んで、西北南大陸の超大国で連合し、史上空前の大世界大戦を始めた。

歴史ある家柄に生まれたヴォードの皇帝ジョニー・コークは無謀な戦いに消極的ではあったが、哲学者コートニー・トランプスの理論を吹聴され、神の嘉し血統、名誉ある市の栄光だの歴史的使命だのという言葉に身を震わせて感涙し、その思想的な影響を受け、まんまと乗ってしまった。

巨大な火焰の流れが怒涛のように逆巻き熾る。

その気運は燎原の火のごとく広がり、反いりやぬ国で全世界をまとめていった。

すなわち、直轄する東大陸に於いてすらも、マイケル・ハンマーと内応し、大華嚴龍國

の皇族たちを中心に陰謀が蔓延り、大反乱が起こったのである。

いりやぬ国の見た眼は四面楚歌の状態とであった。

巫女皇帝は突如、玉座に坐す。そして、宣言した。

「ヒムロ（非无呂）へ逝く」と。

彼女の常軌を逸した行動には驚き慣れているとはいえ、やはり驚かされてしまうのである。

「な、何と、狂気の沙汰です。いくら何でも、今度ばかりは」

「世界の全戦力が集結しているというのに」

「どのように秘かに忍び込もうとも……」

イシュタルーナは蔑みの眼で睥睨する。

「誰がこそこそ隠れて逝くと言ったか。」

我らは、いりやぬ神の兵であり、亜沙羅偉神の兵である。公然と、堂々と、果敢に、真向正面から、大々正論で、大々正攻法にて逝く」

「またか」

さすがのファルコも呆れたが、ロネは、

「今まで、間違いはなかった。大丈夫だ、できるさ」

「不可能にしか思えません。それができるくらいなら、一枚の枯葉に乗って、荒れ狂う嵐の大洋四千キロメートルを渡り切る方がよほど簡単に思えますよ」

ジョン・スミスは嘆いた。

ラフポワは旅支度を始めていた。

「グダグダ言っても仕方ないね。言葉なんか空気みたいなものさ。大事だけど、ありふれている。何かにしようとしても、今さら何にもならない。無駄だよ」

イシュタルーナは数十名を連れて大元汎都を出た。列は洞窟の時と同じ。悲愴を帯び、死に逝く者たち、又は葬列に見えた。勇ましくもあるが、状況を慮れば、殉教者にしか見えない。

イシュタルーナ、ラフポワ。

ロネ、ファルコ、ジョン・スミス。

ユリアス、イヴァン、ユーグル、リュウ。

ゾーイ、チエフ、アーキ、ガルニエ。

レオヴィンチ、ミハアンジェロ、ネプチュルス。

「何で、またもや俺まで」

大海商がぼやく。

しかし、事態はまったく予想外に展開した。

何が起こったか、と言うより、何も起こらなかったのである。

強烈な光線を発してた靡かせ、燦々と燦めき神々しく進む彼らを前に、東大陸の怒涛の反乱軍・暴れ狂う叛逆者たちは人間の根源から湧き上がる畏れのため、手を出すことすら、指一本動かすことさえできなかった。神々しい、というよりは神性を帯び、神のごとくに見えていた。到底、人間が触れてよい列とは思えなかった。

ただ、震え、又は呆然と見送るのみである。

巫女騎士の懷には、亜沙羅偉神の真咒を集中して濃く凝らせて聖なる石としたものがあつた。鎧や瓔珞で荘嚴された騎馬も、光に包まれている。武具や鎧は赫奕たる太陽のようであつた。陸は尽く。

「いぎ、逝かん」

潮は蒼く怒号していた。土豪トリトニスが簡素で頑丈な船を献上する。帆は潮風を孕み、海を涉った。荒れても海は青く、雲の速い空も青い。

イシュタルーナは船中にて世界統一憲法の草稿を仕上げた。

『一、真究竟真実義は人の^{おも}以ふに非ず。^{カムいあれずを}神彝啊咽厨御にしあらば、^{スニャター}零と心得よ。

一、人、堂々果敢すべし。人、義しきと以ふを爲す善し。

一、眞の現實主義とし、現實丈を生きよ。』

船中三策だ。

書き上げてイシュタルーナがこれを素焼きの壺に入れ、厳樞の聖櫃にしまうと、船すらも紫摩黄金に輝いた。玉虫の甲の羽のような、或いは螺鈿のような霓を、春の霞のようにはらはらと儚げに絡ませている。かつ、燦然たる黄金色の雲に包まれていた。航跡さえも、燃えるように焼く。

ユリアスが提議した。

「船中三策は基本基礎です。これに法や令や条例、規則や附則、要項などをつけなければ運用できません。又は解釈のための義疏を」

ユリアス、イヴァン、ロネ、ファルコを中心とするプロジェクト・チームができた。

「取り急ぎ義疏を」

イヴァンはそう言つて、ユリアスとともに草稿を起こし、

「かくのごとく解す。零^{スニャター}は『唐突』・『全網羅』・『龍肯』ともいふ。されば、現實爾焉^{げんじつのみ}若^しか^{ただこれひたすら}在^{おも}らじ。唯^{ただ}惟^{ただ}只^{ただ}管^{ただ}、人堂々果敢すべし、人義しきと以^{おも}ふ爲^{おも}す善しといふ」云々。
法令条例規則要綱は順次定む。

かくも天神皇帝のごとき光燦々たれば、人類根源の畏怖生ず。

北大陸東南部の沖に、待ち構えていた神聖シルヴィエ帝国の五千の大艦隊は微動すらもできなかった。灰色の荒海に帆を孕ませ、イシュタルーナの船は悠々進む。

「見えた、北大陸だ」

イシュタルーナの双眸が燦々と煌めいた。

北大陸へ上陸、聖都ヒムロ（非无呂）へ向かう。ここでも、ヴォード共和国、神聖シルヴィエ帝国、マールロ帝国の三大超大国連合軍の、重装機甲兵部隊数千万は畏れから、何もできなかった。

イシュタルーナは無人の原を逝くように、厳かに肅々と、一万数千キロメートルを王侯の高級遊女シャーリー、篤志の財産家ヴァスバンドー、古来の名家ヴィマラキールティから献上された龍馬の群れで進む。雪を煙と蹴散らし、無抵抗の町や街や都市をいくつもいくつも通り抜けた。

「奇跡だ」

ゾーイが敬虔の念を込め、つぶやく。誰もが瞳孔を畏敬で震わせ、黙したままうなずいた。声も出せない。

北極圏に入った。

ブリザードの永久凍土を、太陽の剣を挙げ、天の黄金の光の雲の群れのように渉る。いつしか、誰も気がつかぬ間に、太陽の剣は銅^銅の位階に到達した。

シルヴィエ軍の將軍たちは、ヴォードやマールロの將軍とともに、巨大なモニターに映し出されるこの姿をただ恍惚として見守るのみ。

聖なる大都市ヒムロに着いた。

信じ難い高さ^{高さ}と厚さの厳めしい大なる城壁と、鋼鐵の剛門が聳える。

何人も破ることができない、城壁と門であった。

しかし、いかに巨大であろうとも、宇宙や世界に比せば、砂粒ですらない。

小さな鳥の巣のように、自然の一部でしかない。

第一の城壁の高さは百メートル、厚さも百メートルであった。扉の高さは八十メートル、厚さは三十メートル（鋼鐵製。機械式でスライドする）である。

第二の城壁の高さは二百メートルである。鋼鐵の門の高さも厚さも、第一城壁の倍である。

第三の城壁は高さ厚さ扉の高さ厚さも、第一城壁の三倍。

城壁の間隔は百メートル。

三つの門を抜けるだけでも、八百メートルを歩かなければならない。

すべての門扉は音もなく、開く。

「どういふことだ」

「罨か」

だが、この段階に至っては、誰もさほど訝しくは思っていない。一応の用心くらい。だが、それすらも蔑み、イシュタルーナは一蹴、

「逝くぞ」

いりやぬ国の聖なる闘士たちは再び勇気を奮い起こし、歩を前へ出した。

かくして三つの壁の奥の奥なる奥に堅守秘匿されたる奥義なる聖都へと秘儀参入果たす。その荘厳たる都市、巨魁なる建築、神々しきこと筆舌に尽くし難き偉容。

大行列道路に入る。幅が一キロメートルを超える巨大大路であった。真っ直ぐに進む。門を抜けた瞬間から、眼の前に聳えるかのように見えていた。未だ五十キロメートルほど先に在るのに。

百キロメートル四方の大都市の中央に建つ、高さ二千一百メートルの尖塔である。槍のようであった。四方を控え壁のように、七百メートルの尖塔が支えている。

また、東西南北に列柱廊が一キロメートルずつ延び、その行き着く先にも高さ三百メートルの尖塔が建っていた。

イシュタルーナは急がず、歩む。

群衆は黙っていた。街は死んだように静まっている。ただ、吹雪のみであった。

シニクも齒噛みして壮麗な列に囲まれた壇上で凝視している。

イシュタルーナは天を超えるかに感じられる、荘厳な建築を見上げた。聖イキの座のある大聖堂であり、聖大神殿（彝啊咽厨御神殿）でもあり、絶対神聖皇帝の宮殿でもある天突の巨大建築のファサードから入った。

聖者イキの教えに始まった聖教（シルヴィエ聖教）は何と歪んでしまっていることだろうか。原初を精神を喪ってあまりに久しい。

イシュタルーナは多くの宗教に見られるこの現象を深く悲しんだ。いや、それは、どの

ような「業界」でも同じことだ。たとえば、政治的イデオロギーもだ。民主主義は本当に民主主義か。議会は民意の反映か。

共産主義はあからさまに滑稽だ。私有財産の放棄と搾取のない分配は、いつの間にか皇帝の専制以上の独裁と、どこよりも官僚的・形式主義的な欺瞞的な社会を生み出してしまった。この超絶の矛盾は何だ。

しかし、だからどうしたらよいかという代案はなかった。代案なき反論は戯論である。常々そう思っているだけに忸怩たるものがあつた。

どんなことをしても、結局は私利私欲に飲み込まれてしまう。「うまいことやる」連中がいつの時代もいて、調子のよいことを言つては、まるで女を籠絡する男のようにあの手の手で結局、自分の私利私欲に取り込んでしまう。

あゝ、私利私欲よ、汝、ウイルスのごとく短い期間で次々と変化を繰り返し、生命を責め攻めて来たるかな、汝はあまりにも長きに亘って勝者であり、統治者であつた。ウイルスのごとき存在者よ、新陳代謝しない増殖者よ、生命の敵よ、我ら全員が一斉に自らを粛しない限りは、汝を封じ込めること叶わじ。

虚しきかな、儚きかな、わずかでもウイルスが残れば、人の心が緩む限りに於いて、いつでも蔓延し、パンデミックを起こす。

ただ、神だけが解決できる。神にしか解決できない。

だが、神はしなかった。理由はわからない。わからなくて、当然かもしれない。理由など、神が人間に与え給うた戯言に過ぎない。いや、わからない。ただ、そうとしか見えなただけだ。

だが、幸いなる哉、今、季節は変わった。変わろうとしている。

イシュタルーナは足を止めた。

中央部だ。真咒の石を置いた。聖咒を唱える。大地から天に向かって差し込むように、大理石の床から光が上に向かって差し込む。イシュタルーナを聖化する。黄金に体が染まった。聖句の刺青が青白く燃える。金砂の霧が聖咒を光らせながら、帯のように身体を廻った。

喻えすらもない。複雑精緻、螺鈿のような、霓のような繊細微妙、黄金の光の複雑な燦めき、途轍もなく眩かった。光線が全衆の網膜を刺し射抜く。光の射線が金属のようであった。

「おゝ、あれは」

民衆が天を指す。

猛吹雪の空は裂けた。

崇高なる神聖光が天降り来る。眩い五色の光燦の粒を霧のようにまとう紫麻黄金の雲が現れた。大いなる神が莊嚴に屹立し、聳えている。数え切れぬ飛天や菩提薩埵を従えていた。

真究竟神たる啊素羅神族の長、天帝神皇神舞斗啊多え烏乎甕が天降りて光臨す。眩過ぎた。真究竟真実義の真聖咒を誦す。真究竟真実義の真聖咒は唐突、それゆえに全網羅で龍肯それそのものを具体顕現していた。

時間が止まる。全宇宙全世界が刹那死す。陰が極まって、陽へと翻る。森羅万象を火炎として熾し、すべての素粒子を光となす一瞬、誰もが、いや、一切が浄化され、清められた。いみじくも宣り給う。

「朕が直截統治する」

その聖絶なる愴嚴の絶大、空前絶後、悲愴なまでの崇高、全宇宙全世界の果てを遙かに凌駕超越し、人には、もはや、抗いの余地なし。絶対の正義、真空のごとく純粹清浄であった。無余依涅槃を究竟する。

戦争は終わった。一人も死なず。

イシュタルーナの思惑はまたも当たった。

世界の統一である。

「永遠の平和が実現した」

太陽の剣は「青銅」となる。その神威はすべての大陸と海とに漲った。美しさも細工の巧みも、人工の領域を遙かに超える。

人の位階も変わった。

イシュタルーナは世俗を遙かに超えて巫女真人となり、神将ラフポワは聖天帝皇として、北大陸全土を統治する、世界最大の権力者となった。

「嫌だよ、イシュタルーナ。僕にはできない。できる訳がないよ。

お願いだよ、一緒にアヌグイに還らせておくれ」

彼はモンタの村に帰りたいとは言わなかった。

「偉大な者は鳩の足音で来ると、かつての賢者が言った。おまえはまさにそれだ、ラフポワ。なみの権力者なら、帝国も支配できる。だが、超大国を含む大陸全土を統治できるのは、おまえしかない」

神臣ロネも聖天帝皇として、統治の難しい西大陸すべてを。

神兵軍団長ファルコは聖天帝皇として南大陸。

黄金の聖者五人は聖天帝として東大陸を五聖天帝統治する。

銀の二十五人はラフポワの配下として、ラフポワを補佐し、かつ皇帝として北大陸のシルヴィエ以外の諸国（西南部の諸国）を五地域に分けて帝国統治した。

さて、神彝啊咽厨御の降臨後に、いりやぬ国に属した者たちのうち、世界各国の庶民は「粒」の位階となり、中流は「素」の位階へ、王侯貴族や豪族、大商人らは「空」となる。

これに伴い、「青銅」の位階が大枢機卿。「銅」が枢機卿。「鉄」は王。「石」は大將軍。「木」が將軍。「土」が聖闘士。「水」は將。「粒」は騎士。「素」が兵で、「空」が奴隸であった。

世界で最も人口が多いのが騎士階級、「粒」の位階ということになる。彼らのほとんどは勤勉な半農半士として生きた。

イシユタルーナが高らかに言う、

「ここに世界統一憲法を發布する。

もはや、国の名称は要らない。異他はない。されば、違逆も異叛もない。諍いは絶滅した。

平和よ。あゝ、身体生命が損なわれぬこと、それこそが尊い、空想ではない、観念でも概念でもない、現実の、实在の愛である。それこそが实在の肯定である。あゝ、生命を謳歌せよ。今は。

潮のように左右上下縦横に無辺なる静寂、その横溢、もはや死すとも厭わぬあふれる充足、葛藤のない永劫の心の安らぎ、永遠の勝利のように未来が疑いようもなく、絶対永久に、永遠不変に健やかなまま無事であり続けられること、心も体も平安であること。それらは神聖である。

生命を謳え、大いに祝え、偉大なる祭典の日ぞ、大いなる、龍のごとき肯定、遺漏なき全網羅。完璧な、完全なる完成に至る。

今、一切衆生は一切衆生の真の夢に、真の希いに達す。真の未来に。何も望まない。もはや、生存に戻ることはない」

天の皇帝神彝啊咽厨御の降り給うたヒムロを世界の聖首都と定めた。

「イイエイ、イエエイサー」

歓呼。

統治は速やかに移行された。神が直轄するのである。急々に律令のごとくに行われないことなどあり得なかった。世界統一の憲法に遵う各大陸の君主による封建的な中央集権体制はすぐに整う。

世界に点在する大小の統治者が一堂に会し、祝賀を上げて世界の人々、一切万象万物が共生であることを確認する儀が計画された。世界各国に招待状が送られる。北極圏の都市に一億の人間が来て、式典を祝う準備が進められるのであった。

レターヘッドに彝啊咽厨御の聖紋が浮き上がる手紙が世界中を舞う。

アカデミアも招かれていた。

「竟にやったわね」

ユリイカが独り言ちのように言祝ぐ。窓際に立ち、ヒムロの方角を眺めた。遙か数万キロメートルの彼方を。

ロネ・ストリントベリイは聖天帝皇となっても、議会議堂のある大宮殿の広大な敷地内に山を築き、そこに粗末で小さな山小屋を建てて、鉋を研ぎ、バーボンを舐め、パイプを吸っていた。とは言え、今や式典準備を総括する立場である。情報を収集し、全世界へ命令をここから発していた。紫煙の中で、すべてを掌握し、思惟している。

「そろそろ逝くか」

式典の十日前であった。突如、翼ある龍に跨る。その日のうちに西大陸から北大陸へ涉った。そして、八面六臂の働きをする。

彼のように、龍に乗れる者はよい。この世界（イデア・アース）を一周すると、約六万九千キロメートル。遠い者は龍馬を公費から手当てされるが、中途半端に近いと、そういう手当もない。二週間にも及ぶ長旅をしなければならない場合もあった。

それでも招待された者たちは全員が前の日までに集結した。皆、俄かに用意されたホテル・宿泊所に泊まる。肅々としながらも、華やかな祝祭気分であった。どこもかしこも前夜祭である。すべての人々が笑っていた。

深夜零時。イシユタルーナは既に斎戒沐浴し、身支度を整え終え、自室の小さな祭壇の前に祈りを捧げている。聖句を何度も誦した。聖剣が笑う。

午前一時、ユーグルとリュウはすっかり酔っぱらって、配下の山海賊どもに囲まれながら宿舎に帰った。

「なあ、リュウよ、俺に合う儀典向きの礼服があるか」

「一年前に発注してりや、間に合ったかもしれないが、今頃言うな。ある訳ない。四メートル近い大男が何を今さら。ジヴィーノに余分な儀礼服があると言うなら、別だが」

午前二時。ユリアスは広大な会場を高台から見下ろす。夜陰でほとんど見えないが、遙か彼方まで松明や篝火が燃えているのが見えた。天穹を見上げ、星が鏤められたることに抛って綴られた天文を読む。

「風が吹く、雪が降る。しかあれど難なし。必ずや真幸くあらん」

午前三時、最後の書類に目を通し、ロネはグラスにバーボンを注いで、口に含む。

「ふう。さて、やるか。史上空前絶後、史上最も神聖な式典だ」

月の弓を神官に持たせ、聖剣を佩き、青貂のマントを羽織って、聖騎士を率いた。

東が未だ白まぬ夜明け前に、イヴァン・オクタヴィウスは湯浴みし、昨晚、用意させた冠、聖なる貫頭衣、マフや手袋を再度確認する。首飾りや数珠を確認した。蠟燭に火を点した祭壇の前で祈祷する。厳かな囁きで、聖なる典籍を読誦した。

同じく夜明け前に起きたファルコは家令の用意したネクタイが気に食わず、高級ネクタイ店へ買いに行かせる。未だ店が営業時間前であるにもかかわらず。

「古代の哲人の詩を刺繍してあるものだ、海がテーマのものにしてくれ。聖句なんざ俺にはもったいない。頼むぞ。厳肅で、精密細緻な、濃い奴をな」

ガルニエは香水入りの湯に浸かり、シャンパーニュのグラスを傾ける。準備は完璧であった。髭剃り用のシャボンを立てた壺は微かに湯気を立てている。

玄関に出たゾーイは冷気に震える。革製の長外套も凍った空気をどうにもできないらしい。チエフが口から湯気を吐きながら迎えに来ていた。革手袋に藁を詰めてもどうにもならない。

「やあ、チエフ。相も変わらずだな。もはや、敵はいない。しかし、警備は怠っていないだろうな」

「むろんです。青銅の者たちは怠っていません。聖闘士たちの武装は儀典用も兼ねた神聖で荘厳な儀礼装甲です」

レオヴィンチとミハアンジェロは既に黄金と大理石の壮麗な十六頭立ての龍馬車に乗っていた、それぞれ。

黄金の燦を少しずつ感じ始める。レオヴィンチはミハアンジェロの龍馬車を見ると声を掛けた、

「早いな。俺は豊旗の配置がどうにも気になってな」

「十丈四方の大豊旗だ。動かすなら急いだほうがいいな。一つ動かすと数百動かさなければならぬ時もあるから」 ※一丈は三メートル

「あゝ、杞憂だとよいが。美は数ミリの差でも変ずることがある」

ラフポワは寝惚け眼で齒を磨き、着替えを手伝ってもらっている。床屋は待ち兼ねていた。

「ごめんね、朝ご飯は馬車で食べるから、サンドイッチを用意しておいて」

騎馬や馬車が集まり始め、案内役は大忙し。車寄せは大混雑した。

黎明とともに、アカデミアのユリイカが光輝燦々たる十六枚の翼のある七柱の黄金の龍に牽かせた白銀の天蓋つき馬車に乗り、舞い降りる。それが合図であつたかのように始まつた。太陽が出ずる。

曙光を浴び、立ち昇る炎のように燃え燦めくイシュタルーナは女神のようであつた。聖の聖なる巫女真人は宣言した。

「祈祷する。

この一言だ。『この大地に永遠の平和を』。

神へ希う。

祈りこそが最も聖の聖なる行為だ。未来であり、生命であり、人間の真髄だ。

善き哉、善き哉、めでたし。いやさか 弥栄あれ、スヴァーハー」

「薩婆訶」

一億の人間が一斉に唱和する。大いなる祭りであつた。一億人の聖なるきよらかな祈り。祝祭の日である。一瞬が永劫のような時間であつた。

神に捧げられる壮大な賛、きよめられ、聖化され、数多祭壇にならぶ。果実、蜂蜜、貴腐葡萄で作られた神酒の樽は五百万本。数十万の大香炉が焚き上げた香の煙を漂す。聖歌隊が歌つた。あちこちに設けられた説教台から聖句が読誦され、世界を聖化し、万物を嘉する。

莊嚴、清冽にして、甚深微妙、神聖、崇高な大祭祀儀式典がかくして終わり、神への捧げものは人に下げられ、饗宴の席にあふれた。

飲めや歌えや。大歓声、太陽のシンバルのような笑い。

しかし、天候は怪しくなり始めた。雪雲が集結し、粉雪が舞う。

ラフポワはイシュタルーナの左に、一番高い壇上の席（地上五十メートル）にならんで坐つた。その高みから、彼方まで延々続く列席を遙かに見渡す。壮観だった。遠くの末席

ははつきりとは見えないほどだ。巫女真人の右にユリイカはならぶ。

「凄いわ。本当におめでとう」

「あ、ありがとうございます。って僕が言っちゃっていいかな。あまりにもすべてが変わり過ぎて、何だか信じられないよ。とっても遠くへ来たような気がする」

急激劇的な環境の変化に、今さらあ然とするのであった。思い出す、木の実の粒をイシユタルーナと分け合ったことを、暗い吹雪の中で。

「寒かったなあ」

思い出すだけで寒気が奔るようだった。

ひじ掛けに頬杖を突く。その場に、まったくそぐわない憂愁のポーズであった。でも、場に合うかどうか、人がどう見るかなど、構うような少年ではない。しみじみと想いに耽った。

「暖かいだけでも、幸せだなあ」

今も、屋外なので寒くはある。相変わらず粉雪が舞っていた。だが、金の刺繍に深紅の天蓋があり、それをさらに蓋う天幕もある。近くには幾重にも、暖を取るための炎が焚かれていた。着ている物も軽くてぬくぬくしている。椅子も柔らかくて、暖かいものであった。

百万トンもの肉が炙られて肉汁を滴らせている。赤と青の貴石が象眼された黄金のゴブレットに酒が注がれた。

なみなみとあふれるまで注いで、大いに傾けて呷る。

一段低い席で、ロネやファルコやジョン・スミス、イヴァンやガルニエやアーキやミハアンジェロやレオヴィンチ、ユーグルやリュウ、ユリアスがならんで坐る。

皆華々しく相応しい盛装をしている。何て壮麗なのだろう。鮮やかで艶やかな絹に、刺繍のある儀礼用コート、レース、羽飾りと刺繍の帽子、金の飾り紐、房飾り、大きなカフス、太いネクタイは複雑精緻で色鮮やかな文様、勇壮で美麗で大きな襟を立てて。

絢爛たる装飾、宝飾、巨大な香炉に白檀が焚かれ、王侯貴族よりも遙かに神聖で、高貴だ。

その下は銀の者たち二十五人とネプチュルスの席であった。彼は王位も官位も要らないから、自由に海を渡らせてくれ、胡椒は金より高価だ、とイシユタルーナに懇願した。

ゾーイはしみじみ眺め、

「信じ難いな。この俺がだぜ」

チエフが階段を上がって酒を注ぎに来た。

「皇帝陛下、どうぞ盞を、どうか一杯」

「おゝ、おまえも飲め、今日は、めでたい、実に、めでたい。遂に、人類の夢が完成したのだ。こんな日は永遠に来ないと思っていた、正義の勝利の日は」

足下の絨毯は黄金を積んでも買えないものだ。黄金の大杯、純銀のナイフやフォーク、絵皿もカップも名匠の創った逸品であった。

キャビアやトリュフや去勢した若い雄鶏の肉、鶏卵。甘ウニや牡蠣やオマール海老、エスカルゴやサザエ、鱈や舌ヒラメ、鯛やカツオやヒメジ、スズキ、白身魚のポワレ、熟成したプロシュットやハモン・セラーノの骨つき原木。

牡蠣の殻をナイフで外しながら、ネプチュルスは言う、

「こいつは上モノだ。レモンよりも醤油と酢を混ぜた東大陸ふうが俺の好みだな。や、旨いじゃないか。こいつあ、是非、独占契約をしたいぜ。おい、給仕、コックを呼べ、これはどこの産だ」

何百種類ものチーズ、たくさんのパテ、小さな口の楽しみ、たちに、誰もが舌鼓を打つ。

泡立つビール、芳醇なシャンパーニュ、香しきワイン、深きコニャック、コクと香り深きウシユクベ（オード・デ・ヴィー）。

濃いのに爽やかな豊穣なるオリーブ・オイル、蜂蜜や濃厚なバター、純白の生クリームや木苺のソース、マーマレード、ジャム。

白桃や葡萄、チェリーやブルーベリー、苺や柑橘類、胡桃、オリーブの実。

アーキが伊勢海老を頬張って感に堪えぬと言うように眉を顰め、唸る。

「うーむ、凄い。茹でられても活きがよいことがわかるが、絶妙なソース、それに皿の縁にシヨコラの粉が少し振ってあって、食べる時に香りが鼻腔から入って、海老の味と喉で交わる。何とも言えないハルモニアだ。この料理人を雇いたい」

「私だ」

ロネがにやりと笑った。

「構わぬが、高いぞ」

ユリアスが生地繊維や素材を見て感心する。

「素晴らしいですね。仏国土に生まれ変わったかのような気分です」

彼が手に触って確かめている生地は、白と赤と金と深き青とによる、美しいテーブル・

クロスであった。クロスを安定させる吊り下げ重しも細やかな彫りや鏤めのされた金である。房飾りが四隅についた色鮮やかな繻子のクッションが輝くようであった。絹糸のつややかな照りの何とあでやかなことか。

豪奢、逸楽。

美しき古代ギリシア風の音楽、管弦楽、胡弓やシタールの調べ、琴や笙や箏や龍笛の邦楽。歌劇や南方の舞い、豎琴を持った詩人が叙事詩を歌い、琵琶法師が吟ずる。頌歌、鎮魂の詩歌も。

「よかった、あゝ、本当によかった」

鴨肉のオレンジ・ソース添えを頬張って、幸福そうに微笑する。葡萄やサクランボやブルーベリーを摘み、ラフポワは林檎と蜂蜜のジュースをおかわりした。金と貴石に飾られたゴブレットを受け取って飲み干し、

「ふう」

息を吐いて、深々と坐りなおす。吹雪は優しい。天空も大地も、すべて世界は円満で、光にあふれ、豊穡であった。もう瞼がゆつくりと落ちて始める。

天候は荒れ始め、昼近くには吹雪となるが、それが子守唄か、ラフポワはお腹一杯になって、眠ってしまうのであった。

雪礫など意にも介さず、ジヴィーノは雄叫ぶ、

「おおい、未だか、もっと持って来ーい」

五十キログラムのステーキ肉を平らげ、ビールを樽で二杯飲んだ。

ユリアスとイヴァンの議論は終わりがなかった。最新の学問と未来の哲学、各地域の情報と国際情勢、真理する見解と宗教・イデオロギーの行方についてであった。

「検証できないものは取り上げるに値しないという、検証原則は尊いが、見聞がそのとおりであるということは検証はできない。だいたい、諸考概の輪郭が定形であるという保証もない」

「感覚や思考の束の根底にそれらの主体となる真珠（核）があるかのように思い込ませるエゴ・トリックを想定すると、なおさらだ」

「そもそも、すべてインパルスに過ぎない。物的な現象だ。我らが内部から見て他人がいる、私がいる、と映るが、外から見れば、ただの、電気的な発火現象でしかない。化学的なね」

レオヴィンチとミハアンジェロとガルニエとアーキとは、今後の都市計画と内政の運営

について論じて倦むことがない。

ユーグルとリュウはバカバカしい逸話に花を咲かせ、美女を見ては論評し、時折、ネプチュルスの儲け話に耳を傾けた。

ジョン・スミスは難しい顔をしてキャビアを摘まみ、黙ってウォッカを飲み、太い蟹の脚やら甲羅やらを割って食べ続けている。

ロネ・ストリントベリイは満足気にすべてを見渡す。ファルコが大杯を持ってやって来て、無理矢理に肩を組み、大いに笑う。

健康な、屈託のない哄笑であった。

「なあ、最高じゃないか」

「そうだな、怖いぐらいに」

「ふ、相変わらずだな」

「おまえもな、ファルコ」

「あゝ、そうだとも。世界がそう簡単に変わってしまっただけのものか」

「そのとおりだ。」

イシュタルーナも変わるまいな」

静かに清水の聖杯を傾け、葡萄を摘まみ、イシュタルーナは静かに宴を見守るだけであった。

宴は翌朝まで続いたが、巫女真人は終いまでは居らず、早暁、イシュクンディナヴィア半島に戻り、祠の狭き閑居に祈る。一生を巫女として、聖の聖なるいぬやね神に捧げると誓い、以後、ほとんど外へ出ることはなかった。まったくなかった訳ではないが。

✦ Epilogue ✦

静かな、春の雨が降っていた。

潮風も優しい。

イシュタルーナはかつての膂力皇帝、羅范が蟄居している屋敷を訪れた。神にも近い一代の英雄が今、時を無為に過ごしている。

砂漠から離れた、海に近い、石灰岩の丘。風靡く草地に立ちて望めば、大陸を東西南北の四つに裂く大海洋、世界の中心にあるマル・メディテラーノが見えた。

「ラハンよ、いかが過ごしているか」

世界一の巨漢はぎろりと巫女真人をねめつける。

凶暴で、獰猛な野獣のように。そう、生けとし生けるものの中で、これほど獰猛な獣はいない。

餓えた獅子の群れも暴れる巨象も屠った男、抹香鯨や巨大なサメや鯨ですら、海に於いてさえも、彼には殺されるであろう。

「体を鍛えている。」

いつでも、おまえを斃して、世界を征服できるようにな」

「ふ」

イシュタルーナは鼻で笑った。

「おまえは、英雄の器ではないな。その程度か」

羅范は考えていた。彼女は独りで来た。殺せるか？ 腰に佩く太陽の剣を見る。神々しいオーラが黄金の霧となって、鞘からも滲みあふれていた。

いや、無理だ。

イシュタルーナはそんな彼の考えを読んでいた。

「あたしを殺しても、世界は変わらない。歴史も何も変わらない。ただ一人の人間でしかない。

何もない。ただ、生きて死ぬだけだ。

不思議だな、こうして意識している意識も、いつしかなくなってしまふのだ。あたしにとつて、これは生まれた時からずっとあったものだから、これがなくなることの想像がつかない」

黙って、かつての膂力皇帝は聴いていた。

「何しに来た。俺を蔑み、嘲笑うためか、慰みものにするためか」

彼が本気で言っていないとわかっていても、侮辱を感じていることも事実であると覚っている。

「いや。」

あたしは幸福だ。なぜなら、幸福と感じているからだ。蔑んだり、責めたりする欲求は生じない」

羅范は激しい衝撃を受け、項垂れた。だが、イシュタルーナが帰ろうとした時、
「勝負しないか」

巫女騎士は振り向く。

「剣でか」

見定めるように羅范はじつとイシュタルーナの双眸の奥底を覗き込みながら、

「そうだ」

巫女騎士は無表情であった。

「よからう」

二人は対峙した。

羅范の豪剛剣は刃の幅一メートル、厚さ十センチメートル、刃渡り三メートル以上もある。イシュタルーナなど一振りの風圧で吹き飛びそうであった。

実際、一振りで地面を揺るがし、風圧で灌木を倒し、空気との摩擦で草を燃え上がらせる剣は大岩を両断に斬り、石灰岩の大地を地割れのごとく裂く。

イシュタルーナは鞘から抜かず、自然に躲していた。

哀しみのまなざしで、太陽の剣を抜く。

その頃の太陽の剣は、聖なるイの御徴と、それを囲む角のある原蛇の円環とが刃紋で泛び上がり、さらにそれを囲む繁縷なる真究竟真実義の真言聖咒が自然と彫られ、その上にも繁縷なる神聖なる龍文が刃紋として泛び、その美しいグラデーションと言いい、鮮やかさ、睿らかさと言いい、いかなる詩歌にも表すことも、喩えようすらもなかった。永遠永劫永久の真究竟の真実義である。

その光輝の凄まじさ、眩さは全宇宙を普く斉しく照らす畢竟の太陽のようであった。いりやぬ神の双眸のようでもある。

燦々たる光で、羅范は斃れた。斃れざるを得ないであろう。

享年二十七歳。

ゾーイは久しぶりにチエフと会った。

皇帝ともなると、そうそう簡単に大枢機卿とは会えない。今は二人ともヒムロに来ていたので、久々の邂逅となったわけであった。

「それはそうと、羅范が没したそうだな」

チエフは何か言いかける。だが、ゾーイはその言葉を聞く前に、言いたい言葉があった。

「俺は幸せな死だったと思う。もし、そうでなかったとしても、そう想いたい、つてのも

あるがな。ふ」

感傷的な表情を見せる。

「そうですか。いや、とにかくにも、ええ、困ったものです。イシュタルーナ様が暗殺したと噂されて。巫女神人様の聖性に瑕疵が着くと統治の求心力にも影響が出ます。小さなほころびも裂けめになるかもしれません。政治的に利用する者も出るかもしれません」

「まあ、状況的には考えれば、噂も無理からぬところだな。普通の考えだ。さように思われても、仕方ない。巫女真人様に限っては、そんなことはあるまいがね。

愚かな、卑しい人間たちは自分を基準にするからな。ふ。わかり易い。

イシュタルーナ様はいつものように気にしていないんだろうな」

「何も気にされません。昔から」

ラフポワは金糸の刺繍のされた黒いシルクの貫頭衣で、縁がクリムゾンレッドの文様に型染めされた聖服を着て、大理石の台座の上にある金箔の椅子に坐って、大きな暖炉の炎に頬を照らされながら、シニクとマイケル・ハンマーからの陳情のような書簡を読んでいた。

諮問会議のユリアスとゾーイとチエフを執務室に呼ぶ。

「よお、ラフポワ陛下」

「からかわないでよ、ゾーイ」

ユリアスは丁寧にお辞儀をした。

「ラフポワ陛下にあらましましては、ご機嫌麗しゅうあられ、慶賀の至り、何よりでございます」

「やめてよ、ユリアス」

ゾーイは嗤った。

「丁寧でも、ぞんざいでも嫌なんだな、ラフポワ」

「そうだよ、この地位そのものが嫌なんだ」

「おまえのために、一万キロメートルを翼あるトナカイの橇で飛ばして来たんだぜ。感謝してくれよ」

「うん、ごめんね、わかってるよ」

ユリアスが尋ね、

「いかがされましたか」

「ああ、これだよ」

書簡を差し出す。

三人は一読して、「ふむ、なるほど」

内容は、羅范の死を暗殺と疑い、いや、決めつけて非難し、暗殺が自分たちの身にも及ぶのではと恐怖・猜疑・邪推・憤激して書かれたもので、『平和を誓い合った我々を殺すことは約束違反であり、人道から外れ、条約にも反する』という趣旨であった。二人が謀反を企み、連絡を取り合っていることを既に知っていたゾーイたちは大いに面白がっていた。

「自分たちの謀反計画は棚に上げ、いったい、何を言っているのか。やれやれ」

「まあ、そう言うな、チエフ。心の汚い連中というのは、得てしてこういうものだ、赦してやれ」

そう言つて、ゾーイは自らのジョークにクックツツと笑う。嗤う気になれぬチエフは、

「羅范と違って、殺されても仕方ない連中です」

「羅范は殺されていない。自害のようなものさ、イシュタルーナは何も言わないけれどね、僕にはわかるよ。シニクやマイケルの言うことは、根底を見失っている。そもそも、彼らに裏切りだの、条約違反だの、言う資格はないよ」

「まあ、そういう奴らに限ってそういうものさ。クレーマーみたいなもんだ。どうします。この際、殺しますか」

「バカなこと言わないでよ。疑いを晴らして。イシュタルーナの」

ゾーイは咳払いした。

「巫女真人様は、お望みではないと思うがね」

「僕が望む。ただ、それだけだ」

「おやおや、皇帝のような我儘さだ」

「聖天帝皇だよ」

ゾーイもチエフも笑わなかった。ユリアスは再び辞儀する。

「御意のままに。やってみましょう。恐らくは、陰謀があるかと思います」

「陰謀？　なるほど、羅范暗殺説をでっち上げてわざと流布・喧伝している者たちがそち
ここにいるのは知っている。聖性に瑕疵をつけようとする奴らだ。」

で、どうやってやるんだ？ 脅かすのか？」

ゾーイがお道化で尋ねても、ユリアスは物静かに、

「いいえ」

「理など説いても、聞かぬ奴らだぞ」

「叡智こそ生きる力です。この陰謀は恐らく、もう少し深いものでしょう」

「ふむ。そうかもな。そこまで読むか。ラフポワ、ユリアスに任せておけば、安心だ」

ラフポワは安堵した。ユリアスは微笑する。ラフポワのその表情が見たかったからであった。少年兵であった聖天帝皇は笑みでうなずく。

「うん、お願いします」

古王国コプトエジヤの庶子と思う、ラフポワこそは知恵者の師範であり、将の将であると。沛の劉邦のように。

かつて、神聖シルヴィエ帝国の大枢機卿であったイヴィルは神カム彝い啊あ呬れ厨ず御の降臨後、奴隷の身分に堕ちた。

しかし、由縁あって、或る王の許で座興の語り部などをする。そのうちに、智慧巧みな彼は相談役となり、奴隷の身分から解放され、*素*の位階となっていた。要領よく生きて、身分不相応に羽振りの良い地位を得て、チャンスをつかむ。今、縋子張りの肘掛け椅子に頬杖突いて思案気に坐っていた。

かつて、自分こそは次期絶対神聖皇帝たらんと野心していた彼はヴォードのマイケル・ハンマーの秘かな後ろ楯（神聖帝国への背信行為であると言ってもよい）によって力を蓄え、いつかは神聖シルヴィエ帝国を取り戻そうと希い、さらに、今は絶対神聖皇帝を廃位されたシニクへ、執念深く、（一度は皇位を継いだことを）逆恨みをし、あろうことか復讐をしようと謀っていた。

羅范の死を逸早く知らせ、彼らの身を案ずる良き味方のように振舞い、彼らの危機感を煽る。羅范の死の理由を正確に推察していながら、二人には連名で直訴状を書くことを勧めた。

（ふ、飽くまでも、善意の第三者として、勧めただけさ。勧めただけ。教唆した訳じゃない。罪はない）などと独り言ちてほくそ笑みながら。

イシユタルーナを誹謗中傷すれば、神の裁きがあるう、恩を受けたマイケル・ハマー（む

ろん、イヴィルへのハマーの支援は打算の上でのものだが）をも巻き込んで。そう計算していた。

その上、イシユタルーナの聖性にも一疑が差し込まれば、巫女真人への復讐にもなるなどと思料し、腹いせを感じる。

彼女の絶対性は神に基づくので、否定のしようもないが、その完全なる壁に瑕疵を与えることぐらいは、神もお赦しになろう、などと勝手に考えていた。

そんな折、来客と訊いて怪訝な顔をする。

「何者か」

取り次いだ者は言う、

「何でもコプトエジャの旧友だとか」

イヴィルの表情は苦虫を潰したようになった。

午前の早い時間、この辺りはまだ空気がきよらか過ぎる時刻である。イキリヤヌートにて参拝を終えた後、ユリアスは謹んで尊顔を拝すべく、巫女真人イシユタルーナの居所に寄った。

ユリアスの姿を見ると、いつになく力ない、とても優しい眼で、彼女は言う、

「要らぬ苦勞を掛けたようだな」

「ご存知でしたか。」

イヴィルを脅しました。神はすべてを知っていると。さしもの彼も、一筆書かせた時の手が震えていました。

知恵ある者ゆえ、神の怖ろしさを知り、畏れています。

書面を見て、シニクもマイケルも己の浅はかさ、癡かさを悟ったようです」

「なるほど。人は興味深い。だが、興味はない」

ユリアスは清らかに笑った。

「いっそのこと、彼を絶対神聖皇帝にしてやったら、とっても面白いとも思うのですが。滑稽で。」

さぞかし、さまざまな政策を練り、その裏で陰謀を企み、偉大な事業を展開して歴史に燦然と名を遺すでしょうね。

尤も、この世は滑稽な者たちばかりですが」

イシユタルーナであつてすらも、苦笑せざるを得ない。

「それはさすがに廻り過ぎだな。今や神聖シルヴィエの皇帝など、何の意味もない。すべては見せ掛けで、虚しい。しかし、切実な人には切実なのだ。

紙幣や貨幣と同じだ。実在するものは印刷のある紙か、鑄造された金属だが、現実には一ドル、一ユーロ、一ポンド、一元、一ウオン、一円という現実であつて、社会に生きる人々には切実だ。実に。

畢竟、すべてはそういう感じだ。そういう絡繰り、構造と言うのか？ 只管ひたすらそれでしかない。

今日に始まつたことではないが」

賢者はあきらめ顔で言う、

「仕方ありませんね。どうあつても避け難いものです。純真無垢な子どもたちですらも、私利私欲の鬼塊おにかたまりなのですから」

「神が定めた。我が意思は在るが、ないというものですすらもない。ただ、ただ、強く生きるのみだ」

完